本庄市遺跡調査会報告書　第29集

田端中原遺跡

たばたなかはらいせき

— 板碑を伴う中世火葬墓群の調査 —

2010

本庄市遺跡調査会

序

本遺跡の位置する本庄市児玉町田端の地は、古くから鎌倉街道上杉道が通り、歴史的な景観が残された田園風景の美しいところです。しかし、児玉市街の西側に近接しておりますところから徐々に開発が進み、これらの歴史的な積み重ねによって形づくられてきた景観も徐々に失われつつあります。

ここに報告する田端中原遺跡は、古くから板碑などが多量に出土したことで知られていた著名な遺跡であります。今回の調査地点からは、これらの板碑に加え、さらに多量の板碑が埋納された状態で発見されました。板碑というのは、緑泥片岩でつくられた中世の供養塔婆ですが、本遺跡はこの板碑の発掘された埼玉県内でも有数の遺跡であるということができるでしょう。

このたび、発掘調査された多量の板碑をはじめとする埋蔵文化財は、これらの発掘された状況を示す多くの写真や図面類とともに記録として保存することで、永く後世に伝えることになりました。

地域に育まれたかけがえのない埋蔵文化財は、この地域の歴史を理解するための基礎資料であり、私たちの文化的な生活や地域の未来を切り開くための糧となるものでしょう。埋蔵文化財は、それぞれに固有の歴史性をもったものであります。これらの文化財は、地域の中で培われた知識や経験の中に脈々と息づいている歴史の中で位置づけられることによって輝きを放つものです。

このささやかな発掘調査報告書は、この地域を理解するためのひとつの資料であるに過ぎませんが、教育や研究にたずさわる皆様はもとより、この地域の市民の皆様の郷土の理解のためのご参考となりえるならば幸いです。小さな歩みではありますが、我が郷土が生んだ塙保己一先生が「世のため後のために」として研鑽されたことに学びながら、地域に残された資料を日々積み重ねながら、文化財保護に取り組んでいく所存であります。

ここに発掘調査報告書が刊行できましたことは、伏見建設株式会社をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご理解とご協力の賜と深く感謝申し上げます。

平成22年9月

本庄市遺跡調査会

会長　茂木孝彦

例　　言

1．本書は、埼玉県本庄市児玉町大字田端字中原 308 － 1 に所在する田端中原遺跡（No. 54 － 111）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、伏見建設株式会社の建売分譲住宅建設に先立つ埋蔵文化財保存事業として、平成３年度に児玉町遺跡調査会が実施したものである。

3．発掘調査および整理・報告に要した経費は、伏見建設株式会社の委託金である。

4．本報告書にかかる発掘調査は、鈴木徳雄（児玉町教育委員会社会教育課主任：当時）および徳山寿樹（児玉町教育委員会社会教育課主事：当時）が担当した。

5．本書の編集は、尾内俊彦の協力を得て鈴木徳雄が行い、第Ⅲ章１・２は尾内が、その他については鈴木が行った。なお、遺物の分類・実測・製図および観察表については、(有)毛野考古学研究所に委託して実施し、観察表作成及び、写真撮影を山本千春が担当した。

6．本書に掲載した出土遺物、遺構・遺物の実測図ならびに写真等の資料は、掲載以外の資料を含め、本庄市教育委員会において保管している。

7．発掘調査及び本書の作成にあたっては下記の方々の御助言・御教示を賜った。記して感謝いたします。(順不同・敬称略)

赤熊浩一、池田敏宏、大屋道則、小川卓也、金子彰男、雉岡恵一、坂本和俊、櫻井和哉、
外尾常人、高橋一夫、田村　誠、知久裕昭、　利根川章彦、鳥羽政之、永井智教、中沢良一、
長滝歳康、中村倉司、長谷川典明、平田重之、福田貴之、丸山　修、宮本直樹、矢内　勲、
山口逸弘、
埼玉県市町村支援部生涯学習文化財課、児玉郡市文化財担当者会

8．本書作成にかかる主たる作業は、調査担当者および下記の者が行った。

尾内俊彦、田口照代、福島礼子、渋谷裕子、藤重千恵子、石田満理、半澤　健、半澤利江、
渡辺博子、和久拓照、山崎一男

田端中原遺跡発掘調査組織　児玉町遺跡調査会（平成３年度：抜粋）

会　長	野口敏雄	児玉町教育委員会教育長	
理　事	田島三郎	児玉町文化財保護審議委員長	
	清水守雄	児玉町文化財保護審議委員	
	日向國俊	児玉町文化財保護審議委員	
	中兼久偉	児玉町文化財保護審議委員	
	武内和雄	児玉町文化財保護審議委員	
	吉川　豊	児玉町教育委員会社会教育課長	
幹　事	立花　勲	児玉町教育委員会社会教育課長補佐兼図書館長	
	前川由雄	〃	社会教育課長補佐兼社会教育係長
	金子幸弘	〃	主任
	恋河内昭彦	〃	主事
調査員	鈴木徳雄	〃	主任
	徳山寿樹	〃	主事
	尾内俊彦	児玉町遺跡調査会　調査員	

田端中原遺跡整理・報告組織　本庄市遺跡調査会（平成22年度）

会　長	茂木孝彦	本庄市教育委員会教育長	
理　事	清水守雄	本庄市文化財保護審議委員	
	腰塚　修	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）	
監　事	八木　茂	本庄市監査委員事務局長	
	田島弘行	本庄市会計課長	
幹　事	金井孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）	
	鈴木徳雄	〃	副参事兼課長補佐
	太田博之	〃	埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃	埋蔵文化財係主査
	大熊季広	〃	埋蔵文化財係主査
	松本　完	〃	埋蔵文化財係主任
	松澤浩一	〃	埋蔵文化財係主任
	的野善行	〃	埋蔵文化財係臨時職員

凡　　例

本書に掲載した遺構図、遺物実測図、および観察表などの指示は、以下のとおりである。

1．遺跡全測図、個別遺構図などにおける方位記号は、すべて座標北を示す。

2．調査区におけるグリッドは、上記座標に基づき４ｍ×４ｍ方眼で設定している。グリッドの呼称は任意でＸ座標をアラビヤ数字、Ｙ座標をアルファベットとし、呼称する場合はＹ－Ｘの順で表している。

3．測量、実測図の縮尺は原則として下記のとおりである。

〔遺構〕

住居跡　１/60　　炉跡・カマド、土坑　１/30

〔遺物〕

土器　１/４（まれに１/６）　　板碑　１/12　　銭貨　１/２

4．土層断面図およびエレベーション図における水平数値は海抜高度を示し、単位はｍである。

5．遺構名は以下の略号で表記した部分がある。

ＳＩ…竪穴住居跡　　ＳＤ…溝状遺構　　ＳＫ…土坑

6．本書に用いた地形図には、国土地理院発行の 1/25,000、および児玉町都市計画図（1/2,500）を改編・転載した。

7．測量・実測図内のアミ部の指示内容は、以下のとおりである。

…ローム地山　　…炉跡および焼土　　…板碑など石製品の断面

8．観察表中の（　）は推定値、〔　〕は残存値、―は計測不可能を表している。

目　次

序
例言
凡例
目次

挿図目次
挿表目次
写真図版目次

Ⅰ　発掘調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3
　1　地理的環境 …… 3
　2　歴史的環境 …… 4
Ⅲ　発掘調査の概要 …… 7
　1　調査遺跡の概要 …… 7
　2　検出遺構の概要 …… 8
Ⅳ　田端中原遺跡出土の板碑群をめぐって …… 99
　1　板碑製作工程と変化 …… 99
　2　板碑の製作と流通の変化 …… 103
　3　板碑の造立と埋置 ― 田端中原遺跡の地位 ― …… 107

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

図 1　周辺の遺跡 …… 2
図 2　遺跡位置図 …… 6
図 3　遺跡全体図 …… 9
図 4　SI－01 平面図および土層断面図 …… 10
図 5　SI－01 出土遺物 …… 11
図 6　SI－02 平面図および土層断面図 …… 12
図 7　SI－02 出土遺物 …… 13
図 8　SI－03 平面図および土層断面図 …… 14
図 9　SI－03 出土遺物 …… 15
図 10　SI－04 平面図および土層断面図 …… 16
図 11　SI－04 出土遺物 (1) …… 16
図 12　SI－04 出土遺物 (2) …… 17
図 13　SI－05 平面図および土層断面図 …… 18
図 14　SI－05 出土遺物 …… 19
図 15　SI－06 平面図および土層断面図 …… 20
図 16　SI－06 出土遺物 …… 21
図 17　SI－07 平面図および土層断面図 …… 22
図 18　SI－07 出土遺物 (1) …… 22
図 19　SI－07 出土遺物 (2) …… 23
図 20　SD－01 土層断面図 …… 24
図 21　SD－02 土層断面図 …… 24
図 22　SD－02 出土遺物 …… 25
図 23　土坑平面図および土層断面図 (1) …… 26
図 24　土坑平面図および土層断面図 (2) …… 27
図 25　土坑平面図および土層断面図 (3) …… 28
図 26　土坑平面図および土層断面図 (4) …… 29
図 27　土坑平面図および土層断面図 (5) …… 30
図 28　土坑平面図および土層断面図 (6) …… 31
図 29　土坑平面図および土層断面図 (7) …… 32
図 30　土坑平面図および土層断面図 (8) …… 33
図 31　土坑平面図および土層断面図 (9) …… 34
図 32　土坑平面図および土層断面図 (10) … 35
図 33　土坑平面図および土層断面図 (11) … 36
図 34　土坑平面図および土層断面図 (12) … 37
図 35　土坑平面図および土層断面図 (13) … 38
図 36　土坑平面図および土層断面図 (14) … 39
図 37　土坑平面図および土層断面図 (15) … 40
図 38　土坑平面図および土層断面図 (16) … 41
図 39　土坑平面図および土層断面図 (17) … 42
図 40　土坑平面図および土層断面図 (18) … 43
図 41　土坑平面図および土層断面図 (19) … 44
図 42　土坑平面図および土層断面図 (20) … 45
図 43　土坑平面図および土層断面図 (21) … 46
図 44　土坑平面図および土層断面図 (22) … 47
図 45　土坑平面図および土層断面図 (23) … 48
図 46　土坑平面図および土層断面図 (24) … 49
図 47　土坑平面図および土層断面図 (25) … 50
図 48　土坑平面図および土層断面図 (26) … 51
図 49　土坑平面図および土層断面図 (27) … 52
図 50　土坑平面図および土層断面図 (28) … 53
図 51　土坑平面図および土層断面図 (29) … 54
図 52　土坑平面図および土層断面図 (30) … 55
図 53　土坑平面図および土層断面図 (31) … 56
図 54　土坑平面図および土層断面図 (32) … 57
図 55　土坑平面図および土層断面図 (33) … 58
図 56　土坑出土遺物 (1) …… 74
図 57　土坑出土遺物 (2) …… 75
図 58　土坑出土遺物 (3) …… 76
図 59　土坑出土遺物 (4) …… 77
図 60　土坑出土遺物 (5) …… 78
図 61　土坑出土遺物 (6) …… 79
図 62　土坑出土遺物 (7) …… 80
図 63　土坑出土遺物 (8) …… 81
図 64　土坑出土遺物 (9) …… 82
図 65　土坑出土遺物 (10) …… 83
図 66　土坑出土遺物 (11) …… 84
図 67　土坑出土遺物 (12) …… 85
図 68　田端中原遺跡出土古銭 (1) …… 95

図69　田端中原遺跡出土古銭 (2) …… 96
図70　田端中原遺跡出土古銭 (3) …… 97
図71　遺構外出土遺物 (1) …… 97
図72　遺構外出土遺物 (2) …… 98

挿 表 目 次

表 1　SI-01 出土遺物観察表 …… 11
表 2　SI-02 出土遺物観察表 …… 13
表 3　SI-03 出土遺物観察表 …… 15
表 4　SI-04 出土遺物観察表 …… 17
表 5　SI-05 出土遺物観察表 …… 19
表 6　SI-06 出土遺物観察表 …… 21
表 7　SI-07 出土遺物観察表 …… 23
表 8　SD-02 出土遺物観察表 …… 25
表 9　土坑一覧表 (1) …… 70
表10　土坑一覧表 (2) …… 71
表11　土坑一覧表 (3) …… 72
表12　土坑一覧表 (4) …… 73
表13　土坑一覧表 (5) …… 74
表14　SK-01 出土遺物観察表 …… 86
表15　SK-03 出土遺物観察表 …… 86
表16　SK-36 出土遺物観察表 …… 86
表17　SK-39 出土遺物観察表 …… 86
表18　SK-43 出土遺物観察表 …… 86
表19　SK-62 出土遺物観察表 …… 86
表20　SK-63A 出土遺物観察表 …… 87
表21　SK-63B 出土遺物観察表 …… 87
表22　SK-64 出土遺物観察表 …… 87
表23　SK-99A 出土遺物観察表 …… 87
表24　SK-99B 出土遺物観察表 …… 87
表25　SK-102 出土遺物観察表 …… 87
表26　SK-103 出土遺物観察表 …… 87
表27　SK-106 出土遺物観察表 …… 87
表28　SK-115 出土遺物観察表 …… 87
表29　SK-116 出土遺物観察表 …… 88
表30　SK-118 出土遺物観察表 …… 88
表31　SK-119 出土遺物観察表 …… 88
表32　SK-121 出土遺物観察表 …… 88
表33　SK-124 出土遺物観察表 …… 88
表34　SK-125 出土遺物観察表 …… 88
表35　SK-126 出土遺物観察表 …… 88
表36　SK-129 出土遺物観察表 …… 88
表37　SK-132 出土遺物観察表 …… 89
表38　SK-136 出土遺物観察表 …… 89
表39　SK-138 出土遺物観察表 …… 89
表40　SK-144B 出土遺物観察表 …… 89
表41　SK-154 出土遺物観察表 …… 89
表42　SK-160 出土遺物観察表 …… 89
表43　SK-162 出土遺物観察表 …… 90
表44　SK-163 出土遺物観察表 …… 90
表45　SK-180 出土遺物観察表 …… 90
表46　SK-181 出土遺物観察表 …… 90
表47　SK-182 出土遺物観察表 …… 90
表48　SK-183 出土遺物観察表 …… 91
表49　SK-184 出土遺物観察表 …… 91
表50　SK-185 出土遺物観察表 …… 91
表51　SK-186 出土遺物観察表 …… 92
表52　SK-187 出土遺物観察表 (1) …… 92
表53　SK-187 出土遺物観察表 (2) …… 93
表54　SK-188 出土遺物観察表 …… 93
表55　SK-203 出土遺物観察表 …… 93
表56　SK-207 出土遺物観察表 (1) …… 93
表57　SK-207 出土遺物観察表 (2) …… 94
表58　SK-210 出土遺物観察表 …… 94
表59　SK-211 出土遺物観察表 …… 94
表60　SK-223 出土遺物観察表 …… 94
表61　SK-225 出土遺物観察表 …… 94
表62　SK-231 出土遺物観察表 …… 95

表63　SK-232 出土遺物観察表 …… 95
表64　SK-233 出土遺物観察表 …… 95
表65　遺構外出土遺物観察表 …… 98

写真図版目次

写真図版 1　田端中原遺跡 全景
田中供養地
発 掘 風 景
写真図版 2　SI-01　東から
SI-01 遺物出土状態
SI-02　南から
写真図版 3　SI-03　東から
SI-03 炉跡
SI-03 遺物出土状態
写真図版 4　SI-04　北から
SI-04 遺物出土状態
SI-05　北から
写真図版 5　SI-05 炉跡
SI-06　東から
SI-06 炉跡
写真図版 6　SI-06 遺物出土状態 (1)
SI-06 遺物出土状態 (2)
発 掘 風 景
写真図版 7　SI-07　北東から
SI-07 炉跡
SI-02 内 SK-03
写真図版 8　SK-36 板碑出土状態　東から
SK-52　北東から
SK-63　北から
写真図版 9　SK-67 遺物出土状態　東から
SK-73 遺物出土状態　東から
SK-82　西から
写真図版10　SK-93　東から
SK-94　北西から
SK-104　西から
写真図版11　SK-109　西から
SK-112　西から
SK-112 遺物出土状態
写真図版12　SK-114　東から
SK-116 板碑出土状態　西から
SK-118 遺物出土状態　北から
写真図版13　SK-119　南東から
SK-119 遺物出土状態
SK-122　東から
写真図版14　SK-125　南西から
SK-128A　西から
SK-136 宝篋印塔出土状態　西から
写真図版15　SK-156・157　北から
SK-160 遺物出土状態
SK-160 土層断面　北西から
写真図版16　SK-162 板碑出土状態　西から
SK-175
SK-180 板碑出土状態　西から
写真図版17　SK-184 板碑出土状態　西から
SK-185 遺物出土状態　西から
SK-185 周辺遺物出土状態　北から
写真図版18　SK-186 板碑出土状態　西から
SK-187 遺物出土状態　西から
SK-187 板碑出土状態
写真図版19　SK-203・204　北から
SK-207 板碑出土状態　東から
SK-207 板碑出土状態
写真図版20　SK-211 板碑出土状態　北西から
SK-211 遺物出土状態　北西から
SK-216　西から
写真図版21　SK-217・218　西から
SK-225 遺物出土状態　西から

発掘風景
写真図版22　SI－01　出土遺物
SI－02　出土遺物
SI－03　出土遺物
写真図版23　SI－04　出土遺物
SI－05　出土遺物
SI－06　出土遺物
写真図版24　SI－07　出土遺物
SD－02　出土遺物
土坑出土遺物（1）
写真図版25　土坑出土遺物（2）
写真図版26　土坑出土遺物（3）
写真図版27　土坑出土遺物（4）
写真図版28　土坑出土遺物（5）
写真図版29　土坑出土遺物（6）
写真図版30　土坑出土遺物（7）
写真図版31　土坑出土遺物（8）
田端中原遺跡出土古銭（1）
写真図版32　田端中原遺跡出土古銭（2）
遺構外出土遺物

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

本報告にかかる田端中原遺跡の発掘調査は、建売分譲住宅建設に伴って失われる埋蔵文化財の記録保存のために実施されたものであり、発掘調査に至る経緯の概要は、以下のとおりである。

埼玉県児玉郡児玉町大字田端（現本庄市児玉町田端）字中原 308 － 1 の 2,522 ㎡において、伏見建設株式会社の建売分譲住宅建設計画に基づいて、平成元年 9 月 13 日に地権者田中昭治氏から、この予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会及び試掘調査の依頼があったので、現地が周知の埋蔵文化財包蔵地（№54 － 111）　田端中原遺跡に相当し試掘調査の必要がある旨の回答をおこなった。その後、現地の試掘調査の条件が整ったので平成元年 10 月 6 日に試掘調査を実施した結果、開発予定地域の大半に板碑を含む墓坑群および古墳時代の竪穴住居等の埋蔵文化財の所在が確認されたところから、児玉町教育委員会は、試掘調査の結果について平成元年 10 月 7 日付け児教社 251 号で田中昭治氏に回答するとともに、埋蔵文化財の現状変更を最小限に実施するように田中昭治氏および伏見建設株式会社と協議を重ねた。しかし、建売分譲住宅建設による埋蔵文化財への影響は避けがたく、この建売分譲住宅建設によって埋蔵文化財に影響が及ぶと考えられる区域の全域の約 2,500 ㎡の発掘調査を実施する必要が生じた。以上の協議を踏まえて、平成 3 年 2 月 6 日付けで伏見建設株式会社代表取締役斉藤武から児玉町遺跡調査会会長に発掘調査の依頼があったので、児玉町教育委員会の指導に基づいて、児玉町遺跡調査会と伏見建設株式会社との間で埋蔵文化財保存事業委託契約を締結することで、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘の実施にあたって、伏見建設株式会社代表取締役斉藤武より、平成 3 年 3 月 25 日に、文化財保護法 57 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日付け児教社 486 号で埼玉県教育委員会教育長に進達した。この発掘の届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から、児玉町教育委員会教育長あてに、平成 3 年 3 月 29 日付け教文 3-348 号で伏見建設株式会社代表取締役斉藤武に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の通知があり、文化庁の指導による土木工事等の着工前の発掘調査実施の指示があったので児玉町教育委員会教育長は、同日、伏見建設株式会社代表取締役斉藤武あてにこれを送付した。

発掘調査の実施については、児玉町遺跡調査会会長野口敏雄から、平成 3 年 3 月 25 日付けで、文化財保護法 57 条 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日付け児教社 486 号で埼玉県教育委員会教育長に進達した。この届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長より、平成 3 年 6 月 6 日付け委保 5 の 519 号で埋蔵文化財の発掘調査についての指示を含む「埋蔵文化財の発掘について（通知）」が児玉町遺跡調査会会長野口敏雄にあった旨、埼玉県教育委員会教育長から児玉町教育委員会教育長に、平成 3 年 6 月 24 日付け教文 5 － 215 号で通知があったので、同日児玉町遺跡調査会会長に伝達した。

なお、現地の発掘調査は、平成 3 年 4 月 2 日に開始され、平成 3 年 8 月 18 日に終了した。

（本庄市教育委員会文化財保護課）

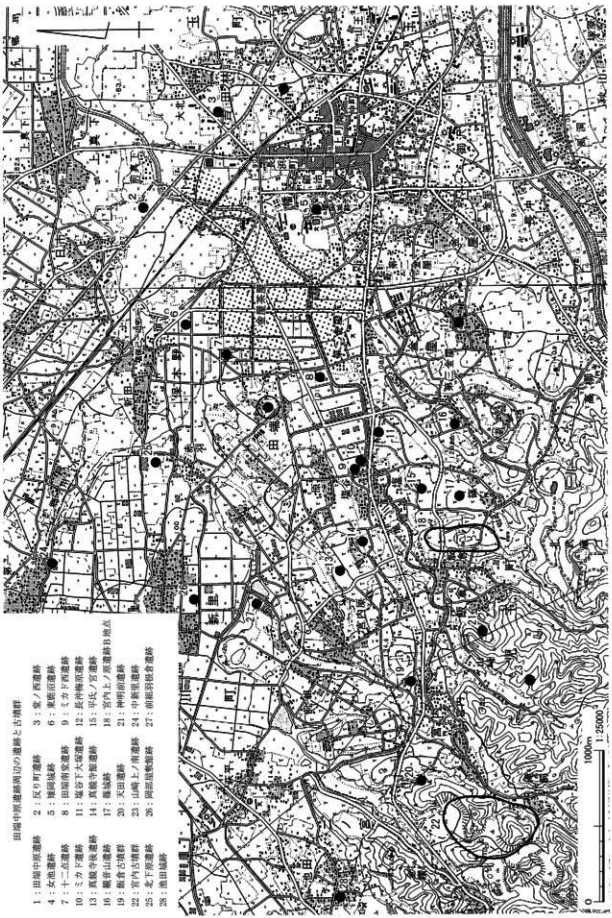

田岡中所遺跡周辺の遺跡と古墳群
1：田岡中所遺跡　2：反り町遺跡　3：堂ノ西遺跡
4：石地遺跡　5：城跡遺跡　6：東恵須遺跡
7：十二点遺跡　8：田岡病院遺跡　9：ミカド西遺跡
10：ミカド遺跡　11：塩谷下大坂遺跡　12：長神橋坂遺跡
13：真福寺南遺跡　14：真福寺館遺跡　15：中尻ノ宮遺跡
16：観音山遺跡　17：梅城跡　18：宮内上ノ原遺跡B地点
19：観音古墳群　20：天田遺跡　21：神明前遺跡
22：宮内古墳群　23：山崎上ノ南遺跡　24：中新堀遺跡
25：北下原遺跡　26：岡部城跡遺跡　27：前橋羽根倉遺跡
28：南田城跡
1:25000
1000m
0

図１　周辺の遺跡

Ⅱ 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

田端中原遺跡の所在する本庄市は、平成18年1月10日に旧「本庄市」と「児玉町」が合併し、人口約83,000人の埼玉県北部の中心的な都市となった。本庄市の市域は、東西約17.2km、南北約17.3km、面積89.71km²に及び、東は深谷市および児玉郡美里町、西は児玉郡神川町、南は秩父郡皆野町および長瀞町、北西は児玉郡上里町、また北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市に接する、埼玉県の北西部に位置している。

本庄市には、市域の北東部に位置する本庄市街にＪＲ高崎線本庄駅が、南西部に位置する児玉市街にはＪＲ八高線児玉駅がある。また、市の北東部には上越新幹線本庄早稲田駅が平成16年3月に開業している。本庄市街の北側には国道17号線が、児玉市街には国道254号線が通り、伊勢崎市から本庄市街を経て児玉市街方向に国道462号線が延びている。また、市域の北東部に関越自動車道本庄・児玉インターチェンジがある。

本庄市の地形は、市域の南東側に八王子－高崎構造線上の断層崖を境に三波川系結晶片岩帯に相当する基盤層をもつ上武山地が位置している。市域の北西側には、関東平野西端を構成する神流川扇状地が展開し、扇端部に位置する深谷断層を境に烏川によって形成された低地帯が展開しており、近世以降ではこの低地帯に利根川が流下している。また、上武山地に接して第三紀層を基盤にもつ児玉丘陵が平野部に半島状に突出しており、山地付近から流下する小河川の浸食のよって幾つもの小支丘に分割されている。児玉丘陵の延長上には、やはり第三紀の丘陵である生野山・浅見山の各残丘が点列状に存在している。

神流川扇状地は、本庄台地とも呼称される低位の台地面を構成するが、この扇状地扇央部には、本遺跡の南側に位置する本庄市児玉町宮内地内に水源を発する、かつて「赤根川」と呼ばれた現在の「女堀川」によって開析された沖積低地が形成されている。また、本遺跡から西に約1kmには、神川町大字二宮所在の延喜式内社である金鑽神社付近に水源を発する金鑽川が流下しており、やがて女堀川と合流し利根川水系の小山川へと注いでいる。

本報告書にかかる田端中原遺跡は、本庄市域の南西側、児玉市街の西約2.2kmの本庄市児玉町田端に所在し、「女堀川」の低地を臨む上武山地から放射状に延びた児玉丘陵のひとつの小支丘の先端から延びる、標高約90mから102mの高位の台地上に位置している。田端中原遺跡の占地する台地面は平坦であり、この高位の台地面と低位の台地面の境界付近に、近年まで湧水を伴う小支谷があり、北側は小支谷に向かって緩やかに傾斜している。また、遺跡の東側は緩やかな傾斜をもって低位の台地面へと続いており、台地の先端は赤根川によって開析された低地帯に接している。また、本遺跡北側の小支谷を挟んで北側にも低位の台地面が延びており、この台地端は北側を旧金鑽川によって形成されたと考えられる低地帯によって開析されている。このように、遺跡の占地する田端の地区は、児玉丘陵の一支丘から延びる高位と低位の台地面が低地帯に接する地形であり、北側を「金鑽川」によって形成されたと考えられる低地帯に、南側を「赤根川」等の女堀川水系によって形成された低地帯によって劃された区域である。

なお、本遺跡北側の小支谷の谷頭には湧水があり、近年まで溜池が設けられていた。この溜池は、おそらく『新編武蔵風土記稿』に記載の有る「用水は村内に溜井を設け」というところの「溜井」に相当するものと推定され、古くから灌漑に用いられていたことがわかる。なお、近年は、住宅化が進行しこの溜池は埋め立てられ古い景観は急速に失われている。田端中原遺跡の位置する台地上からは、東側に金屋条里の水田地帯を挟んで雉岡城の位置する残丘が、南側には秩父郡と境する陣見山や十二天山の稜線が、北側には遠く赤城山をはじめとする上毛の山々の臨むことができる眺望の優れた土地である。

2 歴史的環境

田端中原遺跡の位置する児玉丘陵の周辺は、各時代の遺跡が比較的濃密に分布する区域である。ここでは、従来の発掘調査等の成果に基づいて周辺の地区を含めてこの区域の古墳時代以降の遺跡の推移を概観してみよう。

古墳時代前期では集落遺跡が急速に増加し、丘陵部では宮内上ノ原遺跡B地点をはじめ平氏ノ宮遺跡や前組羽根倉遺跡が、あるいはこれらを臨む低位の山地域には神明前遺跡等が確認されている。これらは、弥生時代後期以来の田に臨む伝統的な集落遺跡の占地を継承するものであり、しばしば弥生式系統の伝統的な装飾をもつ土師器を伴うものである。また、この時期には、女堀川（旧赤根川）の自然堤防上に位置するミカド西遺跡や田端南堂遺跡等が形成されるが、これらは伝統的集落からの進出にかかる遺跡であろう。なお、この時期には新しく後張遺跡群をはじめとする低地域に占地する大規模な集落遺跡が出現する。これらは、女堀川中流域の低地域の灌漑・排水技術を前提とした水田開発を伴う集落跡と推定される。

古墳時代中・後期では、本遺跡の周辺にも真鏡寺後遺跡（大屋・恋河内 1990）や塩谷下大塚遺跡（松澤他 2006 他）あるいはミカド遺跡（坂本 1981）等が形成され、遺跡数や検出される遺構数が爆発的に増加する。また、金屋地区の南側には大規模な長神古墳が形成され、児玉丘陵部には小規模な飯倉古墳群が、あるいは終末期の古墳2基によって構成される宮内古墳群（永井 2005）の存在も注目される。児玉丘陵周辺の奈良・平安時代の集落跡については不明な点が多いが、丘陵部では真鏡寺後遺跡や天田遺跡（恋河内 2000）。また飯倉の山地域では、宝亀二年木簡が検出された山崎上ノ南遺跡（大熊 1998）のような須恵器生産等を行っている集落跡も確認されている。また、低位の台地面では田端地内においても十二天遺跡（鈴木 1981）が、保木野地内においては東鹿沼遺跡（徳山他 1996）等が確認されている。

田端地区の東側は、かつて金屋条里遺跡が展開しており、十二天遺跡の南端において古代の灌漑用排水系統である“田端大溝”と呼ばれる大溝が検出されており、低位の台地端に沿って南西方面に延びていることが確認されている。この用水の水源は、基本的に赤根川水系に属するものと考えることができるが、赤根川も自然的な低地帯に沿って流下するのではなく、金屋条里の水田を灌漑しながら等高線に沿うように北流し、神流川からの取水にかかる九郷用水へと流下している。したがって、この赤根川も古代的な灌漑用排水系統に編成され流路を大きく変更されているものと見做すことができる。このことは田端地区の北側の低地帯に流れていたと考えることのできる金鑽川にも認められ、金鑽川はより上流で九郷用水へと合流している。なお、田端地域の北東で九郷用水の猿楽堰から導水された用水路が赤根川と伏越によって交差しているが、この水路は中世初期の再開墾に伴って導水され

たと考えることができるものである。

平安時代末～鎌倉時代には、真鏡寺後遺跡（恋河内 1990）に中世前半期の方形館である真鏡寺館跡が形成され、遺構群や瓦、中世陶器等が検出されており、中世初期において児玉党塩谷氏の居館を構成する遺構であると推定することができる。また、ミカド遺跡（坂本 1981）では、堀を伴う建物跡等が検出されている。なお、本遺跡周辺の丘陵部には、南北朝期を中心に機能していたと推定される「別所城」や、室町時代を中心とする城跡と推定される「篠城」の存在も注意しておきたい（鈴木 2005）。これらは、先の金鑽大師方面に延びる「大師道」と呼ばれる古道に沿うように位置している。なお、田端地区の北東側には、神川断層によって隆起したと推定されている「円良岡」と呼ばれている小支丘があり、地元では「台山」とも呼ばれており田端からは金屋条里の水田地帯を挟んで臨むことができる。この「円良岡」は、丹党系の安保光泰が日光輪王寺の大般若経を写経のために受け取ったことが知られており、この時期には安保氏の領域になっていたことが窺える。

この地域では、15 世紀後半、享徳の乱以降には五十子陣に関東管領上杉氏の当主上杉房顕が本陣を張り古河公方勢力と対峙した。ちなみに、雉岡城には 15 世紀後半、上杉氏の家臣が築いたとされており、『新編武蔵風土記稿』にも「山内上杉氏居城に築きしに、地形狭きを以て上州平井城へ移り」云々と記されている。この時期における雉岡城の位置は、「鎌倉街道」の「上道」と「上杉道」の分岐点に相当する身馴川（小山川）上流部に位置し、同じ身馴川の下流に位置する「鎌倉街道本庄道」の要衝に位置された五十子陣との相互の関係を考えておくべきであろう。おそらくは、この時期に主要な市の立つ児玉の地をひかえた雉岡城は、五十子陣の重要な兵站の確保の拠点としての位置を占めていたものと推定してよいであろう。ちなみに、この「児玉」に隣接する「金屋」が形成されたのは、おおむね 15 世紀中葉から後半頃であると推定される。

本遺跡の南側に接して、「鎌倉街道上道」から児玉で分岐する「鎌倉街道」の枝道である「上杉道」とされる古道がとおっており、塩谷の丘陵部を経て神流川を越え、関東管領上杉氏の居城であった群馬県藤岡市の平井城方面へと延びている中世の幹道のひとつである。本遺跡は、この「鎌倉街道上杉道」が「児玉」から雉岡付近を経て金屋条里の水田地帯を抜けた最初の台地上に位置している。なお、雉岡城は 16 世紀後半、永禄年間には鉢形城の支城となり、天正七年（1579）には北条氏邦の家臣「横地左近忠春」が城代となり、この時期に城の形態が現在に近い形に造成されたものと推定される。また、本遺跡の南西約 3 km に位置する延喜式内社金鑽神社の背後には「御嶽城」が位置している。この御嶽城は、15 世紀後半には山内上杉氏の重要な軍事拠点として安保氏の居城であったが、天文二十年（1551）には北条氏康に攻略され落城した。このとき、雉岡城も後北条氏の支配下に入り、山内上杉氏の本拠平井城もまた落城した。この時期まで、御嶽城は上杉氏のひとつの軍事的な拠点であった。

本遺跡の所在する「田端村」は、『新編武蔵風土記稿』によると元和年中の開墾と伝えられる。開村以来この「田端村」は、北側の低位の台地面に位置していたようであるが、洪水の頻発により今日の位置に村の中心を移したことが知られている。なお現在、本遺跡の近傍に、十二神社が位置しているが、これは十二天遺跡付近にあった「十二天社」が移転したものであり、彼地には小字名に「十二天」あるいは「天神前」等が残されている。かつて、十二神社境内に、この移転の経緯を示した石碑が存在したが、現在その所在は不明である。なお、近世には十二天社別当の「錫杖寺」の存在が知られているが現在は廃寺となっており詳細については詳らかでない。（鈴木徳雄）

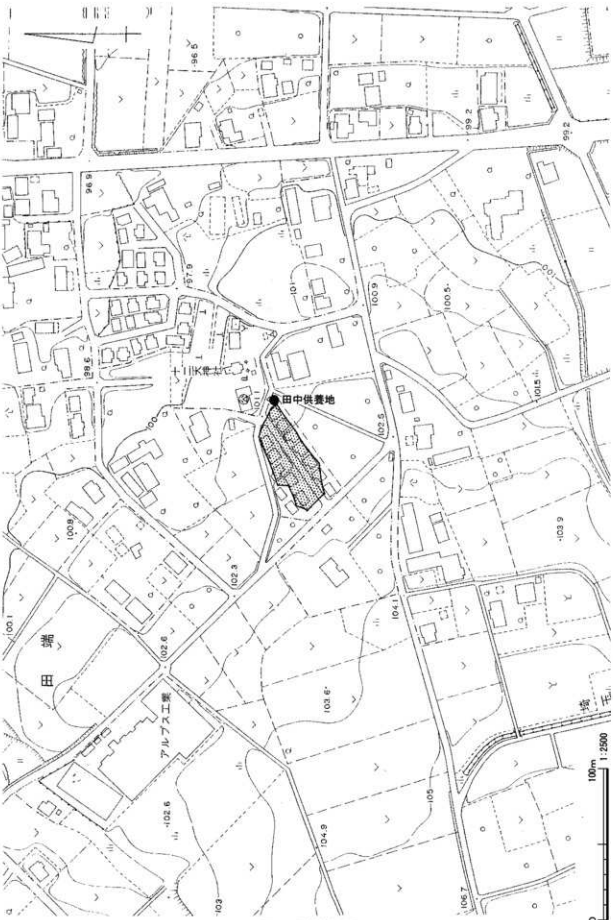


図２　遺跡位置図

Ⅲ 発掘調査の概要

1 調査遺跡の概要

本遺跡は、埼玉県本庄市児玉町大字田端字中原 308-1 に所在する、児玉丘陵より派生した舌状台地の先端部に連なる微高地上に存在している。遺跡の周辺は住宅地や畑の先に東・南・北と水田面に囲われており、西側のみ舌状台地に接続していて徐々に標高が上がっていく。遺跡の標高は海抜 101m 前後を測り、全体に南から北・西から東の方角に向かって低くなって行き、調査区の北側には小さな谷と池が存在する。遺跡の周辺には圃場整備が成される以前の水田面に条里の遺構が確認されており、西側の台地上や低地内の微高地には縄文前期から中世にかけての遺跡が多く検出されている。

本遺跡は住宅建設の要請により調査されたものであるが、この土地は以前より畑の耕作に伴い土中より板碑や宝篋印塔等が出土しており、それらを個人がまとめて供養した田中供養地として古くから知られており、調査以前より何が検出されるか見当が付いている珍しい例となった。表土が除去されると、推定された如く中世の墓坑を主体とした墓地が展開していたほかに古墳時代前期の集落も存在しており、墓地には区画線と思われる溝が検出され中世の道路と思しき溝も見られた。調査区内に現れた墓坑群はこの墓地のほぼ中心に近いところが検出されたものと思われ、墓地自体は主体が更に北から東に向かって存在すると同時に一部は南にも拡がっていると考えられる。墓穴と思われる土坑の総数は 200 基を超えており、これら土坑の掘られた時期の新旧には時間の幅が相当にあるものと思われるが、多くの土坑の下部覆土内には浅間山系Ａ軽石の混入が認められず主として中世に属すると考えられる。

これらの墓坑群は直接埋葬の土葬墓が数の上の主体を成すが、火葬墓も多々認められその割合は 35 ～ 40%程を占める。当時の葬制を考えた場合、火葬を用いて埋葬するのは主として武家階級であり貴族や庶民はこの様な埋葬方法は取っておらず、本遺跡は武家の墓地であった可能性が高い。では、どの時代のどの様な武家がこの墓地に埋葬されているのかはいくつかの説が考えられる。本遺跡から検出された板碑は、表面の大半が風化しており主尊種子や連座に脇侍種子位のみ判別できる物が多く、供養者の名を読み取ることはできないけれど紀年銘を判別できる物が数点存在している。この内で最古の元号は文応元年（1260）または文永元年（1264）の例である。建武４年（1337）、建武年間（詳細不明）、貞治５年（1336）の各例は、北朝方による元号を紀年銘に用いており、供養者が属していた勢力を示唆するものと思われる。本遺跡の土地を所領として管轄していた当時の武家は、当初は当墓地から西に１㎞弱の場所に館を構える児玉党に属する塩谷氏ではないかと考えられるが、現在の神川町に所領を持つ丹党の安保氏が当時活躍していて所領を隣接する児玉郡内に拡張しておりその支配下に入っていた可能性も十分に考えられる。

本遺跡からは、他に時期は前後するが古墳時代前期の五領期に属する住居跡７軒ほどの小規模な集落が検出されており、該期の遺跡は本庄市内においてまばらに点在しているが検出例はそう多くはなく、遺跡間の距離は概ね離れている傾向にある例が多いけれど、ここ田端中原より 200 m程南に低湿地を挟んで小規模集落を検出した田端南堂遺跡が存在しており、遺跡の接近した稀な例として挙げられる。

2 検出遺構の概要

本遺跡から検出された調査対象となる遺構の種類構成は、古墳時代前期五領式に属する住居跡7軒と鎌倉時代から現代にかけての各種土坑が約230基、おそらく中世に属すると思われる溝が2本と時期・性格が特定できないピットが多数である。調査区が設定されたこの土地は、元来畑地として使用されていたもので表土は耕作によって掘り起こされて軟質であり、遺構確認面であるローム層上面まで耕作による撹乱が及んでおり表土として堆積している土量が少なくかつ薄い。また、開墾による樹木の伐根の痕跡と見られる表土の落ち込みも随所に存在しており、土坑群は新旧が入り交ざった複雑な様相を呈して検出された。これらの土坑の中で、墓坑と見られる土坑群は調査区内の西側が疎らである他は全体の三分の二に満遍なく検出され、更に調査区外の西側を除いた全周にわたって拡がっているものと思われる。

これらの土坑群の中で明確に墓であると判定されるものは半数以下であり、墓の可能性があるものを含めてほぼ全体の半分となる。墓か否かは覆土の堆積と出土遺物及び人骨片が検出されたかで判断しているが、表面からの撹乱が多いため時期や性格の判断が着かず用途不明で処理しているものもまた多い。墓と確定された土坑は土葬墓が50強、火葬墓が40弱で他に墓の可能性があるものが30弱と言った所であり、この割合はあまり変わらないと思われるが土葬墓の確率はもう少し上がるのではないだろうか。本遺跡内の墓坑からは遺物が多く検出される傾向があり、六道銭である古銭が100枚を超えて見つかっており石造物の板碑や宝篋印塔、五輪塔の大型のものまで含まれていて、主要なところは別途一覧表に纏めてある。

また、これら土坑群の下から確認された住居跡の所属する集落においても周囲のほぼ平坦な地形を見る限り、集落の占有する範囲は小規模な谷の存在する調査区の北側を除いた外周全体の比較的広い範囲に展開しているものと考えて差し支えないであろう。ただし、一部住居の掘り方の周囲に建て替えと思しき重複と見える部分が存在するが、基本的に各住居跡は単独で検出されており住居間の距離は比較的離れているものが多く、本集落は敷地面積こそ広いが存続期間はそう長いものではなかったと考えられる。他の遺構で目に付く溝に関しては調査区中央を南北方向に縦断して延びている溝があり、これは覆土中に硬化面が存在することや出土遺物等から中世の道路状遺構の掘り方跡ではないかと考えられている。他には調査区北東側にコの字状に掘られた溝が存在するが、こちらは墓地の区画線として用いられた溝ではないかと思われる。

(尾内俊彦)

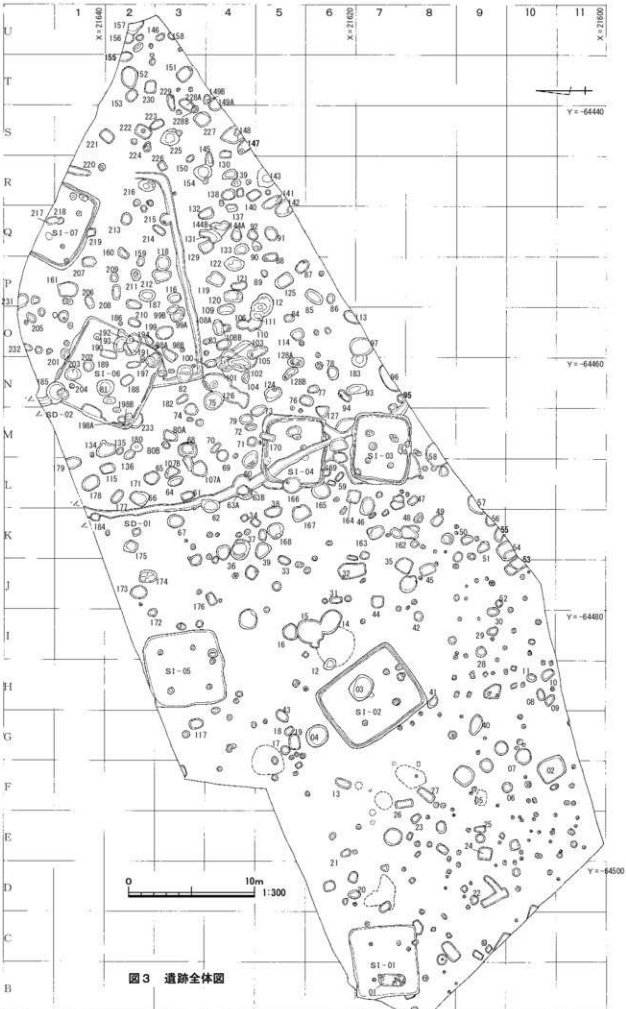
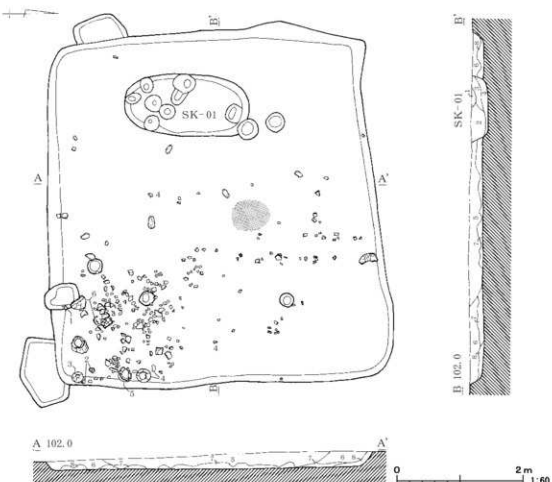

X=21640
X=21620
X=21600
Y=-64440
Y=-64460
Y=-64480
Y=-64500
SI-01
SI-02
SI-03
SI-04
SI-05
SI-06
SI-07
SD-01
SD-02
0
10m
1:300

図３　遺跡全体図

(1) 竪穴住居跡

SI-01（図4・5、表1／写真図版2・22）

調査区の西端に位置し形状は長径5.5m、短径5mの正方形に近い方形を呈し主軸は北に向かうと思われる。壁はやや開き気味に立ち上がっており、壁の最大高は40cmを測り下部に壁溝は存在しない。床面は張り床状を呈しているがやや荒れ気味で、床面上より検出されたピットは4本、土坑が1基（SK-01）で壁の周囲には3基の土坑が住居埋没後に掘り込まれている。これらのうちピット3本は住居の主柱穴と思われもう1本の場所にはSK-01が所在していてその底部に最下部の痕跡が残る。この土坑は覆土の様相と出土遺物から、住居が埋没した後に掘り込まれた中世の墓坑であると考えられる。本住居の炉跡は、痕跡のような場所はあったが明確な構造としては確認されておらず、貯蔵穴等の付帯施設は検出されていない。



SI-01 土層説明

1 明灰色土	浅間山系A軽石を非常に多く含む。（近現代耕作土）しまり・粘性なし。	4 明黄褐色土	ローム質土の風化土が主体。しまり・粘性あり。
2 黒色土	径1mm以下の白色粒子を多く含む。しまりややあり、粘性なし。	5 黒褐色土	径1mm以下の白色粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 黒褐色土	ローム質土を斑状に含み、2に比べて白色粒子が少ない。しまりややあり、粘性なし。	6 暗褐色土	ローム質土を斑状に含む。しまりあり、粘性なし。
		7 暗黄褐色土	暗褐色土を斑状に含む。しまり・粘性あり。
		8 明褐色土	ローム質土主体の層。しまり・粘性あり。

図4　SI-01 平面図および土層断面図

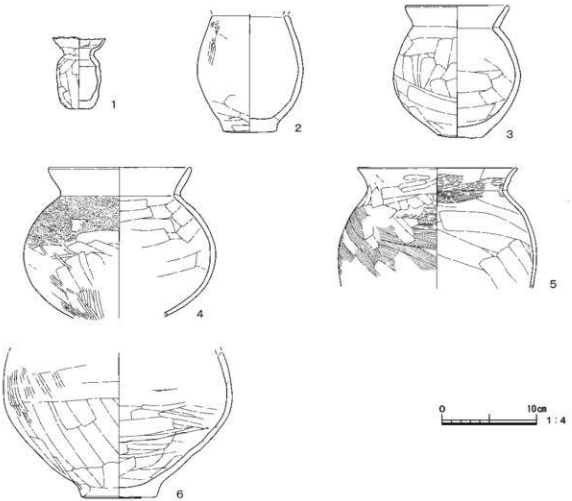


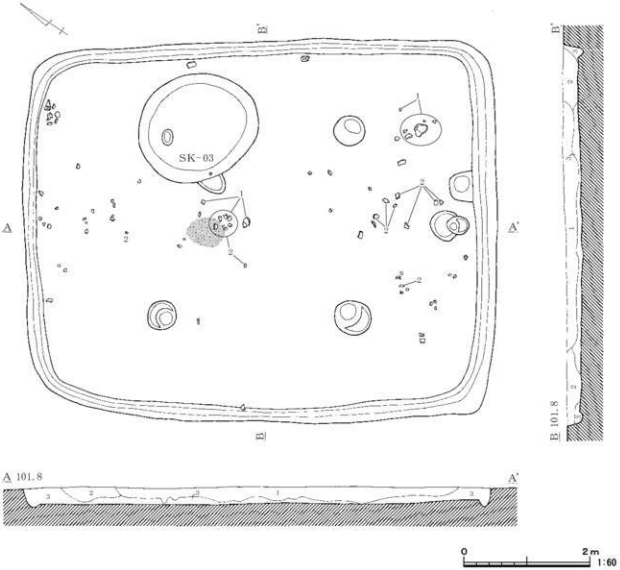
図5　SI-01 出土遺物

表1　SI-01出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 手捏ね	口径　5.5 底径　2.6 器高　7.5	手捏成形。胴部はやや外傾して立ち上がり、口縁部は開く。平底。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	白色粒、細砂礫 内外－にぶい黄橙色	完形。
2	土師器 甕	口径　－ 底径　5.7 器高　－	粘土紐積み上げ成形。小型甕。胴部は中位に膨らみを持つ。平底。	外面－胴部ナデ後ミガキ、底部ナデ。器面摩滅。内面－胴部～底部ナデ。	角閃石、白色粒 内外－橙色	胴部～底部1/3。 口縁部欠損。
3	土師器 甕	口径　11.0 底径　4.8 器高　14.0	粘土紐積み上げ成形。小型甕。胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部は外傾する。平底。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩、白色粒 内外－にぶい黄橙色	ほぼ完形。
4	土師器 壺	口径　(15.2) 底径　－ 器高　－	粘土紐積み上げ成形。胴部はやや張り、中位に最大径を持つ。口縁部はやや外反して開く。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部上位反撚の縄を施文、中位～下位ヘラナデ後荒いミガキ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	角閃石、細砂粒 内－にぶい黄橙色 外－にぶい橙色	口縁部～胴部上半1/2。
5	土師器 甕	口径　(17.0) 底径　－ 器高　－	粘土紐積み上げ成形。胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ。内面－口縁部ハケメ、胴部ヘラナデ。	片岩、赤褐色粒 内外－橙色	口縁部～胴部上位ほぼ完形。
6	土師器 甕	口径　－ 底径　8.0 器高　－	粘土紐積み上げ成形。胴部はやや張り、中位に最大径を持つ。平底。	外面－胴部ヘラナデ後荒いミガキ、底部ナデ。内面－胴部～底部ナデ。	片岩粒、白色粒 内－灰黄褐色 外－橙色	胴部下半～底部ほぼ完形。

SI－02（図６・７、表２／写真図版２・22）

調査区の西側中央Ｇ－７グリッドを中心として位置し、形状は長径7.5ｍ、短径６ｍの長方形を呈しており主軸は北西に取る。壁はやや開き気味に立ち上がっており壁の最大高は28cmを測り、幅20cm前後、深さ５～10cmの壁溝が全体を一周している。床面はよくしまっており、ピット６本と土坑が１基（SK－03）が検出されその内主柱穴と考えられるものは３本あり、他に１本が出入り口に使用されたものと思われる。SK－03は本住居埋没後に掘り込まれたものであり、覆土の様相等から中世の墓穴であると思われ住居には関係なく、炉跡の所在は不明であり貯蔵穴や床下土坑といった住居関連の施設も検出されていない。



SI－02 土層説明

1 黒色土　真っ黒な有機質土層である。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　明茶褐色土を斑状に含む。良くしまっている。
3 茶褐色土　ローム風化土を非常に多く含む。しまり・粘性あり。

図６　SI－02 平面図および土層断面図

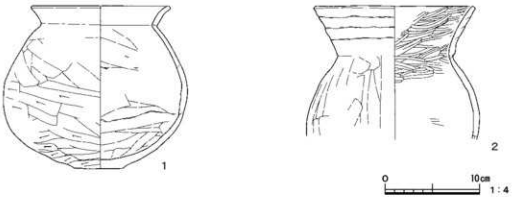


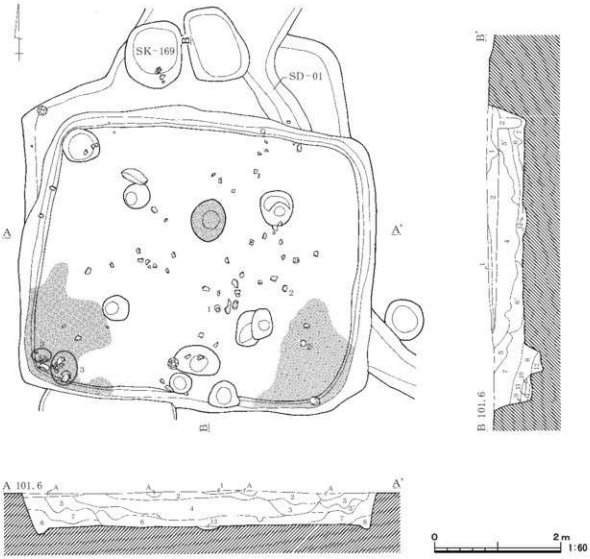
図７　ＳＩ－02 出土遺物

表２　ＳＩ－02 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径　14.8 底径　5.1 器高　17.3	粘土紐積み上げ成形。胴部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。平底。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後上半ヘラナデ、底部ナデ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	石英、黒色粒 内－にぶい黄橙色 外－浅黄橙色	3/5。
2	土師器 甕	口径　17.2 底径　－ 器高　－	粘土紐積み上げ成形。胴部は膨らみを持ち、口縁部は外傾して開く。	外面－口縁部輪積み痕を残し、ヨコナデ、胴部ヘラナデ。内面－口縁部～胴部ミガキ。	黒色粒、赤褐色粒 内外－にぶい橙色	口縁部～胴部上半2/3。

ＳＩ－03（図８・９、表３／写真図版３・22）

調査区の中央南よりＭ－７グリッドを中心として位置し、形状は長径 5.5 m、短径 4.8 mの長方形を呈しており主軸はおそらく北に取るものと思われる。壁は開き気味に立ち上がっており壁の最大高は 52cm を測り、幅 25cm 前後、深さ 10cm 前後の壁溝が全体を一周している。床面は張り床状で良くしまっており、ピットが９本検出されていて内４本が主柱穴と判断され１本が出入り口用の穴と思われる。住居の周囲には、北側から東側にかけて深さ７cm 前後の落ち込みが存在し一見住居の重複の様な外形を示してはいるが、床面として捉えられる所がなく住居とは認定されなかった。また南西側に土坑の様な落ち込みが一箇所存在して壁を切っており、更に溝（ＳＤ－01）が北東の一角を切っているが住居の掘り込みが深い為床面までは破壊されていない。炉跡は住居中央北寄りに検出されているが、他の住居に付帯する施設は確認されていない。



SI-03 土層説明

A 明灰色土	浅間山系A軽石を多量に含む。(現代耕作土) しまりあり。粘性なし。
1 黒色土	浅間山系A軽石を含まない。非常に良くしまっており硬化面を呈す。
2 黒色土	しまり良く、粘性若干あり。
3 暗褐色土	しまり良く、粘性あり。
4 黒色土	非常にきめの細かい有機質土。しまり・粘性あり。
5 暗褐色土	ローム風化土を若干含む。しまり・粘性あり。
5' 暗褐色土	5に同層と思われるが、ローム風化土の混入率が5より多い。
6 暗黄褐色土	ローム風化土が主体であるが、若干の黒色有機質土を含む。しまりあり。粘性強い。
6' 暗黄褐色土	6に類似するが色調がやや暗い。炭化物・焼土粒を若干含む。
7 暗黄褐色土	ローム風化土主体の層である。しまり・粘性強い。
8 暗褐色土	ハードの暗褐色土主体であるが、ローム風化土を斑状に含む。しまり・粘性強い。
9 暗褐色土	8に似るがローム風化土の量が少ない。
10 赤褐色土	焼土によって構成されている。非常に良くしまっている。
11 暗黒色土	しまり弱く、粘性強い。
12 暗黒色土	11に類似するが炭化物・焼土粒を多く含む。
13 黒色土	ローム風化土を若干含む。

図8　SI-03 平面図および土層断面図

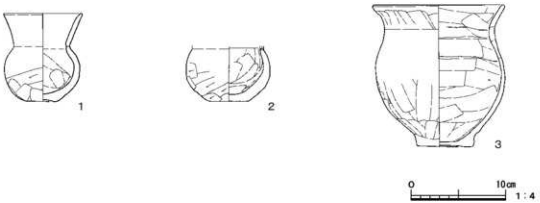


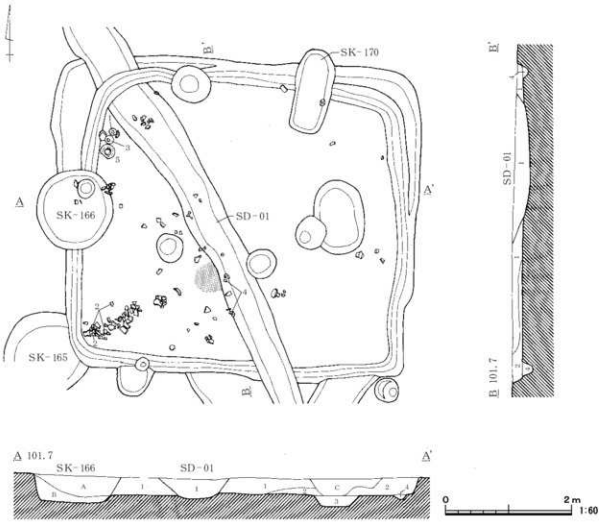
図９　SI－03 出土遺物

表３　SI－03 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坩	口径　8.3 底径　3.2 器高　9.3	粘土紐積み上げ成形。体部は中位に膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。平底。	外面－口縁部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半ヘラケズリ、底部ナデ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	角閃石、白色粒 内外－橙色	ほぼ完形。
2	土師器 坩	口径　－ 底径　4.1 器高　－	粘土紐積み上げ成形。体部は中位に膨らみを持つ。平底。	外面－体部上半ナデ、下半ヘラケズリ、底部ナデ。内面－体部～底部ヘラナデ。	角閃石、赤褐色粒 内－明赤褐色 外－にぶい黄橙色	体部～底部3/4。
3	土師器 甕	口径　14.0 底径　6.0 器高　15.0	粘土紐積み上げ成形。胴部は中位に膨らみを持ち、口縁部はやや外反して開く。平底。	外面－口縁部～胴部ヘラナデ、底部ナデ。内面－口縁部～底部ヘラナデ。	白色粒、黒色粒 内－にぶい黄橙色 外－橙色	4/5。

SI－04（図 10･11･12、表４／写真図版４･23）

調査区中央やや南寄りのＭ－５グリッドを中心として位置し、形状は長径 5.5 m、短径５ｍのほぼ正方形に近い方形を呈しており主軸は北に取っている。壁はやや開き気味に立ち上がっており壁の最大高は 22cm を測り、幅 30cm 弱、深さ２cm 前後の浅い壁溝が全体を一周している。床面はよくしまっており、ピットが４本と土坑が１基検出されているが柱穴と見られるものは１本であり他は性格が不明で、土坑は本住居の付属の施設と見られるがその使用用途は不明である。住居の北側には、住居の重複のような落ち込みが深さ 10cm 程で存在しているが住居とは認定されておらず、他に中世の土坑が３基（SK－165・166・170）壁に掛かっていて、溝（SD－01）が南北に壁と覆土を切って縦断し床面まで掘り込んでいる。炉跡は中央やや南寄りにSD－01 に切られて確認されたが、他の施設は見られなかった。



SI-04 土層説明

1 黒色土	黒色の有機質土層である。しまり・粘性若干あり。	I 黒色土	1に類似する風化土層。しまり・粘性あり。
2 暗褐色土	ローム風化土を多く含む。しまり・粘性あり。	A 暗褐色土	浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
3 黒褐色土	炭化物・焼土粒を多く含む。	B 暗褐色土	浅間山系A軽石を比較的多く含む。しまり・粘性なし。
4 黒褐色土	ローム風化土を多く含む。	C 暗褐色土	浅間山系A軽石を比較的多く含む。しまり・粘性なし。

図10　SI-04 平面図および土層断面図

図11　SI-04 出土遺物 (1)

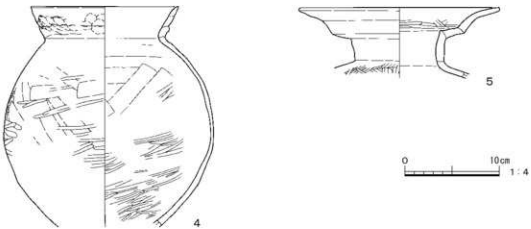


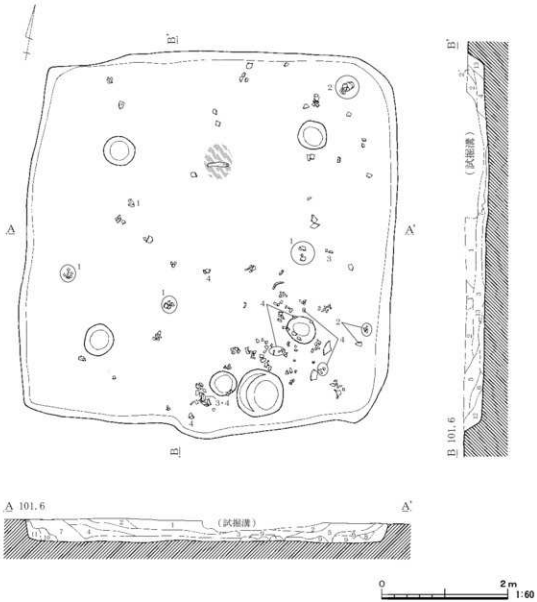
図12　SI－04 出土遺物 (2)

表4　SI－04出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 台	口径 8.6 底径 11.4 器高 8.7	器受部は上位に稜を持ち、脚部は緩やかに外方へ開く。	外面－器受部ナデ、脚部ミガキ、脚部へラナデ。内面－器受部ミガキ、脚部へラナデ。	片岩、白色粒 内外－にぶい黄橙色	4/5。
2	土師器 台	口径 8.0 底径 11.1 器高 9.7	器受部は内彎して口縁部に至る。脚部は緩やかに外方へ開く。	外面－口縁部ヨコナデ、器受部～脚部ミガキ。内面－器受部ミガキ、脚部へラナデ。	チャート、黒色粒 内外－にぶい黄橙色	3/4。
3	土師器 台	口径 8.4 底径 11.9 器高 9.6	器受部は内彎して口縁部に至る。脚部は緩やかに外方へ開く。	外面－器受部ナデ、脚部ミガキ。内面－器受部ナデ、脚部へラナデ。	赤褐色粒、細砂礫 内外－橙色	3/4。
4	土師器 甕	口径 15.6 底径 － 器高 －	粘土紐積み上げ成形。胴部は膨らみを持ち、口縁部は外傾する。	外面－口縁部ナデ後指頭状圧痕、胴部へラナデ後粗いミガキ。内面－口縁部ナデ後粗いミガキ、胴部へラナデ後下半ミガキ。	チャート、白色粒 内外－にぶい褐色	3/5。底部欠損。
5	土師器 壺	口径 21.3 底径 － 器高 －	粘土紐積み上げ成形。二重口縁で、外反して開く。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。内面－口縁部ナデ後ミガキ、胴部へラナデ。	赤褐色粒、細砂礫 内外－橙色	口縁部4/5。

SI－05（図13･14、表5／写真図版4・5･23）

調査区北側やや西寄りのH－3グリッドを中心として位置し、長径6ｍ、短径5.7ｍで南に一部50cm程度の張り出しを持つが形状はほぼ正方形を呈しており主軸は北北西を取る。壁はやや開き気味に立ち上がっており壁の最大高は31cmを測り、下部に壁溝は検出されなかった。床面は張り床状で良くしまっており、ピットが5本床面上より検出されたが内4本は主柱穴であり1本は出入り口用であると見られ、土坑が1基南側中央近くにあるがおそらく貯蔵穴と思われる。また、北側主柱穴の間に炉跡と見られる凹みが焼土は失われているが枕石状の石材と共に存在しており、覆土内や壁には他の遺構との切り合い等は確認されていない。



SI-05 土層説明

1 黒色土	径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
1' 暗灰色土	浅間山系A軽石を多量に含む。しまり・粘性なし。
2 黒色土	1に類似する。径1mm以下のローム粒子が1より多く、色調も更に暗い。
2' 黒色土	2に類似するが色調がやや明るい。
3 黒色土	有機質土層。しまり・粘性強い。
4 黒色土	ローム風化土を斑状に含む。しまり・粘性強い。
5 暗黄色土	ローム粒子・ローム粒を多量に含む。しまり若干あり、粘性強い。
6 暗黄褐色土	5に類似するが黒色土である。有機質土を多量に含む。
7 黒色土	径1mm～10mmのローム粒子・ローム粒を多く含む。良くしまっている。
8 暗黄色土	6に類似するがローム粒・ローム粒子が多い。
9 暗黄色土	ロームブロックを多量に含む。非常に良くしまっている。
10 黒色土	径1cmのローム粒を多く含む。しまり・粘性あり。
11 黄色土	ハードロームブロックの塊である。しまり・粘性強い。
12 暗褐色土	ローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
13 暗褐色土	12に類似する。

図13　SI-05 平面図および土層断面図

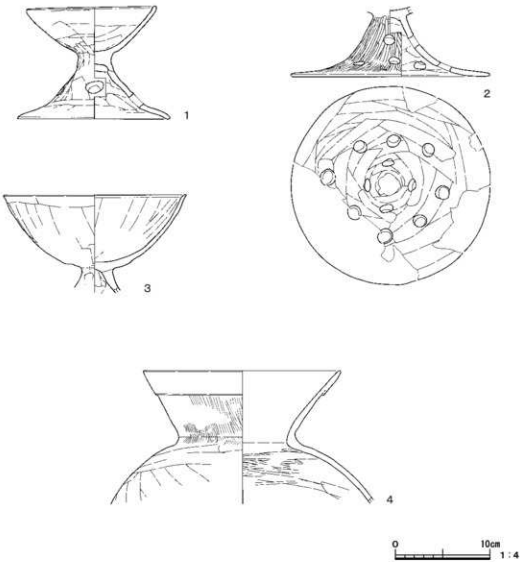
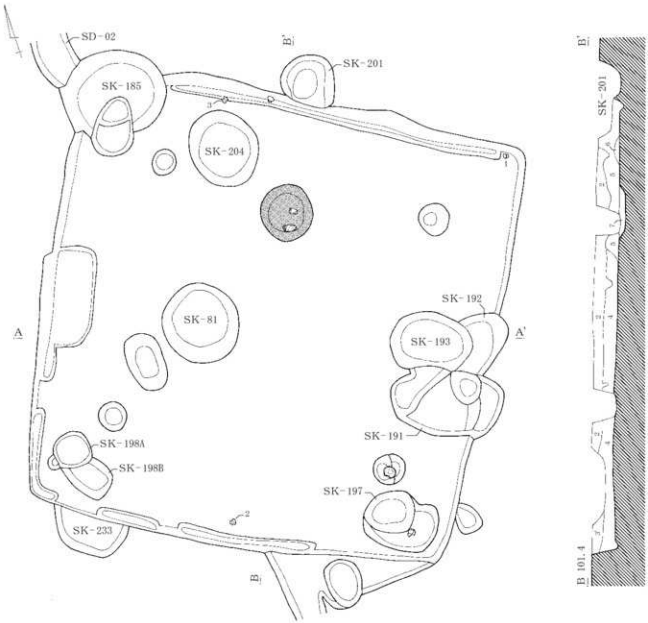


図 14　SI－05 出土遺物

表5　SI－05 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 高坏	口径 (13.8) 底径 (16.0) 器高 11.9	坏部は内彎しながら開く。脚部は外反して開く。	外面－坏部上半ヨコナデ、下半～裾部ヘラナデ。内面－坏部～裾部ヘラナデ。	片岩、赤褐色粒 内外－にぶい橙色	1/2。
2	土師器 高坏	口径 － 底径 (21.0) 器高 －	脚部は外反して開く。	外面－坏底部・脚部ミガキ。内面－脚部ヘラナデ。	白色粒、黒色粒 内－にぶい黄橙色 外－橙色	脚部 2/3。
3	土師器 高坏	口径 (19.3) 底径 － 器高 －	坏部は内彎しながら開き、口唇部は外反する。脚部は外へ開く。	外面－坏部～脚部ヘラナデ。内面－坏部ヘラナデ、脚部ナデ。	チャート、黒色粒 内外－橙色	1/4。
4	土師器 壺	口径 (20.4) 底径 － 器高 －	粘土紐積み上げ成形。折り返し口縁。胴部は膨らみ、口縁部は直線的に開く。	外面－口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、胴部ヘラナデ。内面－口縁部ヨコナデ、胴部丁寧なナデ。	角閃石、赤褐色粒 内－明黄褐色 外－橙色	口縁部～胴部上位 1/2。



SI-06 土層説明

1 黒色土	骨片を非常に多く含む。しまり・粘性若干あり。	5 明褐色土	ローム微粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
2 黒色土	黒色の有機質土層。しまり・粘性若干あり。	6 黒色土	炭化物・焼土粒子を非常に多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土	ローム風化土を多く含む。しまり・粘性あり。	7 黒褐色土	ローム微粒子・炭化物・焼土粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
3' 暗黄色土	3に類似するが、ローム風化土含有量が少ない。		
4 暗黄色土	ローム粒・ロームブロックを多く含む。		

図15　SI-06 平面図および土層断面図

SI－06（図 15･16、表６／写真図版５･６･23）

調査区のやや東側北寄りのN－１・N－２グリッドを中心として位置し、長径7.2ｍ、短径７ｍのほぼ正方形の形状を呈しており主軸は北東に取る。壁は北側と南西の一部を除きほぼ垂直に立ち上がっており壁の最大高は40㎝を測り、開いた北壁と南西壁の下に途切れながら幅20㎝前後、深さ５㎝前後の壁溝が存在するがこれは崩れた壁の補強として設けられたものと思われる。床面は荒れ気味でピットが６本と土坑が８基検出されたが、その内主柱穴が４本と住居埋没後に掘られ覆土を抜いて床まで到達した土坑が４基時期を確定されたが、他の遺構は住居に付随するものかは定かではない。また、墓域の中心に近いので壁面を破壊して存在する土坑が５基と墓地の区画溝（SD－02）が１本検出され、覆土を掘る段階で消滅した浅めの土坑も４基程見受けられる。炉跡は北側主柱穴のほぼ中間に存在し、当初は土坑かと思われるほど掘り込まれて構築されており焼土層も検出されているが、その他の住居に付属する遺構は検出されなかった。

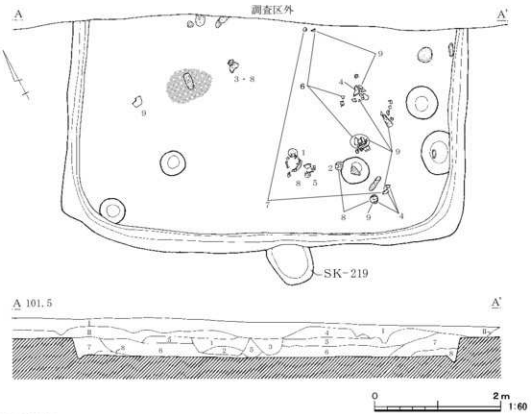
図16　SI－06 出土遺物

表６　SI－06出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 壺	口径 8.4 底径 3.8 器高 5.0	体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。底部は突出し、平底を呈する。	外面－体部ヘラナデ、底部ナデ、内面－体部～底部ナデ。	角閃石、赤褐色粒 内外－橙色	4/5。
2	土師器 坩	口径 7.2 底径 3.2 器高 6.1	体部は膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。平底。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	片岩、赤褐色粒 内外－にぶい橙色	4/5。
3	土師器 坩	口径 8.8 底径 2.1 器高 8.1	体部は膨らみを持ち、口縁部は直線的に開く。小さな平底。	外面－口縁部ヨコナデ、体部～底部器面が鱗状に剥離。内面－口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒、赤褐色粒 内外－橙色	4/5。

SI－07（図 17･18･19、表７／写真図版７･24）

調査区の北東壁に掛かってQ－１グリッドを中心として位置し、長径6.3ｍ、確認された短径3.5ｍで全体のほぼ二分の一が検出され、形状は方形を呈するものと思われ主軸はおそらく北西に取ると思われる。壁はやや開き気味に立ち上がっており壁の最大高は41㎝を測り、壁溝は幅20㎝前後、深さ６㎝前後で確認された床面の範囲全周に存在している。床面は比較的良くしまっており、ピットが５本検出されていて内２本が主柱穴と見られるが他のピットの性格は不明である。壁には住居埋没後から掘られた土坑が１基かかっており、覆土を掘り上げた時点で２基の中世の墓坑と確認された土坑が消失している。炉跡は北西のピットの北側に在り使用された痕跡は明瞭であるが、それ以外の住居付属遺構の存在は確認されなかった。



SI-07 土層説明

Ⅰ 暗灰褐色土	浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性若干あり。	4 黒褐色土	3に類似するが色調がやや明るい。しまり・粘性あり。
Ⅱ 暗褐色土	浅間山系A軽石を若干含む。しまり・粘性若干あり。	5 褐色土	明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性あり。
1 暗褐色土	ローム粒子を若干含む。しまり・粘性あり。	6 黒色土	ローム微粒子を若干含む。しまり・粘性強い。
2 黒色土	ローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。	7 明褐色土	ローム風化土を非常に多く含む。しまり・粘性強い。
3 黒色土	白色テフラを若干含む。しまり・粘性あり。	8 黒色土	若干のローム粒を含む。しまり・粘性強い。

図17　SI-07 平面図および土層断面図

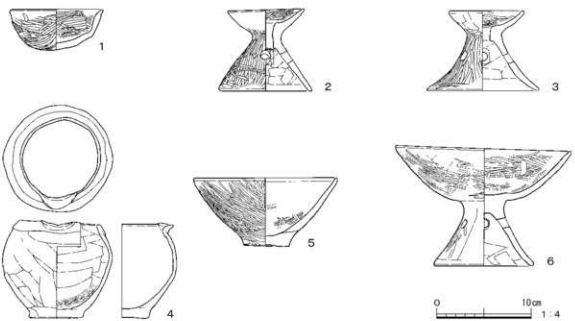


図18　SI-07 出土遺物 (1)

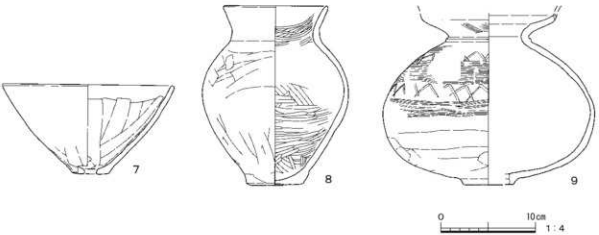


図19　SI-07 出土遺物 (2)

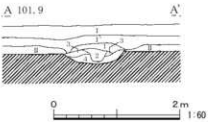
表7　SI-07出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埦	口径　9.8 底径　－ 器高　4.5	体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。丸底。	外面－口縁部ヨコナデ、体部ミガキ、底部ナデ。内面－口縁部～底部ミガキ。	赤褐色粒、黒色粒 内外－にぶい赤褐色	4/5。
2	土師器 器台	口径　8.1 底径　9.9 器高　8.7	器受部は内彎して口縁部に至る。脚部は緩やかに外方へ開く。	外面－器受部ナデ、脚部～裾部ミガキ。内面－器受部ミガキ、脚部～裾部ヘラナデ。	チャート、赤褐色粒 内外－にぶい黄橙色	4/5。
3	土師器 器台	口径　8.0 底径　11.9 器高　8.4	器受部は内彎して口縁部に至る。脚部は緩やかに外方へ開く。	外面－器受部ナデ、脚部～裾部ミガキ。内面－器受部ミガキ、脚部ヘラナデ。	片岩、赤褐色粒 内外－にぶい橙色	4/5。
4	土師器 片口 無頸壺	口径　8.4 底径　5.7 器高　10.3	粘土紐積み上げ成形。折り返し口縁。胴部は膨らみ、中位に最大径を持つ。平底。	外面－口縁部ナデ、胴部ヘラナデ、底部ナデ。内面－口縁部～胴部ヘラナデ、底部丁寧なナデ。	白色粒、赤褐色粒 内－にぶい赤褐色 外－にぶい橙色	4/5。
5	土師器 鉢	口径　15.3 底径　4.8 器高　7.3	胴部はやや内彎しながら開き、口縁部に至る。平底。	外面－口縁部～胴部ミガキ、底部ナデ。内面－口縁部～底部ナデ後ミガキ。	角閃石、白色粒 内外－にぶい赤褐色	3/4。
6	土師器 高坏	口径　18.7 底径　10.5 器高　12.7	坏部は内彎しながら開く。脚部は「八」の字状に開く。	外面－坏部ヨコナデ後ミガキ、脚部ナデ後荒いミガキ。内面－坏部ミガキ、脚部ヘラナデ。	チャート、黒色粒 内外－にぶい赤褐色	3/4。
7	土師器 甑	口径　18.2 底径　3.8 器高　9.4	体部は内彎しながら開き、口縁部に至る。平底。	外面－体部上位～中位摩滅、下位ヘラナデ、底部ナデ。内面－口縁部～底部ヘラナデ。	白色粒、赤褐色粒 内外－橙色	ほぼ完形。
8	土師器 壺	口径　11.0 底径　6.0 器高　18.9	胴部は膨らみを持ち、中位に最大径を持つ。口縁部は直線的に開く。平底。	外面－口縁部ヨコナデ、胴部上半ヘラナデ、下半～底部ヘラケズり。内面－口縁部～底部ミガキ。	白色粒、黒色粒 内外－にぶい褐色	3/5。
9	土師器 壺	口径　－ 底径　(5.3) 器高　－	二重口縁を呈し、強く外反する。胴部は強く張り、中位に最大径を持つ。平底。	外面－口縁部ハケメ、胴部上半に横位の櫛描簾状文で区画後、その間に山形文を施文。下半ヘラナデ、底部ナデ。内面－口縁部ナデ、胴部～底部器面荒れ不明瞭。	黒色粒、細砂礫 内外－橙色	1/2。

(2) 溝状遺構

SD－01（図20）

調査区の東西中央部を南北に向かって縦断している溝で、調査区内で確認された全長26～27ｍ、幅40～80cm、深さが10～15cmを測り全体に浅く掘り込まれている。本溝は点在する土坑や住居を壊して掘られているが、覆土中からは浅間山系Ａ軽石の存在は窺えず本跡を切って掘られた土坑墓も散見されることから、掘られた時期はおそらく中世の後半位ではないかと推定される。この溝がどの様な用途に使用されたかは、底面のローム層上面に乗った黒色土が踏み固められた様な状態の硬化面を持ち、掘り込みが床面まで達していないＳＩ－03の場合覆土の中程で他と同一の硬化面が確認されており、所謂道路状遺構の基礎となる掘り込みではないかと考えている。



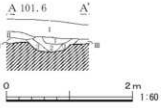
SD－01 土層説明

Ⅰ 現代耕作土
Ⅰ' 近現代耕作土
Ⅱ ローム漸移層，ローム二次堆積土。
1 暗褐色土　Ⅱの風化土層である。若干の白色パミスを含む。
2 黒色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 黒色土　2に類似するが，明褐色土を斑状に含む。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性が強い。

図20　SD－01 土層断面図

SD－02（図21/写真図版24）

調査区東側の中央部より北にコの字型を呈して検出された溝で、調査区内で確認された全長は屈曲部を含めて31ｍ強、幅50～60cm、深さが10～15cmを測り東端は徐々に浅くなって行き消滅する。本溝は他の土坑を切っても切られてもいて、覆土の様相や切り合いの状況からこの墓地の形成されていた時期の中でのほぼ中期の中世後半に位置するであろう遺構である。表土の除去と耕作によって部分的に欠損しているが、おそらく方形を呈する掘り込みであったものと考えられる。他に本溝と関連すると思われる遺構の検出も無い事やこの様な形状を示す必然性を考えると、この溝は墓域の区画線として掘られた溝ではないかと判断される。（尾内俊彦）



SD－02 土層説明

Ⅰ 暗灰色土　浅間山系Ａ軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
Ⅱ 暗灰色土　1に類似するが，浅間山系Ａ軽石の含有量がやや少ない。
Ⅲ 暗褐色土　ローム再堆積土である。
1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　色調がやや暗い層である。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　ローム風化土を含む。しまり・粘性あり。

図21　SD－02 土層断面図

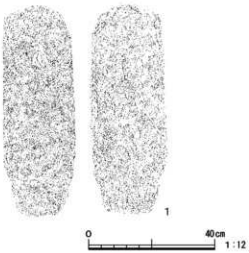


図 22　SD－02　出土遺物

表８　SD－02 出土遺物観察表

No.	器　種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
1	板　　碑	長さ〔67.5〕 幅　　22.6 厚さ　　2.3	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座上に阿弥陀一尊種子を配する。やや表面剥落。	緑泥片岩	4/5。 6.7 kg。

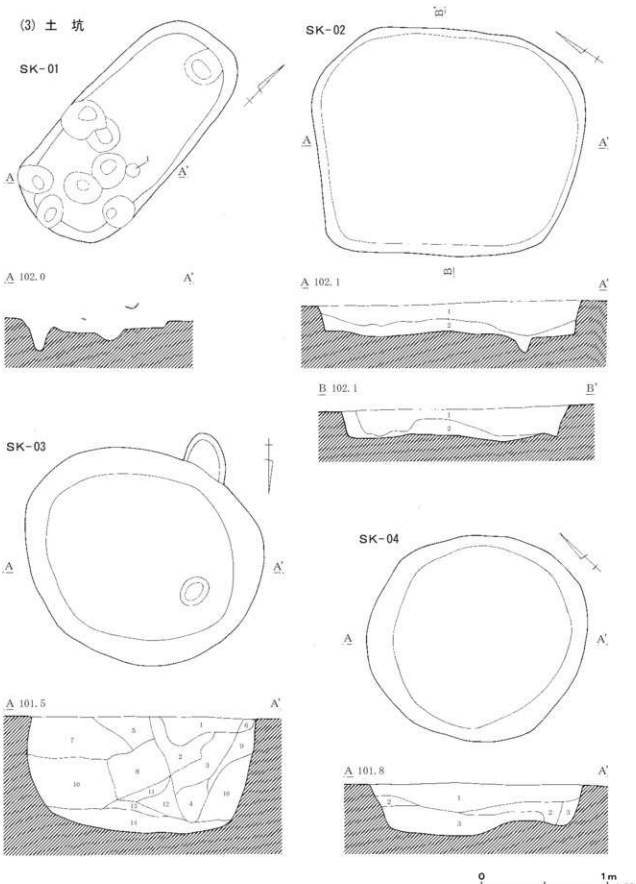


図 23　土坑平面図および土層断面図 (1)

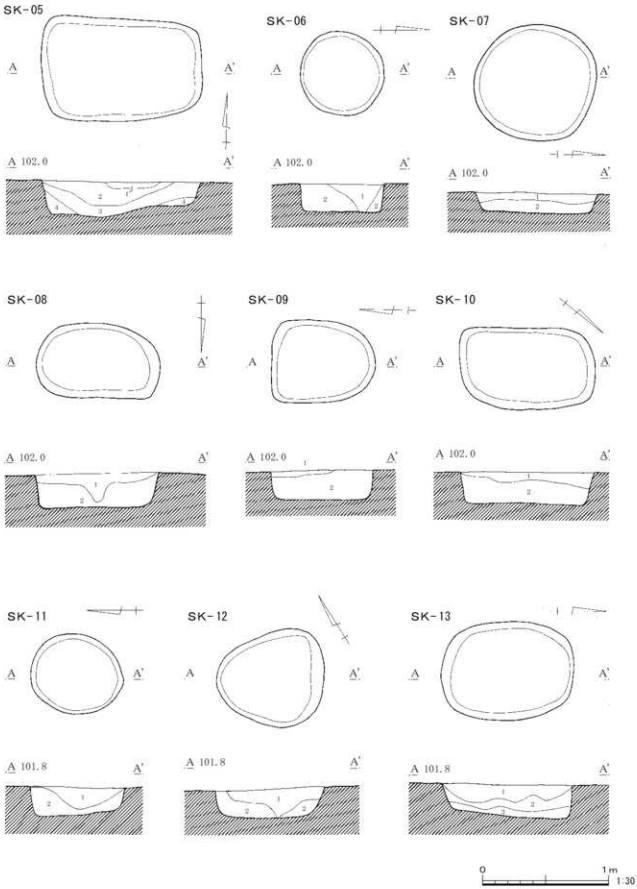


図 24　土坑平面図および土層断面図 (2)

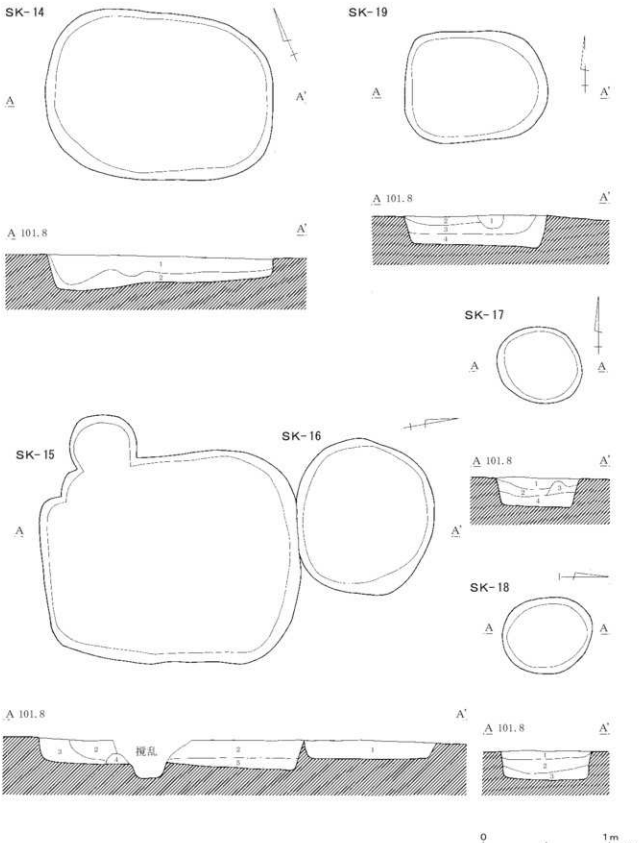


図 25　土坑平面図および土層断面図 (3)

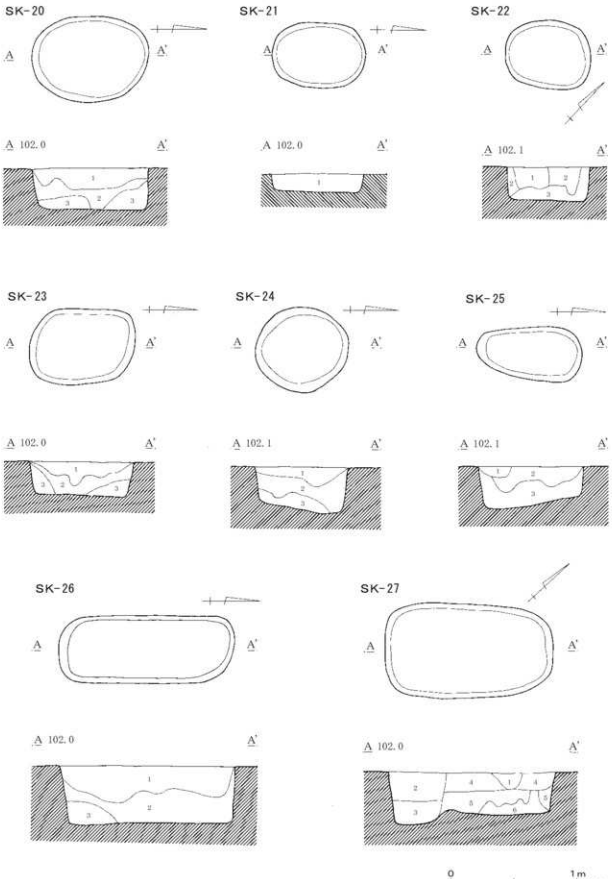


図 26　土坑平面図および土層断面図 (4)

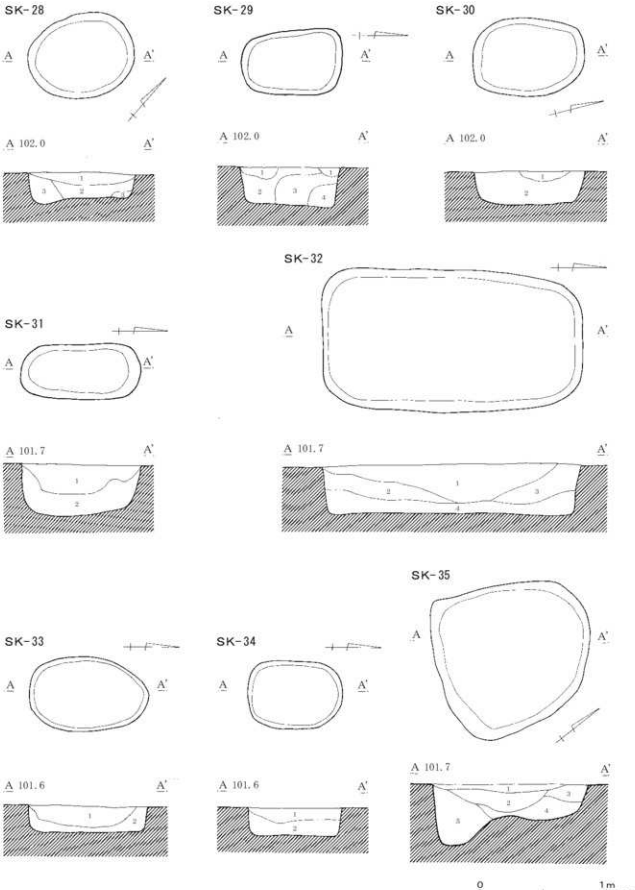


図 27　土坑平面図および土層断面図 (5)

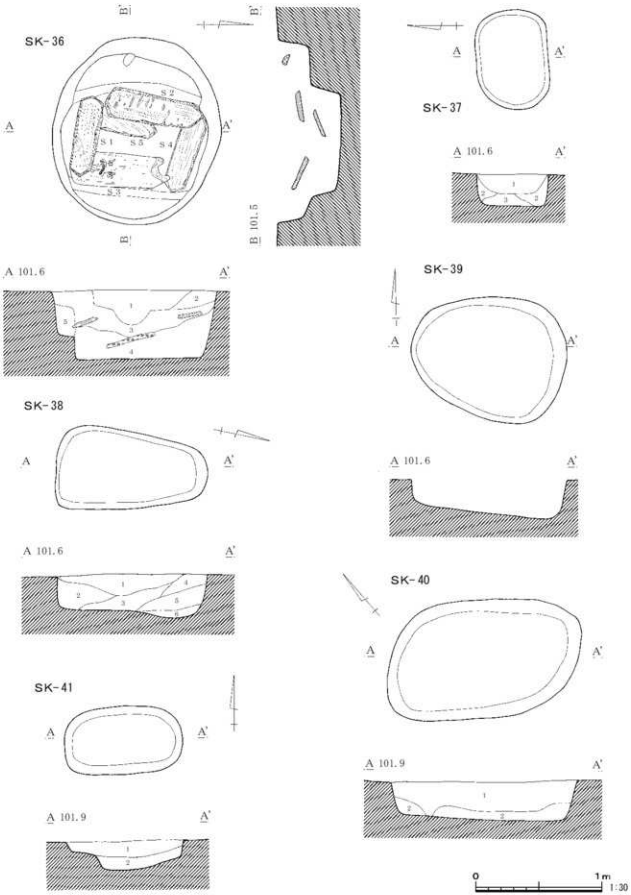


図 28　土坑平面図および土層断面図 (6)

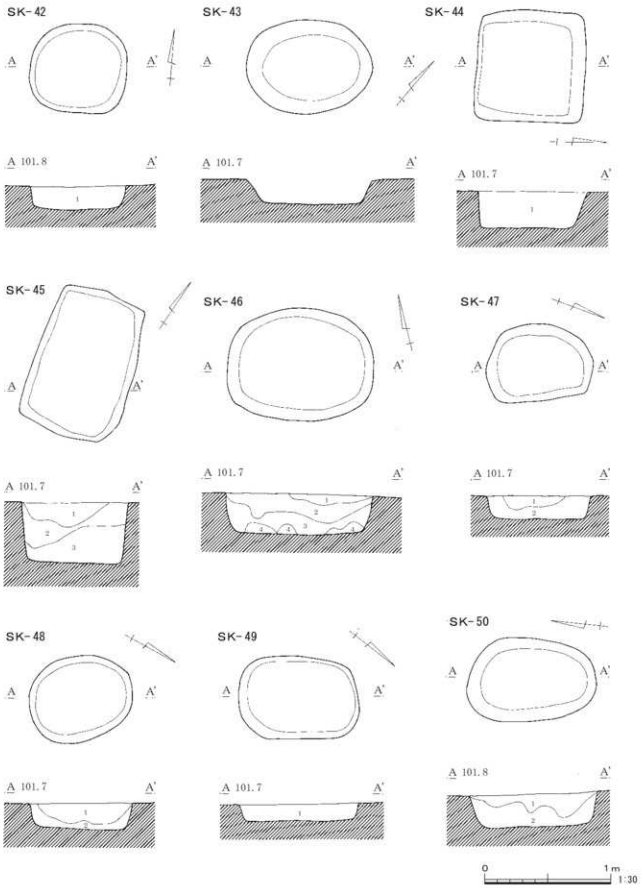


図 29　土坑平面図および土層断面図 (7)

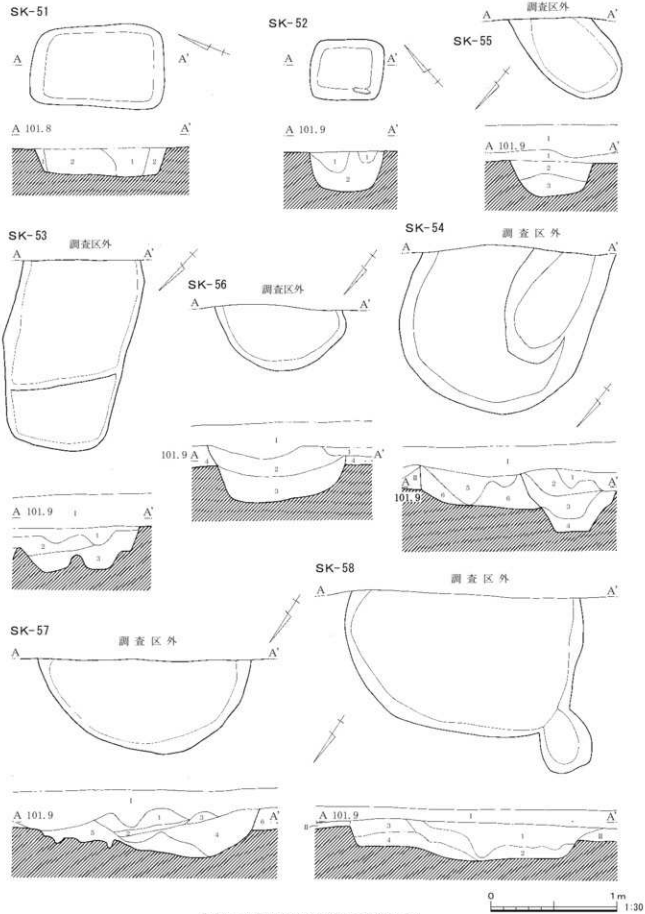


図 30　土坑平面図および土層断面図 (8)

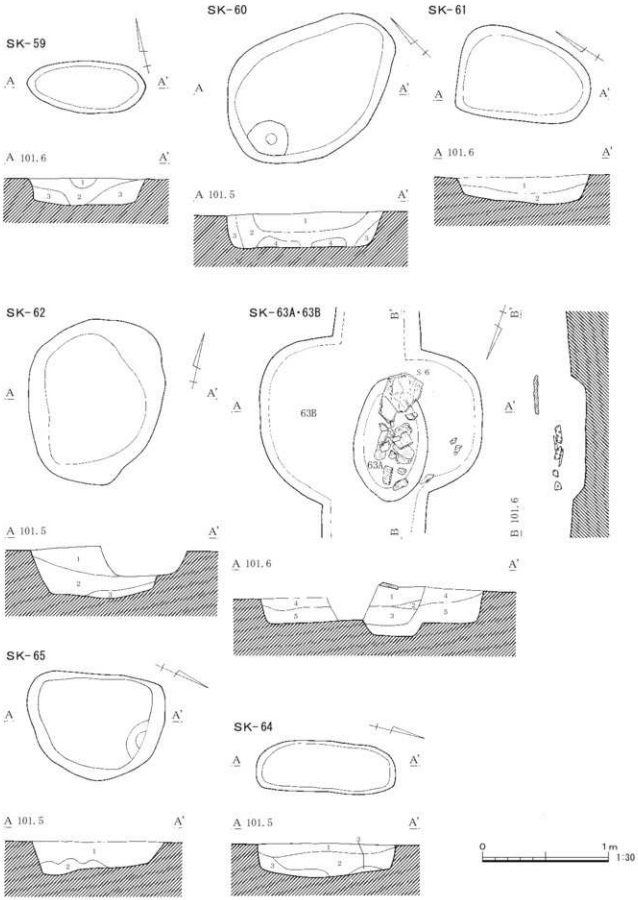


図 31　土坑平面図および土層断面図 (9)

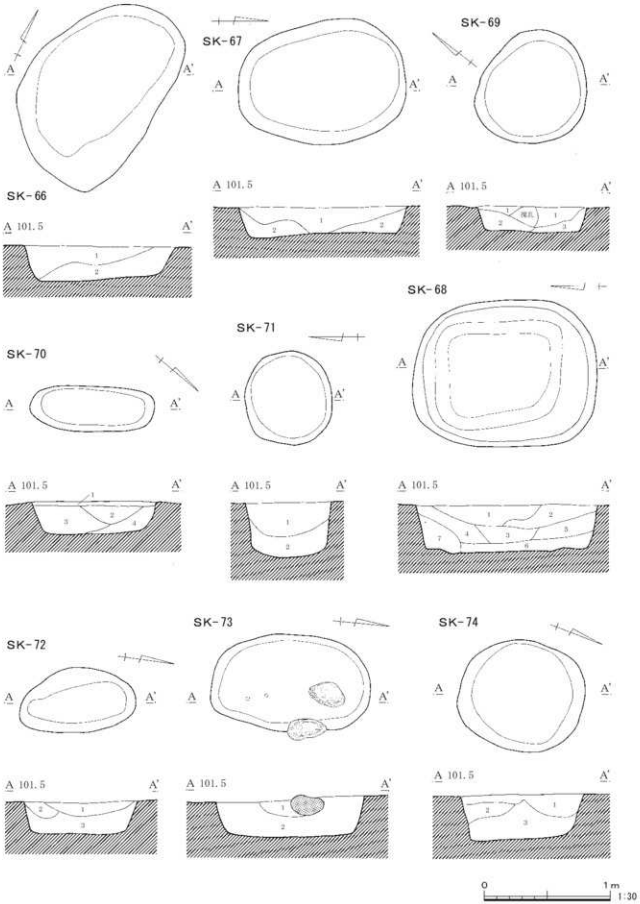


図 32　土坑平面図および土層断面図 (10)

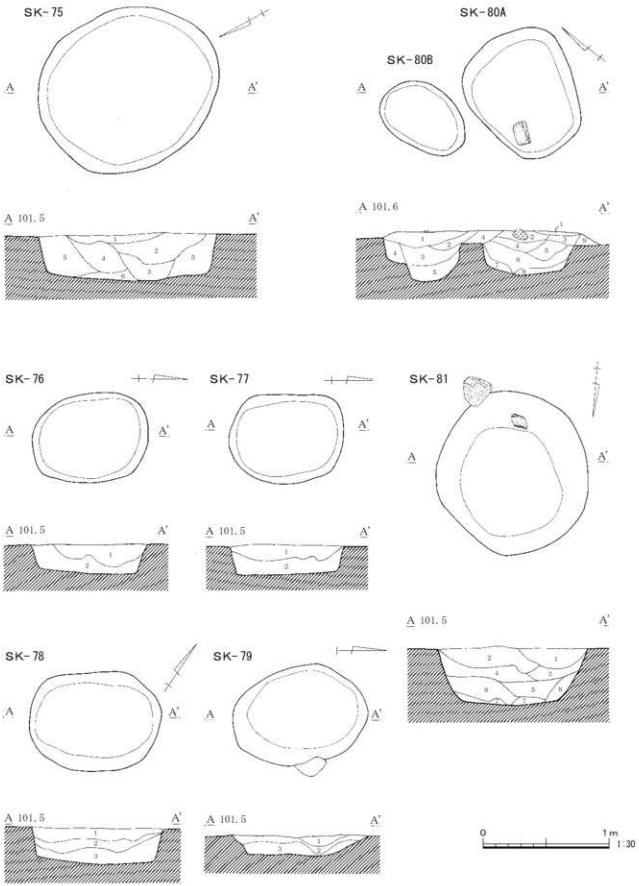


図33　土坑平面図および土層断面図 (11)

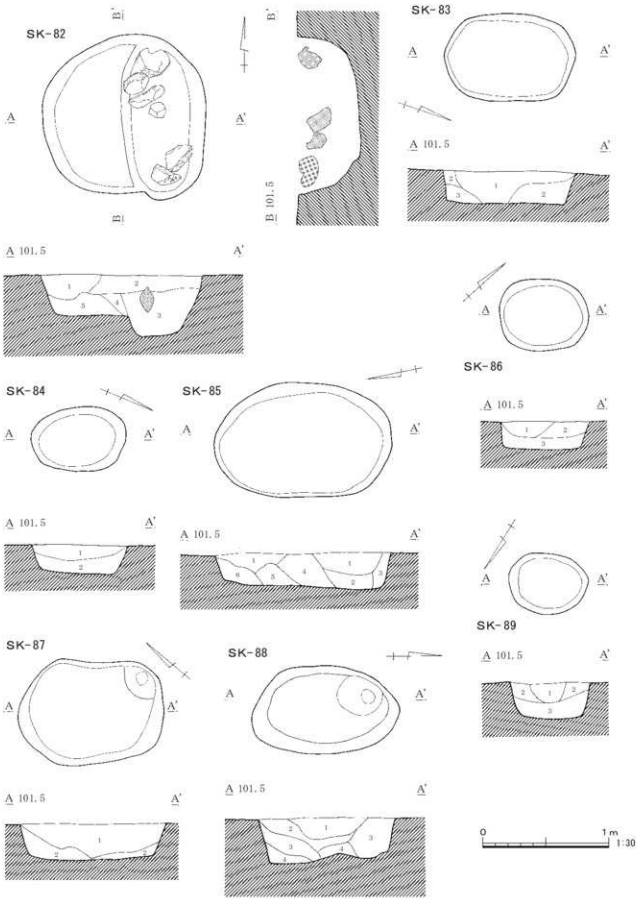


図34　土坑平面図および土層断面図（12）

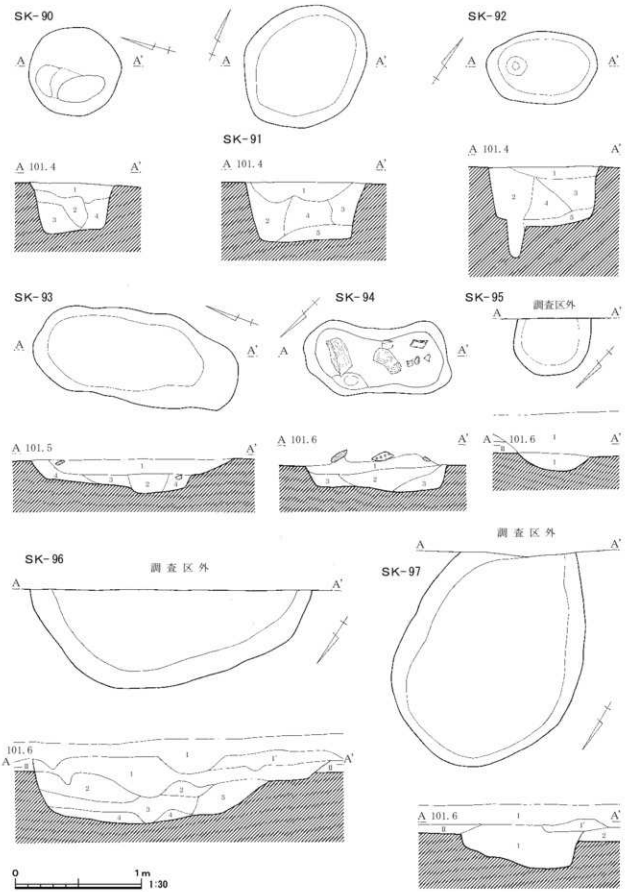


図35　土坑平面図および土層断面図（13）

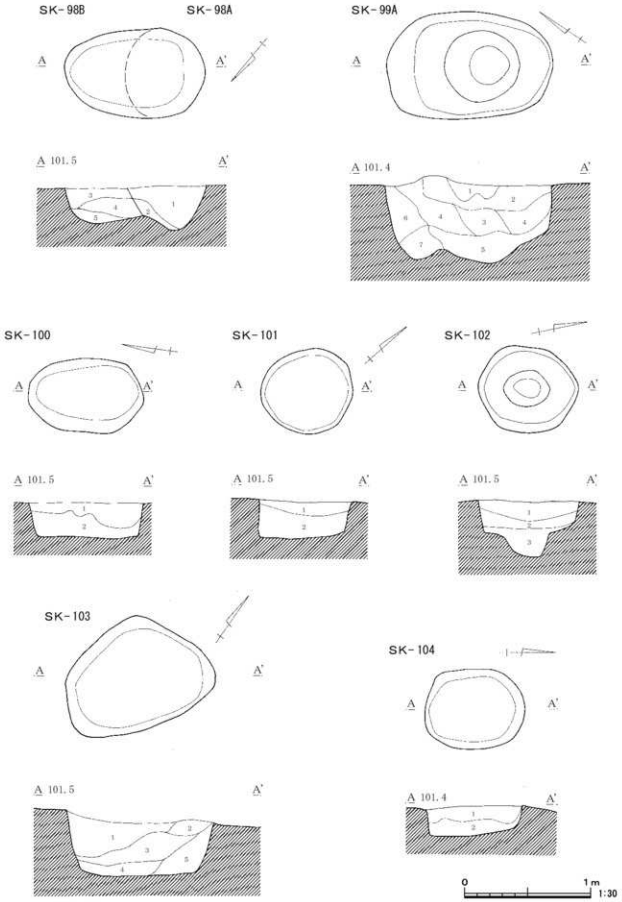


図 36　土坑平面図および土層断面図 (14)

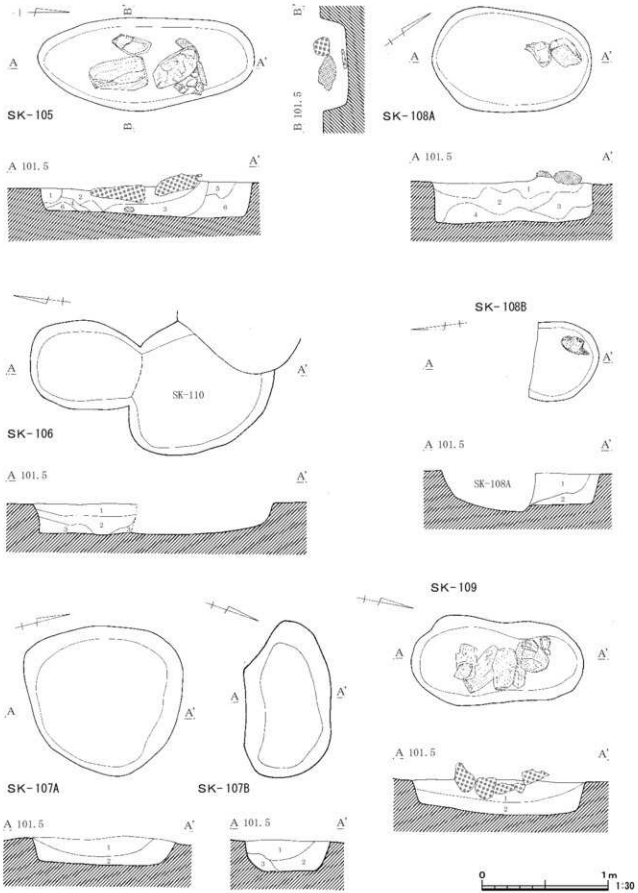


図 37　土坑平面図および土層断面図 (15)

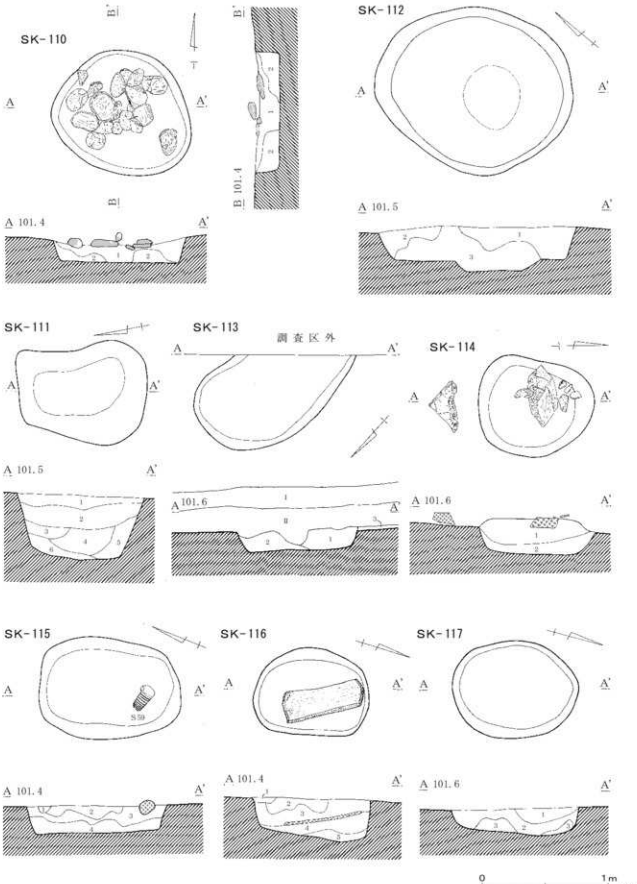


図38　土坑平面図および土層断面図（16）

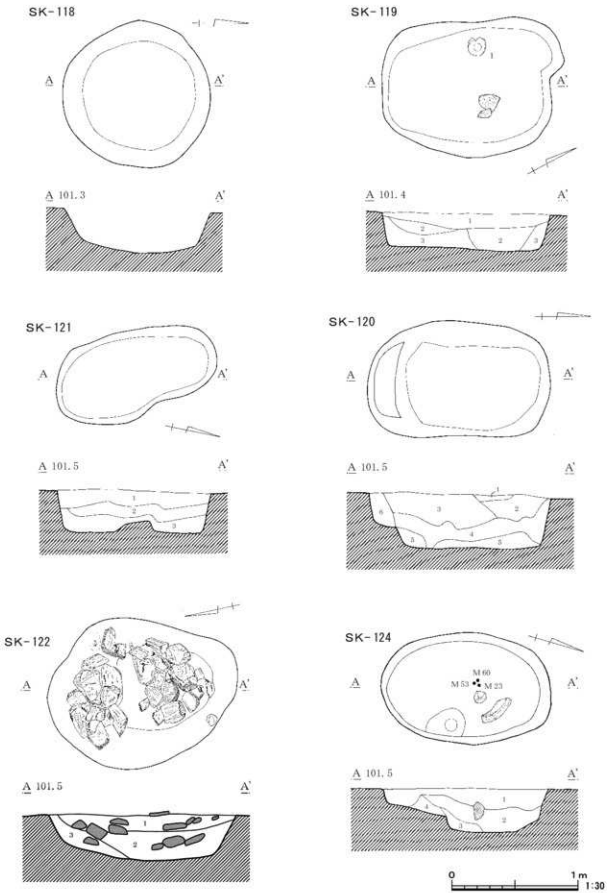


図 39　土坑平面図および土層断面図 (17)

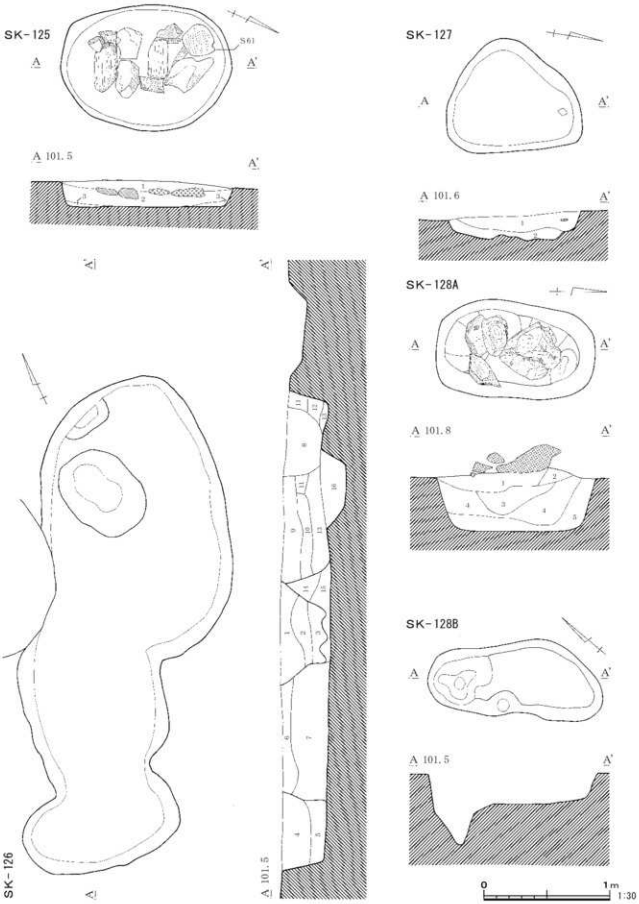


図 40　土坑平面図および土層断面図 (18)

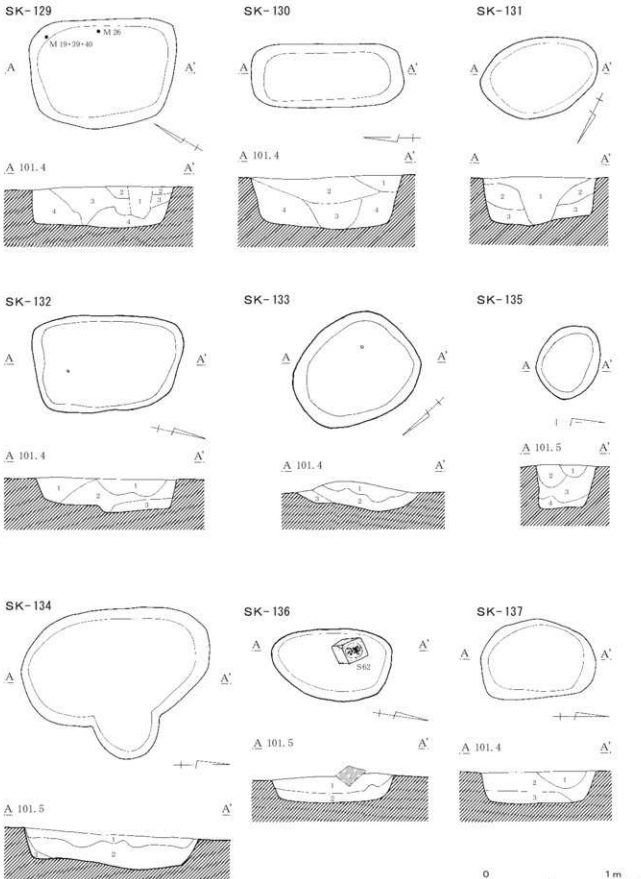


図41　土坑平面図および土層断面図（19）

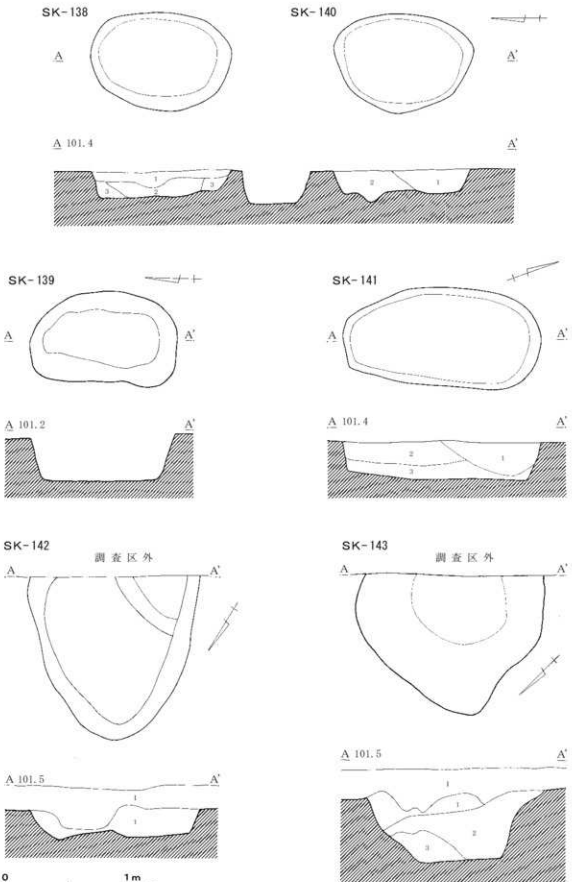


図 42　土坑平面図および土層断面図 (20)

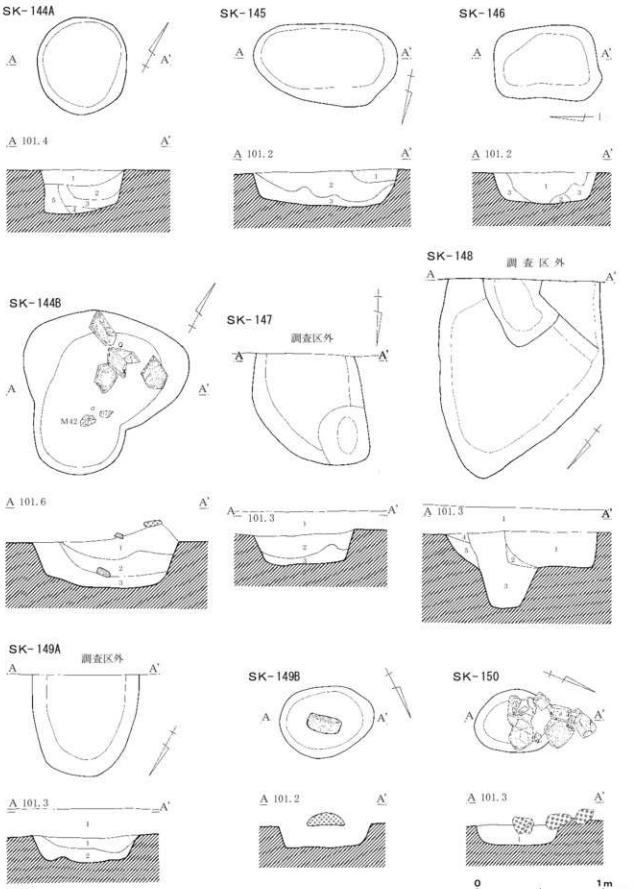


図 43　土坑平面図および土層断面図 (21)

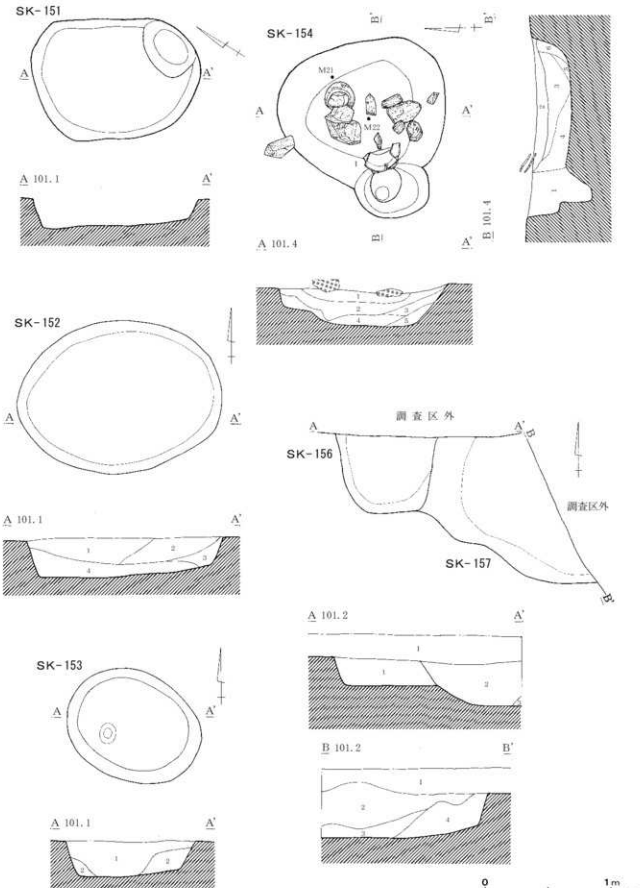


図44　土坑平面図および土層断面図（22）

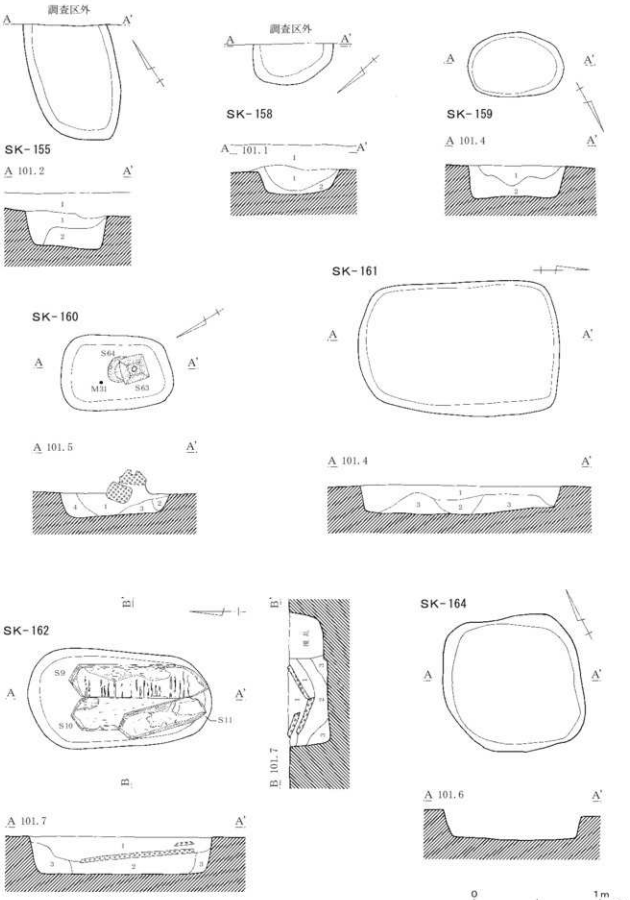


図 45　土坑平面図および土層断面図 (23)

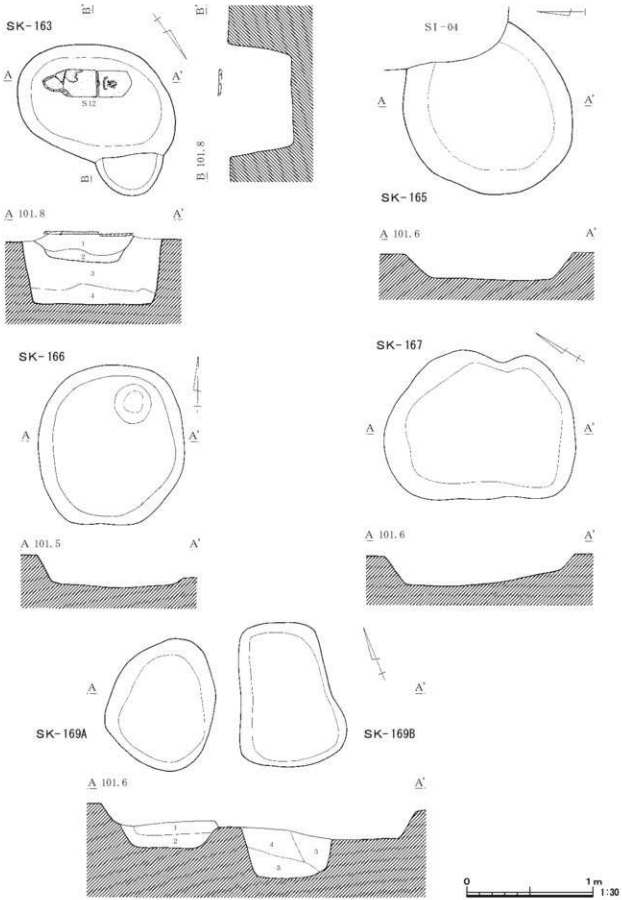


図46　土坑平面図および土層断面図（24）

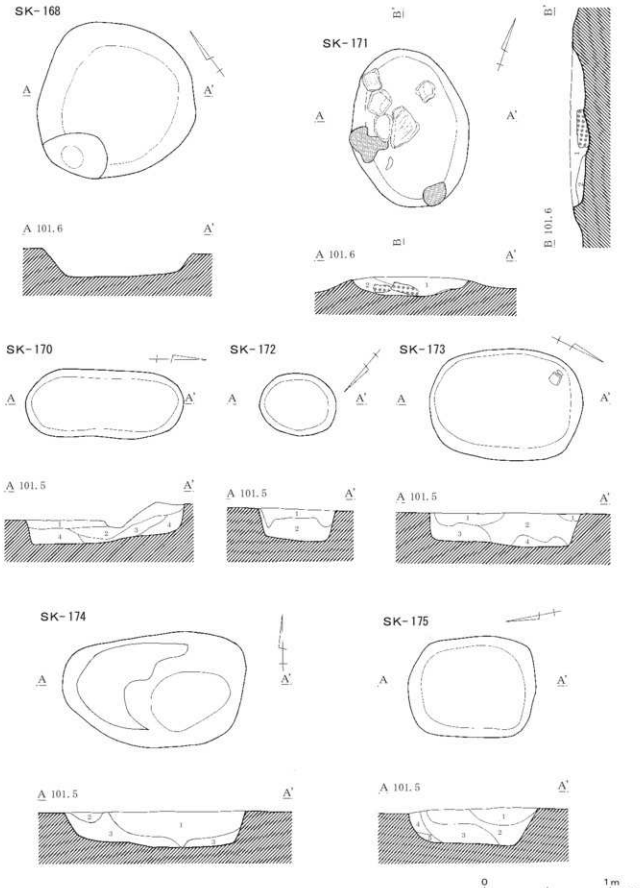


図 47　土坑平面図および土層断面図 (25)

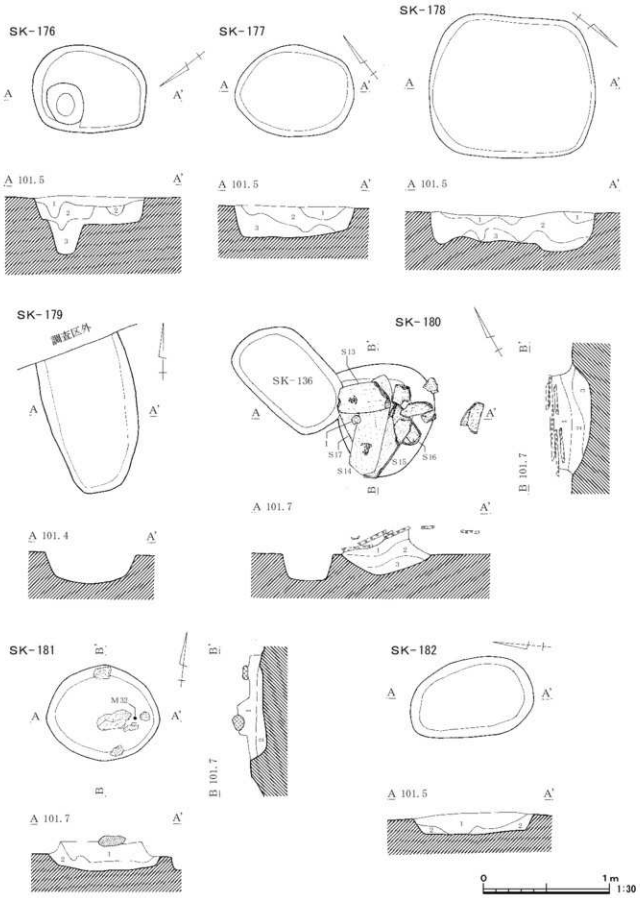


図 48　土坑平面図および土層断面図 (26)

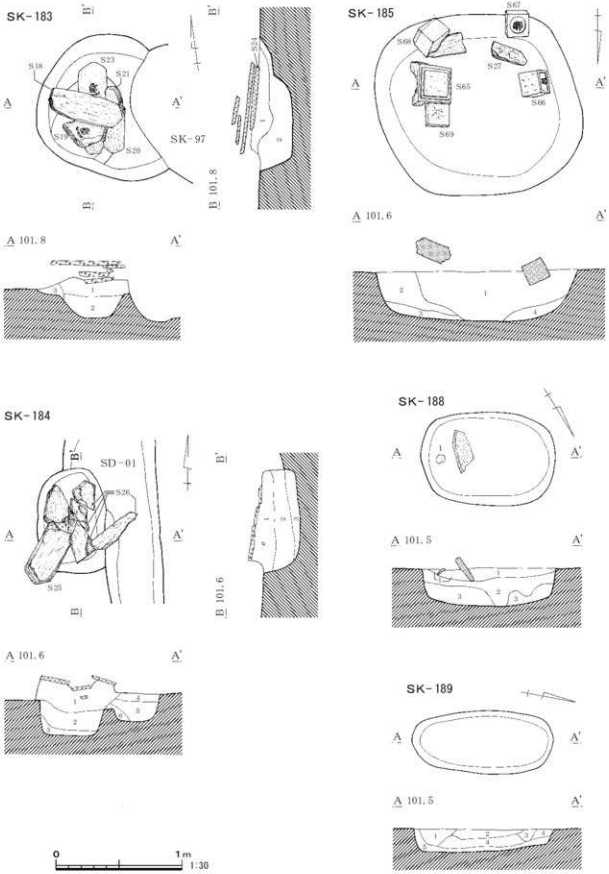


図 49　土坑平面図および土層断面図 (27)

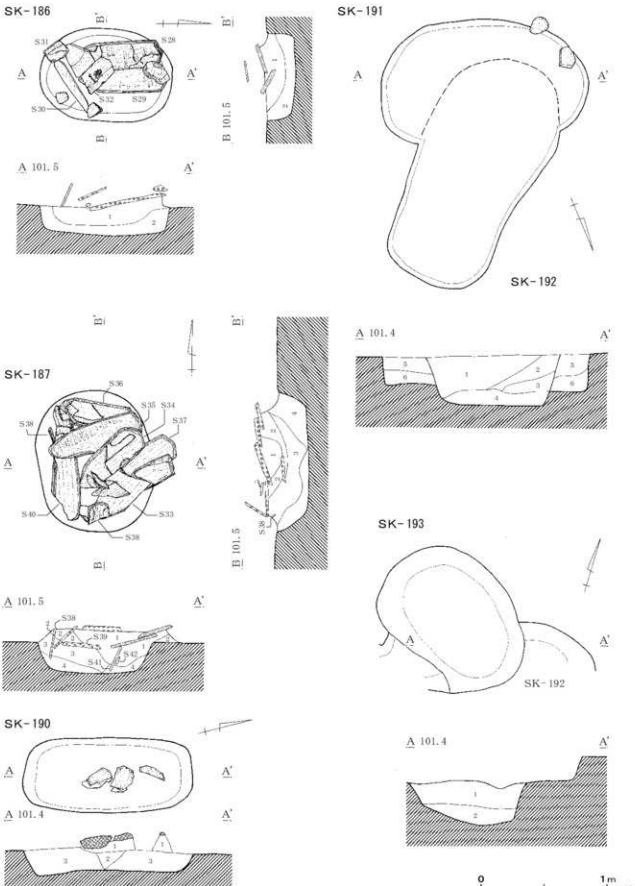


図 50　土坑平面図および土層断面図 (28)

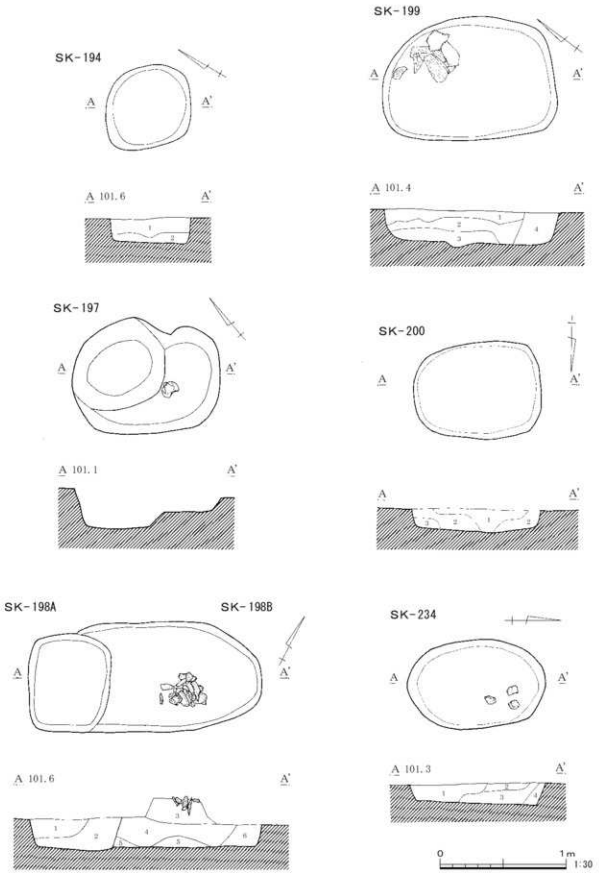


図 51　土坑平面図および土層断面図 (29)

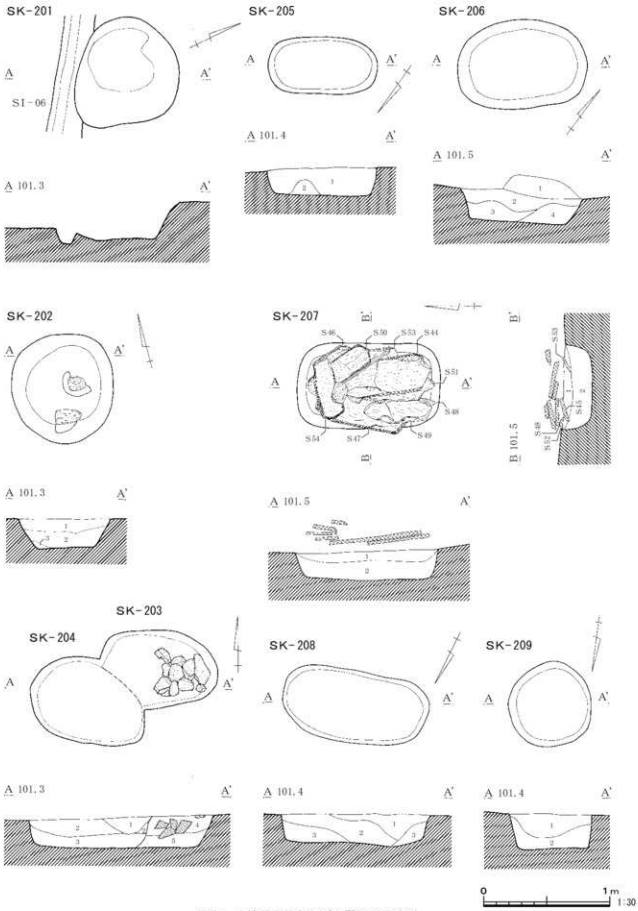


図 52　土坑平面図および土層断面図 (30)

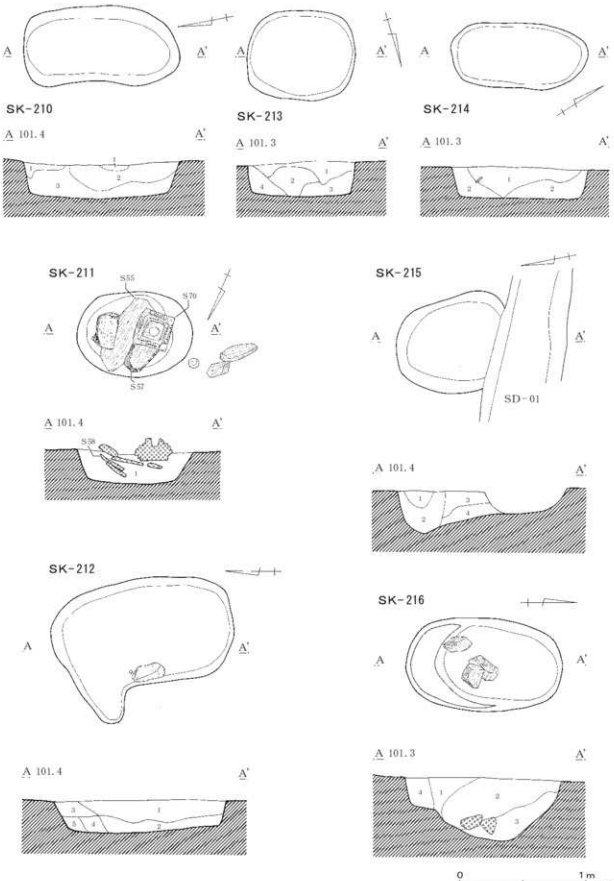


図53　土坑平面図および土層断面図 (31)

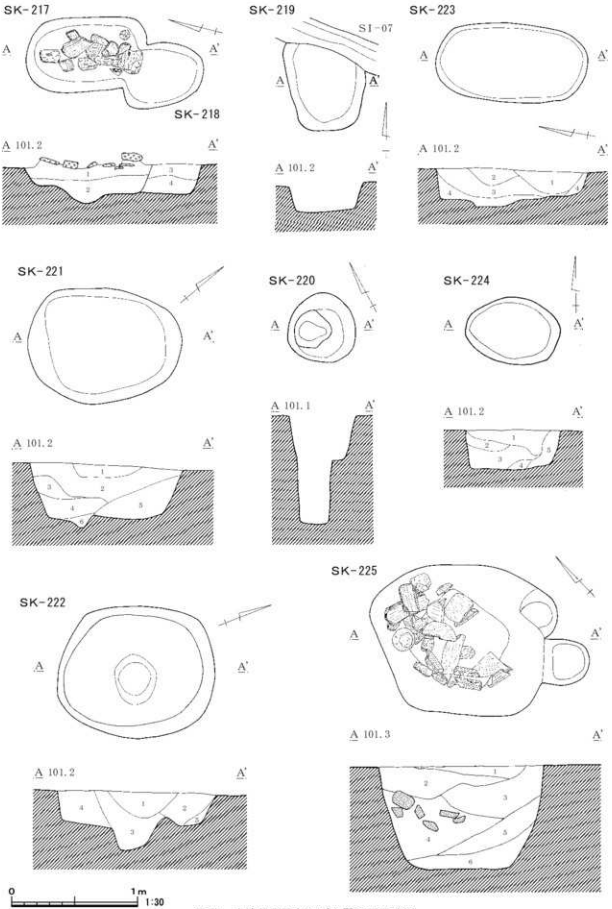


図 54　土坑平面図および土層断面図 (32)

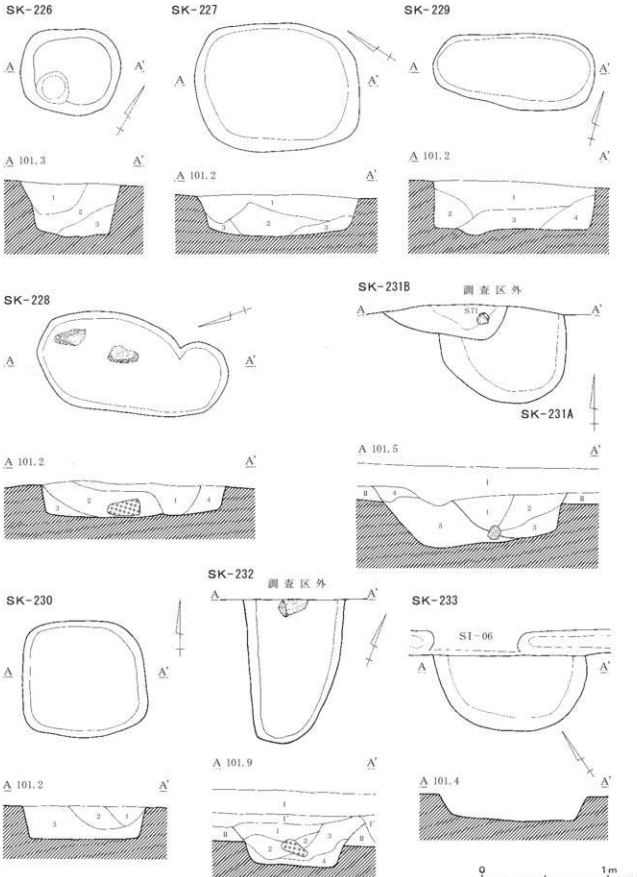


図 55　土坑平面図および土層断面図 (33)

SK-02 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石・ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性なし。
2 暗橙褐色土　浅間山系A軽石・ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性なし。

SK-03 土層説明

1 暗褐色土　ローム風化土を斑状に含む。しまり・粘性あり。
2 暗褐色土　1に類似するがローム風化土が1より多い。
3 黒色土　黒色の有機質層である。しまり・粘性あり。
4 黒色土　3に類似するが、ロームブロックを含まない。
5 明黄褐色土　ローム風化土が主体である。しまり・粘性あり。
6 明黄褐色土　5に類似するが、色調が暗い。しまり・粘性あり。
7 明黄褐色土　ローム風化土層である。非常に良くしまっている。
8 暗褐色土　5を斑状に含む。しまり・粘性あり。
9 明黄色土　ローム風化土が主体の粘質土。粘性が非常にある。
10 明黄色土　9に類似するがローム風化土の量が9より多い粘質土。
11 暗褐色土　黒色有機質土にローム風化土を斑状に含む。しまり・粘性強い。
12 暗褐色土　11に類似するが、ローム風化土の量が多い。
13 明黄褐色土　ローム風化粘質土である。しまり・粘質が非常に多い。
14 明黄褐色土　13に類似するが、ローム風化土の量がやや少ない。

SK-04 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
2 茶褐色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまり・粘性なし。
3 茶褐色土　径2～3cmのロームブロックを多く含む。

SK-05 土層説明

1 暗灰褐色土　浅間山系A軽石を多量に含む。しまり・粘性なし。
2 暗灰褐色土　浅間山系A軽石を多量に含む。しまり・粘性なし。
3 明黄色土　ローム風化土主体であり、浅間山系A軽石を含む。しまり・粘性なし。
4 明黄褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-06 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を多量に含む。しまり・粘性なし。
2 暗黄褐色土　ローム風化土層である。(浅間山系A軽石は含まない)しまり・粘性若干あり。

SK-07 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
2 明黄色土　浅間山系A軽石を含まない。しまりなし、粘性若干あり。

SK-08 土層説明

1 暗灰色土　浅間山系A軽石を若干含む。しまりなし、粘性若干あり。
2 明黄色土　ローム風化土を主体としているが、径1～2cmの黒色ブロックを若干含む。

SK-09 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまり・粘性なし。
2 黄褐色土　浅間山系A軽石を含まない。しまりなし、粘性若干あり。

SK-10 土層説明

1 暗褐色土　Y・Pを含む。しまりあり、粘性なし。
2 明褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまりあり、粘性若干あり。

SK-11 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまり・粘性なし。
2 明黄色土　浅間山系A軽石を含まない。しまりなし、粘性若干あり。

SK-12 土層説明

1 黒色土　黒色土層である。しまり・粘性あり。
2 黄褐色土　ロームブロック主体であるが、黒色土ブロックを若干含む。しまり・粘性あり。

SK-13 土層説明

1 暗褐色土　Y・Pを多く含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが、Y・Pを多く含む。
3 暗黄褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-14 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を若干含む。しまり・粘性あり。
2 暗黄色土　ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性なし。

SK-15・16 土層説明

1 暗黄褐色土　浅間山系A軽石を若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　Y・Pを若干含む。しまりあり、粘性若干あり。
3 暗褐色土　径1cm以下のローム粒子を若干含む。しまり・粘性なし。
4 暗褐色土　2に類似するが、Y・Pの量が非常に多く色調がやや明るい。
5 暗黄色土　径1～3cmのロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。

SK-17 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を多量に含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが、色調がやや明るい。
3 明黄褐色土　ローム風化土層である。しまりなし、粘性あり。
4 明黄褐色土　3に類似するが、色調がやや暗い。

SK-18 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが白色テフラの量が少ない。
3 暗褐色土　白色粒子を含まず、若干のローム粒子を含む。しまり、粘性なし。

SK-19 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗褐色土　浅間山系A軽石を含まない。しまりあり、粘性なし。
3 明褐色土　2に類似するが、色調がやや明るくローム質である。
4 暗褐色土　2に同じ。

SK-20 土層説明

1 暗褐色土　暗灰褐色土斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、暗灰褐色土の含有が少ない。
3 明黄褐色土　ローム風化土を主体とする。しまり・粘性若干あり。

SK-21 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまりあり。粘性なし。

SK-22 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが浅間山系A軽石を含まない。
3 暗黄色土　径5mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。

SK-23 土層説明

1 暗褐色土　黒色土を斑状に含む。しまり・粘性あり。
2 暗褐色土　黄色土を斑状に含む。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　ローム粒子を多量に含む。しまり・粘性あり。

SK-24 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を含まない。しまりあり、粘性なし。
2 茶褐色土　径１～３cmのロームブロックを含む。しまりあり、粘性なし。
3 黄褐色土　径１～３cmのロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。

SK-25 土層説明

1 暗褐色土　しまりあり、粘性なし。
2 茶褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。
3 黄色土　径３～10cmのロームブロック主体である。しまりなし、粘性あり。

SK-26 土層説明

1 暗褐色土　茶褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　１に類似するが茶褐色土の含有量が少ない。
3 暗褐色土　茶褐色土を含まない。しまり・粘性若干あり。

SK-27 土層説明

1 灰褐色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　Ｙ・Ｐを比較的多く含む。しまり・粘性あり。
3 暗褐色土　２に類似するが、ローム粒子の含有量が多い。
4 暗褐色土　径１～２mmのローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
5 暗褐色土　ローム粒子を４より多く含む。しまり・粘性あり。
6 黄褐色土　径４～10ｃｍのロームブロック主体である。しまり・粘性あり。

SK-28 土層説明

1 暗褐色土　しまり・粘性なし。
2 暗黄色土　ローム風化土を多量に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　１に類似するがきめが細かい。

SK-29 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A屑石黄多、敢に含り。しまり・粘性あり。
2 暗褐色土　黒色土を多量に含む。しまり・粘性若干あり。
3 黄褐色土　ローム風化土主体であり、径１～３mmのロームブロックを若干含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　２に類似するが色調がやや明るい。しまり・粘性あり。

SK-30 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を多量に含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。

SK-31 土層説明

1 明褐色土　径１mm以下のローム粒子を含む。しまり・粘性なし。
2 明褐色土　径１～５cmのロームブロックを含む。しまり・粘性なし。

SK-32 土層説明

1 暗褐色土　径１～３cmのロームブロックを若干含む。しまりなし、粘性若あり。
2 暗黄色土　径１～３cmのロームブロック主体である。しまりなし、粘性若干あり。
3 暗褐色土　黒色土主体であり、１より少ないがロームブロックを若干含む。しまり・粘性なし。
4 暗褐色土　１に類似するが色調がやや暗い。

SK-33 土層説明

1 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性がある。
2 暗黄色土　ローム質土を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-34 土層説明

1 暗褐色土　炭化物粒子を多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。

SK-35 土層説明

1 暗灰褐色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗灰褐色土　黒色土主体であるが、径１cmのローム粒を多く含む。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　ローム粒子を多く含むが浅間山系A軽石は見られない。しまり粘性なし。
4 暗黄色土　ローム風化土主体の層である。しまりなし、粘性あり。
5 暗褐色土　３に類似するが、ローム粒子の含有量が少ない。

SK-36 土層説明

1 茶褐色土　径0.5～1.5cm のブロックと白色テフラを多く含む。しまり若干あり、粘性なし。
2 茶褐色土　１に類似するが、ロームブロック・白色テフラの含有量が少ない。
3 暗褐色土　粘性はないが、比較的しまっており均質である。
4 暗黄色土　３に類似するが、更に均質であり色調が暗い。
5 暗褐色土　径５cm程のハードロームブロックを多く含む。しまり、粘性あり。

SK-37 土層説明

1 暗褐色土　しまりあり、粘性なし。
2 暗褐色土　ローム風化土を比較的多く含む。しまりあり、粘性なし。
3 暗黄褐色土　ローム質土主体層である。しまり、粘性あり。

SK-38 土層説明

1 暗灰褐色土　若干の白色パミスを含む。しまり・粘性なし。
2 暗灰褐色土　１に類似するが、ややしまっていて緻密である。
3 暗黄褐色土　径１mm以下のローム粒子と径１cm以下のローム粒を若干含む。しまり若干あり、粘性なし。
4 暗褐色土　径１mm以下のをローム粒子を比較的多く含む。しまり、粘性なし。
5 暗褐色土　３を斑状に含む。しまり若干あり、粘性なし。
6 暗黄褐色土　ローム風化土層主体である。しまり・粘性あり。

SK-40 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗黄色土　径0.5cm程のロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。

SK-41 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を含まない。しまりあり、粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒子・白色テフラを若干含む。しまり・粘性あり。

SK-42 土層説明

1 暗褐色土　ローム粒・ローム粒子を多量に含む。しまりなし、粘性若干あり。

SK-44 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石と、径１～２cmの、ローム粒を多量に含む。しまり・粘性なし。

SK-45 土層説明

1 暗褐色土　ローム粒を多量に含む。しまり・粘性なし。
2 暗黄褐色土　ローム粒・径３cm大のロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。
3 暗褐色土　ローム粒子・炭化粒子を若干含む。しまり・粘性あり。

SK-46 土層説明

1 暗褐色土　比較的均質土である。しまり・粘性あり。
2 暗褐色土　Y・Pを若干含む。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　Y・Pを含み、径3cmのロームブロックを若干含む。良くしまっている。

SK-47 土層説明

1 暗褐色土　しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　比較的良くしまっている。Y・P、ローム粒子を多く含む。

SK-48 土層説明

1 暗灰褐色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性あり。
2 暗灰褐色土　ローム粒子・浅間山系A軽石を多く含む。しまり・粘性なし。

SK-49 土層説明

1 暗灰褐色土　Y・P、ローム粒子を多く含む。しまりあり、粘性なし。

SK-50 土層説明

1 暗褐色土　しまりなし、粘性若干あり。

SK-51 土層説明

1 暗褐色土　Y・P、ローム粒を若干含む。非常に良くしまっている。
2 暗黄色土　ロームブロックを若干含む。非常に良くしまっている。

SK-52 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラ・ローム粒子を比較的多く含む。しまり・粘性あり。
2 暗黄色土　ローム風化土主体である。しまり、粘性強い。

SK-53 土層説明

Ⅰ 表土
1 暗褐色土　径1mm以下の白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまり・粘性弱い。
2 暗黄色土　ローム風化土を非常に多く含む。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　2に類似するが更に多い。

SK-54 土層説明

Ⅰ 表土
Ⅱ 暗灰褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまりあり。粘性弱い。
1 暗褐色土　径1mm以下の白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまり・粘性弱い。
2 暗褐色土　径1～3cmのロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。
3 暗褐色土　径1～2cmのロームブロックを多量に含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　径1～5cmのロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。
5 暗褐色土　径1mm以下のローム粒子、白色パミスを若干含む。しまり・粘性弱い。
6 暗黄色土　ローム風化土を非常に多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-55 土層説明

Ⅰ 表土
1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　径1mm程のローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 明褐色土　ローム粒を多量に含み、ローム質である。しまり・粘性若干あり。

SK-56 土層説明

Ⅰ 表土
1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 黒色土　黒色の有機質層である。しまり・粘性あり。
3 黒色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　ローム風化土を多量に含む。しまり・粘性若干あり。
5 暗灰褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまりあり・粘性弱い。

SK-57 土層説明

Ⅰ 表土
1 暗灰褐色土　浅間山系A軽石を含む。しまり・粘性なし。
2 黒色土　浅間山系A軽石、有機質黒色土を含む。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
4 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。
5 暗黄色土　ローム風化土を多く含む。しまり・粘性若干あり。
6 暗灰褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまりあり。粘性弱い。

SK-58 土層説明

Ⅰ 表土
Ⅱ 暗灰褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまりあり。粘性弱い。
1 暗褐色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　浅間山系A軽石・ローム粒子を含む。しまり・粘性弱い。
4 暗黄色土　ローム風化土を多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-59 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまりなし、粘性あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-60 土層説明

1 暗褐色土　Y・Pを多く含む。しまり・粘性あり。
2 暗黄色土　ローム質土主体である。しまり・粘性あり。
3 暗褐色土　1に類似するが、Y・Pがややや少ない。
4 暗黄色土　2に類似するが、更に硬質である。しまり非常に強く、粘性あり。

SK-61 土層説明

1 暗灰褐色土　浅間山系A軽石を含まない。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまり若干あり、粘性あり。

SK-62 土層説明

1 暗褐色土　径5cmのロームブロックを含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒子・ローム粒を多く含む。しまり弱く、粘性なし。
3 明灰色土　ローム風化土層で、ある。しまり弱く、粘性強い。

SK-63 土層説明

1 明褐色土　上面は非常に硬質で硬化面をなしている。しまりあり、粘性なし。
2 暗黄褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。
3 暗褐色土　しまり・粘性弱い。
4 暗褐色土　若干の白色テフラを含む。しまりあり、粘性弱い。
5 暗黄褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-64 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラ、Y・P、ローム粒子を若干含む。しまり、粘性なし。
2 暗黄色土　ローム粒子を非常に多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層主体である。しまり・粘性強い。

SK-65 土層説明

1 暗褐色土　Y・Pを多く含む。しまり若干あり、粘性なし。
2 暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性強い。

SK-66 土層説明

1 暗灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　径3cm程のロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。

SK-67 土層説明

1 暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒を1より多く含む。しまりなし、粘性若干あり。

SK-68 土層説明

1 暗褐色土　径1cm以下のローム粒、炭化粒子を若干含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗黄色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。
3 暗褐色土　径1mmのローム粒子・炭化粒子を多量に含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　3に類似するが、ローム粒子が非常に多い。
5 暗褐色土　4に類似する。同一層である可能性がある。
6 明褐色土　ローム粒子・炭化粒子を多く含む。
7 暗黄褐色土　ローム質土を非常に多く含む。しまり・粘性あり。

SK-69 土層説明

1 明灰褐色土　Y・Pを若干含む。しまり・粘性なし。
2 明灰褐色土　白色テフラを含まない。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム粒子を非常に多く含む。しまり・粘性あり。

SK-70 土層説明

1 黒色土　炭化粒子層である。しまり・粘性なし。
2 暗灰褐色土　ローム風化土を多量に含む。しまり・粘性なし。
3 暗灰褐色土　2を斑状に含む。しまり・粘性なし。
4 暗灰褐色土　2に類似するが、色調がやや暗い。しまり・粘性なし。

SK-71 土層説明

1 明灰褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄褐色土　Y・Pを若干含み、ローム風化土主体である。しまり・粘性あり

SK-72 土層説明

1 暗褐色土　径1mm以下の炭化粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、炭化粒子を含まない。
3 暗黄褐色土　ローム風化土主体である。しまり・粘性あり。

SK-73 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム粒子を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。

SK-74 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　ローム質土を斑状に含む。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　ローム質土主体であり白色テフラを若干含む。しまり・粘性あり。

SK-75 土層説明

1 黒色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 黒色土　4を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
3 黒色土　ローム粒子を比較的多く含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　均質である。しまり・粘性あり。
5 暗褐色土　ロームブロックを若干含む。しまり・粘性あり。
6 暗黄褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性強い。

SK-76 土層説明

1 暗褐色土　径1mm以下の炭化粒子を若干含む。しまり・粘性あり。
2 暗黄色土　ローム質土主体である。しまり・粘性あり。

SK-77 土層説明

1 暗褐色土　径1mm以下の炭化粒子を若干含む。しまり・粘性あり。
2 暗黄色土　ローム質土主体である。しまり・粘性あり。

SK-78 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
2 黒色土　白色テフラ・炭化粒子を若干含む。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　径1～3cmのロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。

SK-79 土層説明

1 黒色土　骨片と径1～10mm程の炭化物を含み、径1mm程の焼土粒子を若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまりなし、粘性若干あり。
3 暗黄褐色土　ローム風化土主体である。しまり・粘性若干あり。

SK-80A 土層説明

1 黒色土　炭化物と焼土を非常に多く含む。
2 黒色土　炭化物を非常に多く含む。焼けた片岩礫なども含む。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　浅間山系A軽石と炭化粒子を若干含む。しまり・粘性あり。
4 黒色土　炭化粒子を多く含む。しまり・粘性なし。
5 黒色土　炭化粒子・ローム粒子を比較的多く含む。しまり・粘性なし。
6 暗褐色土　径1～5mmのローム粒・ローム粒子を非常に多く含む。しまり・粘性若干あり。
7 暗黄褐色土　ローム風化土主体である。しまり・粘性あり。
8 暗黄褐色土　当地基本土層である。ローム上面のローム二次堆積土。
9 暗灰褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまりあり。粘性弱い。

SK-80B 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を多量に含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが、浅間山系A軽石の量が少ない。
3 褐色土　2に類似するが、色調が明るい。
4 褐色土　3に類似するが、色調が更に明るい。
5 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。しまり・粘性あり。

SK-81 土層説明

1 暗灰色土　径1mm程のローム粒子・白色パミスを多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗灰色土　1に類似するが、更にしまっている。色調はやや明るく白色パミスの量が少ない。
3 暗灰褐色土　1に類似するが、ローム粒子などは含まないが白色パミスを若干含む。しまり・粘性なし。
4 暗褐色土　黒色の有機質の様な層である。しまり・粘性なし。

5 暗灰褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりなし、粘性あり。
6 暗褐色土　2類似層を斑状に含み、ローム粒も混じる。しまり・粘性あり。
7 暗黄色土　ローム粒・ロームブロックを非常に多く含む。しまり・粘性あり。
8 暗褐色土　6に類似するが、ローム粒子を含まない。しまり・粘性あり。

SK-82 土層説明

1 暗灰色土　しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　ローム粒子と炭化粒子を若干含む。しまりなし、粘性若干あり。
4 暗黄褐色土　ローム風化土主体である。しまりなし、粘性若干あり。
5 暗黄褐色土　4に類似するが、更にローム質である。

SK-83 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　2を斑状に含む。しまりあり、粘性なし。

SK-84 土層説明

1 暗黄色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。

SK-85 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗褐色土　径1mm以下の炭化粒子を微量含む。しまり・粘性なし。
3 暗黄褐色土　ローム風化土層である。しまりなし、粘性若干あり。
4 暗褐色土　1に類似するが、色調がやや明るい。
5 暗黄褐色土　しまりなし、粘性若干あり。
6 暗褐色土　5を斑状に含む。しまり・粘性あり。

SK-86 土層説明

1 黒色土　黒色の有機質層である。しまりあり、粘性なし。
2 暗褐色土　3を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　ローム質土主体であるが、1を斑状に含む。しまり・粘性あり。

SK-87 土層説明

1 暗黄褐色土　ローブロックを多く含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒子を比較的多く含む。しまり・粘性あり。

SK-88 土層説明

1 明褐色土　ローム風化土層である。しまりややあり、粘性なし。
2 暗褐色土　均質である。しまり・粘性ややあり。
3 暗褐色土　2に類似するが、ローム粒子を多く含む。
4 暗褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-89 土層説明

1 暗褐色土　暗褐色土・白色粒子を多く含む。径5mm程のブロックを多量に含む。しまり良く、粘性なし。
2 明褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　2に類似するが、色調がやや暗い。しまりややあり、粘性なし。

SK-90 土層説明

1 明褐色土　ローム質土を斑状に含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1を斑状に含む。しまりは若干あるが、粘性なし。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。
4 暗褐色土　径1～2mmのローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-91 土層説明

1 黒色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
2 黒色土　1に類似するが、ロームブロックを多く含む。
3 黒色土　2に類似するが、更にロームブロックを多く含む。
4 暗黄色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性若干あり。
5 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-92 土層説明

1 明褐色土　白色テフラを若干含む。しまり、粘性なし。
2 黒色土　径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　2に類似するが色調がやや明るい。しまり・粘性若干あり。
4 暗褐色土　ローム風化土主体である。しまり・粘性あり。
5 暗黄色土　4に類似するが、更にローム風化土を多く含み色調が明るい。

SK-93 土層説明

1 暗褐色土　径1mm程のローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
2 黒色土　炭化物粒子を非常に多く含む。しまり・粘性あり。
3 暗褐色土　1に類似するが、ローム粒子が少ない。
4 暗黄色土　ローム粒子・ロームブロックを若干含む。しまり・粘性あり。

SK-94 土層説明

1 暗褐色土　径1mm程の炭化粒子を若干含む。しまりあり、粘性なし。
2 暗黄色土　ローム質土である。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　2に類似するが、色調がやや明るい。

SK-95 土層説明

Ⅰ 表土
Ⅱ 暗灰褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまりあり。
1 暗褐色土　粘性弱い。
ローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。

SK-96 土層説明

Ⅰ 表土
Ⅰ' 表土　白色テフラを多く含む。
Ⅱ 暗灰褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまりあり。
1 暗灰色土　粘性弱い。
白色パミスを若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　炭化物・焼土粒を比較的多く含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗黄色土　ローム粒子を多量に含む。しまり・粘性あり。
5 明褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性あり。

SK-97 土層説明

Ⅰ 表土
Ⅰ' 表土　白色テフラを多く含む。
Ⅱ 暗灰褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまりあり。
粘性弱い。
1 暗褐色土　白色テフラ・ローム粒子を若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗灰褐色土　ローム粒子を多く含む。しまりあり。粘性弱い。

SK-98A・98B 土層説明

1 明褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性なし。
2 暗黄色土　しまり・粘性若干あり。

3 明褐色土　径1mm以下のローム粒子を若干含む。しまり・粘性なし。
4 黒色土　径1～10mm程のローム粒を若干含み、炭化粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
5 黒色土　4に類似するが、ローム粒子を更に多く含む。

SK-99 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
2 明褐色土　白色パミスを若干含む。しまり若干あり、粘性なし。
3 暗褐色土　径1mm程の炭化粒子を含む。しまりあり、粘性なし。
4 暗褐色土　3に類似するが、炭化粒子を含まない。
5 暗褐色土　ローム風化土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
6 暗黄色土　ローム風化土を多量に含む。しまり・粘性若干あり。
7 暗褐色土　径1～5mmのローム粒を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-100 土層説明

1 暗褐色土　しまりあり、粘性なし。
2 暗黄色土　ローム風化土主体である。

SK-101 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　白色パミスを若干含む。しまり・粘性なし。

SK-102 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
2 明灰色土　1に類似するが、浅間山系A軽石が少ない。
3 暗褐色土　径5cm程のロームブロックを多く含む。しまり・粘性なし。

SK-103 土層説明

1 暗褐色土　ローム微粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、色調がやや暗い。
3 暗褐色土　径1～5mm程のローム粒を若干含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　3を斑状に含む。しまり・粘性あり。
5 暗黄色土　径1～5cmのロームブロックを多量に含む。しまり・粘性あり。

SK-104 土層説明

1 黒色土　径1mm以下の炭化粒子主体であり、全体的に径1mm程の骨粉を含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム風化土主体である。しまり・粘性若干あり。

SK-105 土層説明

1 褐色土　径1mmの炭化粒子を含む。しまり・粘性なし。
2 黒色土　炭化物主体の層であり下面には人骨を多く含む。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　人骨を若干含む。しまり若干あり、粘性なし。
4 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
5 暗褐色土　比較的良くしまっており、粘性も若干ある。
6 暗黄色土　径1～5mmのローム粒を多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-106 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが白色テフラを含まない。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ハードローム質である。しまり・粘性強い。

SK-107A 土層説明

1 黒色土　炭化物主体の層であり、径1mm程の骨片を斑に含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　ローム風化土主体である。しまり・粘性若干あり。

SK-107B 土層説明

1 黒色土　径1～2mmのローム粒子を含む。しまり・粘性あり。
2 明褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　2に類似するが、更にローム質である。しまり・粘性あり。

SK-108A 土層説明

1 暗褐色土　若干の白色テフラを含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　粒子の細かい層である。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　ローム質土と、径1mm程の炭化粒子を含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　3に類似するが、ローム・質土の量が少ない。

SK-108B 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを微量に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　しまり・粘性あり。

SK-109 土層説明

1 暗褐色土　径1mm以下の白色パミス・ローム粒子を若干含む。しまり・粘性あり。
2 暗褐色土　ローム粒子・ロームブロックを比較的多く含む。しまり・粘性あり。

SK-110 土層説明

1 暗褐色土　径1mm以下の白色パミス、Y・Pを若干含む。しまり・粘性あり。
2 暗黄色土　ローム質土である。しまり・粘性あり。

SK-111 土層説明

1 暗褐色土　径1mm程のローム粒子を多く含み、若干の炭化粒子を含む。しまり・粘性あり。
2 暗褐色土　径1cm程のローム粒子を含む。しまり・粘性あり。
3 暗褐色土　径1～3cm程のロームブロックを含み、若干の炭化物を含む。しまり、粘性あり。
4 黒色土　有機質の黒色土主体であるが若干のローム粒・ローム粒子を含む。しまり・粘性あり。
5 黒色土　4に類似するが、ローム粒・ローム粒子の含有量が多い。
6 暗黄色土　ローム風化土主体である。しまり・粘性強い。

SK-112 土層説明

1 明褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。
2 褐色土　径5mm程のローム粒・ローム粒子を若干含み、焼土粒子を含む。しまり・粘性あり。
3 黒色土　炭化物層の為黒色を呈す。炭化物・骨粉を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-113 土層説明

I 明灰色土　浅間山系A軽石を多く含む。しまり・粘性なし。
II 明灰色土　1に類似するが、色調がやや暗い。
1 明褐色土　ローム粒子を多量に含む。しまり・粘性あり。
2 明褐色土　1に類似するが、ロームブロックを多量に含む。
3 暗灰褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまりあり。粘性弱い。

SK-114 土層説明

1 黒色土　径1mm以下の炭化粒子・骨片を全体的に疎らに含む。しまり・粘性あり。
2 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-115 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。(攪乱) しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまりあり、粘性なし。
3 暗黄色土　ローム風化土主体である。しまり・粘性若干あり。
4 黄色土　ローム主体である。しまり・粘性あり。

SK-116 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。(攪乱)
2 黒色土　白色パミスを若干含む。しまり・粘性なし。
3 黒色土　2に類似するが白色パミスを含まない。
4 暗褐色土　炭化粒子と骨片を若干含む。しまり・粘性あり。
5 暗黄色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-117 土層説明

1 暗褐色土　白色パミス・ローム粒子を若干含む。
2 暗褐色土　1に類似するが、ローム風化土を多く含んでいる層で色調が明るい。
3 暗黄色土　ローム風化土主体である。しまり・粘性あり。

SK-119 土層説明

1 暗褐色土　白色パミスを含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが、白色パミスを含まない。
3 暗黄色土　ローム粒を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-120 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。(攪乱)
2 暗褐色土　径1～10mmのローム粒を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　2に類似するが色調がやや暗く、ローム粒をあまり含まない。
4 黒色土　径1～10mmのローム粒を若干含む。しまり・粘性若干あり。
5 黒色土　径1mmのローム粒子を多く含む。しまり良く、粘性あり。
6 黒色土　ローム粒を含まない。しまり・粘性あり。

SK-121 土層説明

1 暗褐色土　2を斑状に含み、若干の骨片を含む。ややしまっている。
2 暗褐色土　1に類似するが、色調がやや暗い。
3 暗黄色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。

SK-122 土層説明

1 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性あり。
2 暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまり・粘性あり。
3 暗褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。

SK-124 土層説明

1 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　径1～3mm程の炭化粒を含む。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　ローム粒子を非常に多く含む。しまり・粘性あり。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-125 土層説明

1 黒色土　炭化物と骨片主体である。しまり・粘性若干あり。
2 明褐色土　径1mm以下の骨片を若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-126 土層説明

1 黒色土　6を斑状に含む。しまり・粘性あり。
2 黒色土　径1mm程の炭化粒子を含む。しまり・粘性あり。
3 黒色土　炭化物を多く含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
5 暗褐色土　径1～5mmのローム粒を含む。しまり・粘性若干あり。
6 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性あり。
7 暗黄色土　径3～5cmのロームブロックを比較的多く含む。しまり・粘性あり。
8 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまりあり、粘性なし。
9 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
10 暗褐色土　11に類似するが、白色粒子を含まない。
11 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
12 暗褐色土　径1～2mmの炭化粒子を含む。しまり・粘性あり。
13 暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまり・粘性あり。
14 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
15 暗黄色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。
16 暗褐色土　径1～3mm程の炭化粒をふくむ。しまり・粘性あり。

SK-127 土層説明

1 黒色土　炭化物・炭化粒子を多量に含む。しまり・粘性弱い。
2 黒色土　ローム粒子・炭化粒子を非常に多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-128A 土層説明

1 暗褐色土　2を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　ローム粒子を非常に多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　径1mm程のローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗褐色土　2と類似するが、色調がやや暗い。
5 暗褐色土　ロームブロックを比較的多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-129 土層説明

1 暗灰色土　浅間山系A軽石を含む。しまり・粘性なし。
2 黒色土　径1mm以下のローム粒子を含む。しまり・粘性若干あり。
3 黒色土　2に類似するが、更にローム粒子を多く含む。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-130 土層説明

1 暗灰色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　径1～4cmのロームブロックを若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　径1mmのローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
4 黒色土　径1mmのローム粒子を少量含む。しまり・粘性若干あり。

SK-131 土層説明

1 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、更に明褐色土を含む。
3 暗黄色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-132 土層説明

1 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、ローム微粒子含有量が多い。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-133 土層説明

1 黒色土　炭化物主体であり、全体的に骨片を含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　径5cm程のロームブロックを多量に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-134 土層説明

1 明褐色土　径1mm以下のローム粒子及び炭化物を多く含む。しまり・粘性なし。

2 黒色土　炭化物主体であるが、全体的に骨片を含む。しまりあり、粘性なし。
3 暗黄色土　ローム風化土を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-135 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　4に類似するが、白色テフラを含まない。
3 暗黄色土　径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-136 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラ・ローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
2 暗黄色土　径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-137 土層説明

1 暗褐色土　しまり・粘性若干あり。
2 明褐色土　ローム微粒子を多く含み、骨片を若干含む。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-138 土層説明

1 黒色土　径1～5mmの炭化物を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム微粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム微粒子を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-140 土層説明

1 暗褐色土　径1～3mmの炭化物を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　4に類似するが、色調がやや明るい。

SK-141 土層説明

1 明褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 明褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-142 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
1 暗黄色土　ローム粒子を比較的多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-143 土層説明

I 表土
1 暗黄色土　ロームブロックを多量に含む。しまり・粘性あり。
2 黒色土　ローム粒子を多量に含む。しまり・粘性あり。
3 黒色土　2に類似するが、ローム粒子を含まない。

SK-144A 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石・ローム粒を微量含む。しまり・粘性なし。
2 黒色土　骨片・炭化物粒を少量含む。しまり・粘性若干あり。
3 黒色土　骨片・炭化物粒を含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗褐色土　ローム粒を多量に含む。しまり・粘性あり。
5 暗黄褐色土　ローム風化土主体の層。しまり・粘性若干あり。

SK-144B 土層説明

1 暗灰褐色土　骨片を微量に含む。しまり・粘性なし。
2 黒色土　骨片・炭化物を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-145 土層説明

1 明褐色土　しまり・粘性なし。
2 黒色土　径1mm以下のローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム粒子を多量に含む。しまり・粘性若干あり。

SK-146 土層説明

1 暗褐色土　径1mm程のローム粒子を含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが、ローム粒子が更に多い。
3 暗黄色土　径1～3cmのロームブロックを多量に含む。しまり・粘性若干あり。

SK-147 土層説明

1 暗灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。(現代耕作土)
2 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム粒を多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-148 土層説明

I 現代耕作土
1 明褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　径1～3cmのロームブロックを若干含む。しまり・粘性なし。
4 暗褐色土　ローム微粒子を多く含む。しまりなし、粘性若干あり。
5 暗黄色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。

SK-149A 土層説明

I 現代耕作土
1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗黄色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-150 土層説明

1 暗褐色土　骨片・ローム粒を含む。火葬墓である。しまり・粘性若干あり。

SK-152 土層説明

1 暗灰色土　浅間山系A軽石を多量に含む。しまり・粘性なし。
2 暗灰色土　浅間山系A軽石を若干含む。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　浅間山径A軽石を微量に含む。しまり・粘性なし。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-153 土層説明

1 暗黄色土　ローム微粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　1に類似するが、更にローム微粒子が多い。

SK-154 土層説明

1 明褐色土　径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまりなし、粘性若干あり。
2 明灰色土　径1mm以下の炭化粒子・骨粉を若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 明灰色土　径1mm～3mm程の骨粉、・ローム粒子を比較的多く含む。しまり・粘性若干あり。
4 黒色土　炭化物を非常に多く含み、骨粉も比較的多く含む。しまり・粘性あり。
5 暗黄色土　しまり・粘性あり。ローム粒子を若干含む。しまり・粘性なし。
6 暗黄色土　5に類似するが、更にローム粒子が多い。

SK-155 土層説明

I 表土
1 暗褐色土　径1mm以下のローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、更にローム粒子が多い。

SK-156・157 土層説明

I 表土

1 暗褐色土　浅間山系A軽石とローム粒を多く含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　ローム質土である。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　ームブロックを非常に多く含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性なし。

SK-158 土層説明

1 現代耕作土
1 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　ローム風化土を多く含む。しまり・粘性あり。

SK-159 土層説明

1 暗褐色土　径1mm程の炭化物を少量含む。しまり・粘性あり。
2 暗黄色土　径1mm程の炭化物を少量含む。しまり・粘性あり。

SK-160 土層説明

1 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが、明褐色土を含まない。
3 明褐色土　ローム風化土を多く含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗褐色土　2に類似するが、色調が更に暗い。

SK-161 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが、白色テフラを含まない。
3 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。

SK-162 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　径1mm以下のローム粒子主体の層である。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　ローム風化土を斑状に含み、若干のローム粒子を含む。しまり・粘性若干あり。

SK-163 土層説明

1 暗褐色土　ローム質土を斑状に含む。しまり強く、粘性あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、色調がやや明るい。
3 暗褐色土　ームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。
4 暗黄色土　ローム質土である。しまり・粘性あり。

SK-169A・169B 土層説明

1 暗褐色土　径1～10mmのローム粒を多く含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　径1mm程のローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　ームブロックを多く含む。しまり・粘性強い。
4 暗黄色土　ームブロック・ローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
5 暗褐色土　ームブロック・有機質の黒色土を若干含む。しまり・粘性あり。

SK-170 土層説明

1 黒色土　S1－04の有機質土層が入っている。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム風化土層である。しまり。粘性若干あり。
3 暗褐色土　2に類似するが、更にローム風化土が多い。
4 暗黄色土　ローム風化土が多い。しまり・粘性あり。

SK-171 土層説明

1 明褐色土　径1mm以下の焼土粒子・炭化粒子を含む。しまり・粘性若干あり。
2 黒色土　炭化物主体の層である。焼土粒子を含む。しまり・粘性若干あり。

SK-172 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　ローム質である。しまり・粘性あり。

SK-173 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似しているが、ローム粒子が多い。
3 暗褐色土　ローム粒を多く含む。しまり・粘性あり。
4 暗黄色土　しまり・粘性あり。

SK-174 土層説明

1 黒褐色土　炭化物主体であり、骨が混ざっている。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
3 暗黄色土　ームブロックを多数含む。しまり・粘性あり。

SK-175 土層説明

1 暗褐色土　径1mm以下のローム粒子を若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが、ローム粒子の含有量が多い。
3 暗褐色土　ームブロックを多く含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　ローム粒子が非常に多い。しまり・粘性あり。
5 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性強い。

SK-176 土層説明

1 暗褐色土　浅間山系A軽石を多量に含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　径1cmのローム粒を含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム風化土を多量に含む。しまり・粘性若干あり。

SK-177 土層説明

1 黒色土　しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-178 土層説明

1 暗灰褐色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗黄色土　ームブロック・ローム粒子を多量に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム質土主体の層である。しまり・粘性あり。

SK-180 土層説明

1 暗褐色土　2を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、色調がやや明るい。
3 暗黄色土　径1mm程のローム粒子を多量に含む。しまり・粘性あり。

SK-181 土層説明

1 黒色土　炭化物粒子主体である。骨片を全体的に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-182 土層説明

1 暗褐色土　骨片を全体的に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　径1mm程の炭化粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。

SK-183 土層説明

1 暗褐色土　しまり・粘性なし。
2 暗黄色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　径1～2mmの炭化物粒を若干含む。しまり・粘性若干あり。

SK-184 土層説明

1 暗褐色土　径1mmのローム粒子を多量に含む。しまりなし、粘性あり。
2 明褐色土　1より、更にローム粒子を多く含み色調も明るい。しまり・粘性あり。
3 黄褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまりあり、粘性なし。
5 黄褐色土　径1～5mmのローム粒を多く含む。しまり・粘性若干あり。
6 黄褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-185 土層説明

1 黒色土　径1～3cmのロームブロックを含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　3を斑状に含み、若干のローム粒を含む。しまり・粘性あり。
3 明褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。
4 明褐色土　3に類似するが、更にローム質土が多い。

SK-186 土層説明

1 暗褐色土　径1～3mm程の炭化物を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-187 土層説明

1 暗褐色土　白色パミスを若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　明褐色土を多少含むが、2程ではない。しまり・粘性若干あり。
4 暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-188 土層説明

1 明灰色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性弱い。
2 明灰色土　1に類似するが、白色テフラを含まない。
3 黒色土　明灰色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。

SK-189 土層説明

1 暗褐色土　骨粉を多く含む。しまり・粘性なし。
2 明褐色土　しまり・粘性若干あり。
3 明褐色土　1に非常に良く類似する。
4 暗褐色土　2に類似するが色調がやや暗い。
5 明褐色土　径1mm程の骨粉を若干含む。しまり・粘性若干あり。

SK-190 土層説明

1 明灰色土　白色粒子を若干含む。しまり・粘性弱い。
2 暗褐色土　骨粉を多く含む。しまり・粘性弱い。
3 黒色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。

SK-191・192 土層説明

1 暗褐色土　白色パミスを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　有機質黒色土を若干含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗褐色土　ロームブロック・ローム粒を多く含む。しまり・粘性強い。
5 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
6 暗褐色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-193 土層説明

1 暗褐色土　ローム粒子を若干ふくむ。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム粒子を非常に多く含む。しまり・粘性強い。

SK-194 土層説明

1 暗褐色土　骨粉を微量に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く含み、骨粉を微量に含む。

SK-198A・198B 土層説明

1 暗黄色土　径10mm程のローム粒・ローム粒子を多く含む。
2 暗黄色土　1に類似するが、ロームの含有量が少ない。
3 暗褐色土　骨粉を多量に含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
5 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
6 暗褐色土　白色粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。

SK-199 土層説明

1 暗褐色土　骨粉を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、骨粉を含まない。
3 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり。粘性あり。
4 暗褐色土　ローム粒子・白色パミスを若干含む。しまり・粘性若干あり。

SK-200 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含有。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　1に類似するが色調がやや明るい。
3 暗黄色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性なし。

SK-202 土層説明

1 暗褐色土　径1～5mm程の骨片を全体的に疎らに含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、骨片を含まない。
3 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。

SK-203・204 土層説明

1 暗灰色土　浅間山系A軽石を多く含む。(攪乱)しまり・粘性なし。
2 明褐色土　白色テフラ・炭化物粒子を若干含む。
3 暗褐色土　炭化物粒子・ローム粒子を若干含む。
4 黒色土　炭化物主体である。礫が混ざる。
5 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。

SK-205 土層説明

1 暗褐色土　暗黄色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-206 土層説明

1 暗褐色土　骨片が貝層の様に出土している。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗褐色土　径1mm程のローム粒を若干含む。しまり・粘性若干あり。

SK-207 土層説明

1 暗褐色土　ローム粒子・骨片を含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが色調がやや明るい。

SK-208 土層説明

1 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗黄色土　径3mm程のローム粒を含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-209 土層説明

1 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。

2 暗褐色土　白色テフラ・ロームブロックを含む。しまり・粘性若干あり。

SK-210 土層説明

1 明灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。
2 暗褐色土　ロームブロックを含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-211 土層説明

1 暗褐色土　径1mm以下の白色テフラ・ローム粒子を若干含む。しまり・粘性あり。

SK-212 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを微量に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
3 黒色土　灰主体の層である。層右側は炭化物塊・焼土が多く、全体的に骨粉が多い。しまり・粘性若干あり。
4 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
5 暗褐色土　炭化物が多い。しまり・粘性若干あり。

SK-213 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム風化土が1に混ざり、色調がやや明るい。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　2に類似するが、更にローム風化土が多い。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性強い。

SK-214 土層説明

1 暗褐色土　小円礫を多量に含み、骨片を微量含む。しまり・粘性なし。
2 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-215 土層説明

1 暗褐色土　径1mm以下のローム粒子を含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　暗褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
4 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。

SK-216 土層説明

1 暗褐色土　径1 mm程のローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　径1～10mm程のローム粒を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　1に類似するが、ローム粒子を多く含む。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性強い。

SK-217・218 土層説明

1 暗褐色土　白色パミスを若干含む。しまり・粘性弱い。
2 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　1に類似するが、白色パミスを含まない。
4 暗褐色土　2に類似するが、ローム粒子を含まない。

SK-221 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。
4 暗黄色土　径1mm以下のローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
5 暗黄色土　ローム風化土層であり、白色パミスを若干含む。しまり・粘性あり。

SK-222 土層説明

1 暗灰色土　しまり・粘性なし。
2 暗灰色土　1に類似するが、色調がやや明るい。
3 暗褐色土　径1～3cmのロームブロックを多く含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。
5 暗褐色土　ローム風化土層である。明褐色土を斑状に含む。

SK-223 土層説明

1 暗灰褐色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。(攪乱) しまり・粘性なし。
2 暗灰褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
3 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性あり。
4 暗褐色土　3に類似するが、ローム粒を若干含む。

K-224 土層説明

1 明褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性弱い。
2 明褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性若干あり。
3 黒色土　明褐色土層を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
4 黒色土　3に類似するが明褐色土を含まない。
5 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-225 土層説明

1 黄褐色土　ロームブロックを非常に多く含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　径1～5mm程のローム粒・ロームブロックを若干含む。しまり・粘性若干あり。
3 黄褐色土　径1～2mm程のローム粒・ロームブロックを多く含む。しまり・粘性若干あり。
4 黄褐色土　径2～5cm程のロームブロックを多く含む。しまり・粘性若干あり。
5 暗褐色土　径1～10mm程のローム粒と径5cm程のロームブロックを若干含む。しまり・粘性あり。
6 暗褐色土　径1～3mm程のローム粒を多く含む。しまり・粘性強い。

SK-226 土層説明

1 黒色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、明褐色土主体である。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性強い。

SK-227 土層説明

1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性あり。
2 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性あり。
3 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-228A・228B 土層説明

1 明褐色土　若干の炭化物を含む。しまり・粘性若干あり。
2 黒色土　炭化物主体の層であり、底面に礫がある。しまり・粘性若干あり。
3 暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり・粘性あり。
4 暗黄褐色土　ローム粒子・白色テフラを多く含む。しまり・粘性あり。

SK-229 土層説明

1 灰褐色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
2 暗褐色土　ローム質土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
3 暗褐色土　ローム質土を多く含む。しまり・粘性若干あり。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

SK-230 土層説明

1 暗褐色土　しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　ローム粒子を若干含む。しまり・粘性若干あり。ロー
3 暗黄色土　ム風化土層である。しまり・粘性あり。

SK-231 土層説明

I 暗灰色土　浅間山系A軽石を非常に多く含む。しまり・粘性なし。
II 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性なし。
1 暗褐色土　明褐色土を斑状に含む。しまり・粘性若干あり。
2 暗褐色土　1に類似するが、明褐色土の含有量が更に多い。
3 黄褐色土　ローム粒子を非常に多く含む。しまり・粘性強い。
4 暗黄色土　II風化土層である。しまり・粘性若干あり。
5 暗褐色土　ロームブロックを若干含む。しまり・粘性若干あり。

SK-232 土層説明

I 現代耕作土
I' 近現代耕作土　浅間山系A軽石がやや少ない。
II　ローム廃移層。ローム二次堆積土。
1 暗褐色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性若干あり。
2 黒色土　白色テフラを若干含む。しまり・粘性あり。
3 褐色土　ローム風化土を斑状に含む。しまり・粘性あり。
4 暗黄色土　ローム風化土を多量に含む。しまり・粘性強い。

SK-234 土層説明

1 明褐色土　ロームブロックを多く含む。しまり・粘性弱い。
2 明褐色土　白色パミスを多く含む。しまり・粘性なし。
3 明褐色土　1に類似するが、ロームブロックを含まない。
4 暗黄色土　ローム風化土層である。しまり・粘性若干あり。

表9　土坑一覧表 (1)

No.	長径×短径×深さ (cm)	形　状	位　置	時　期	備　　考
1	200 × 90 × 10	長楕円形	B－7G	中世	S1－01の覆土を切る。かわらけ出土。土葬墓と思われる。
2	200 × 180 × 15	長方形	F－10G	現代	浅間A軽石を多量に含む。
3	190 × 160 × 92	楕円形	H－7G	中世	S1－02の覆土を切る。かわらけ出土。土葬墓と思われる。
4	直径 170 × 42	円形	G－6G	現代	浅間A軽石を多量に含む。
5	126 × 80 × 28	長方形	F－9G	近・現代	浅間A軽石を含む。
6	直径 68 × 22	円形	F－10G	不明	性格不明。
7	直径 95 × 14	円形	G－9G	不明	性格不明。
8	100 × 60 × 28	楕円形	H－10G	不明	性格不明。
9	82 × 64 × 24	楕円形	H－10G	不明	性格不明。
10	108 × 64 × 24	長方形	H－10G	中世	性格不明。
11	74 × 66 × 22	楕円形	H－10G	不明	性格不明。
12	85 × 78 × 20	楕円形	H－6G	古墳前期	性格不明。
13	104 × 80 × 24	楕円形	F－6G	不明	性格不明。
14	180 × 132 × 128	隅丸方形	I－6G	中世	墓の可能性あり。
15	210 × 164 × 22	長楕円形	I－6G	中世	墓の可能性あり。
16	120 × 110 × 16	歪な円形	I－5G	中世	墓の可能性あり。
17	70 × 62 × 24	円形	G－5G	近世	浅間A軽石を含む。
18	70 × 60 × 22	楕円形	G－5G	不明	性格不明。
19	114 × 84 × 25	長方形	G－5G	中世	覆土が人為的堆積を示す。墓の可能性あり。
20	84 × 68 × 34	楕円形	D－6G	中世	墓の可能性あり。
21	64 × 50 × 14	楕円形	E－6G	現代	浅間A軽石を多量に含む。
22	68 × 52 × 26	楕円形	D－9G	不明	性格不明。
23	84 × 60 × 28	長方形	E－8G	中世	性格不明。
24	74 × 68 × 36	歪な円形	E－9G	中世	性格不明。
25	86 × 43 × 34	楕円形	E－9G	不明	性格不明。
26	140 × 54 × 45	長方形	F－7G	中世	墓の可能性あり。
27	134 × 74 × 41	長方形	F－8G	中世	墓の可能性あり。
28	84 × 68 × 26	楕円形	I－9G	不明	性格不明。
29	80 × 52 × 30	楕円形	I－9G	中世	墓の可能性あり。
30	88 × 62 × 28	楕円形	I－9G	中世	墓の可能性あり。
31	96 × 44 × 42	楕円形	J－6G	近世	土葬墓の可能性大。
32	208 × 114 × 40	長方形	J－6G	中世	覆土が人為的堆積を示す。墓の可能性あり。
33	96 × 59 × 22	楕円形	J－5G	不明	性格不明。
34	76 × 54 × 22	隅丸方形	K－4G	中世	炭化物が層を成す。火葬墓の可能性大。
35	426 × 98 × 48	長方形	J－7G	不明	性格不明。
36	150 × 132 × 50	楕円形	K－4G	中世	板碑出土。人為的堆積を示す。
37	78 × 59 × 25	隅丸方形	K－5G	不明	性格不明。
38	121 × 65 × 34	長楕円形	K－5G	近世	覆土が人為的堆積を示す。墓の可能性あり。
39	125 × 98 × 30	楕円形	K－5G	不明	古銭出土。浅間A軽石混入。性格不明。
40	160 × 94 × 31	楕円形	G－9G	中世	墓の可能性あり。
41	94 × 55 × 22	楕円形	H－8G	中世	性格不明。
42	78 × 70 × 18	歪な円形	I－8G	不明	性格不明。

表10　土坑一覧表 (2)

No.	長径×短径×深さ（cm）	形　状	位　置	時　期	備　　考
43	100 × 74 × 20	楕円形	G－5G	中世	土師器の壺出土。
44	84 × 75 × 29	方形	J－7G	不明	性格不明。
45	110 × 80 × 46	長方形	J－8G	中世	古銭出土。人為的堆積を示す。土葬墓。
46	116 × 90 × 32	楕円形	L－7G	不明	性格不明。
47	83 × 57 × 18	歪な方形	L－8G	中世	性格不明。
48	83 × 68 × 22	楕円形	K－8G	現代	撹乱の可能性あり。
49	95 × 66 × 12	楕円形	K－8G	不明	性格不明。
50	104 × 64 × 26	楕円形	K－9G	不明	性格不明。
51	108 × 65 × 20	長方形	K－9G	縄文	性格不明。
52	60 × 48 × 32	方形	J－9G	不明	性格不明。
53	150（確）× 90 × 30	長方形	J－10G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
54	140（確）× 150 × 50	長方形	K－9G	中世	調査区壁にかかる。人為的堆積を示す。
55	100（確）× 70 × 29	楕円形	K－9G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
56	85 × 50（確）× 44	円形	K－9G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
57	170 × 70（確）× 38	円形	L－9G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
58	180 × 110（確）× 28	楕円形	M－8G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
59	94 × 42 × 20	楕円形	L－6G	近・現代	性格不明。
60	148 × 105 × 28	楕円形	L－4G	縄文	性格不明。
61	104 × 72 × 22	楕円形	L－3G	不明	性格不明。
62	128 × 100 × 40	楕円形	L－4G	中世	古銭出土。土葬墓と思われる。
63A	195 × 140 × 24	楕円形	L－4G	中世	礎多く、かわらけ破片と板碑破片出土。土葬墓と思われる。
63B	100 × 80 × 12	楕円形	L－4G	中世	かわらけ出土。覆土が人為的堆積を示す。墓の可能性あり。
64	110 × 80 × 27	長楕円形	L－3G	中世	古銭出土。土葬墓と思われる。
65	100 × 80 × 28	半月形	L－3G	中世	古銭出土。墓の可能性あり。
66	145 × 110 × 34	楕円形	L－2G	中世	覆土が人為的堆積を示す。墓の可能性あり。
67	118 × 75 × 26	楕円形	K－3G	中世	板碑破片出土。覆土が人為的堆積を示す。土葬墓。
68	122 × 106 × 37	隅丸方形	M－3G	中世	火葬墓と思われる。
69	直径 90 × 20	歪な円形	M－4G	不明	性格不明。
70	100 × 38 × 23	長楕円形	M－4G	中世	火葬墓である。
71	直径 70 × 45	円形	M－4G	中世	性格不明。
72	82 × 42 × 26	楕円形	M－4G	中世	火葬墓である。
73	115 × 69 × 32	楕円形	M－5G	中世	古銭出土。土葬墓と思われる。
74	100 × 90 × 37	歪な円形	M－3G	中世	性格不明。
75	145 × 123 × 36	円形	N－4G	中世	性格不明。
76	92 × 70 × 24	楕円形	N－6G	中世	火葬墓である。
77	83 × 64 × 24	楕円形	N－6G	中世	火葬墓である。
78	88 × 72 × 28	楕円形	N－6G	中世	性格不明。
79	108 × 80 × 16	楕円形	M－4G	中世	骨片混入。火葬墓である。
80A	100 × 88 × 36	台形	M－3G	不明	炭化物を多く含む。火葬墓と思われる。
80B	70 × 50 × 40	楕円形	M－3G	不明	性格不明。
81	144 × 118 × 46	楕円形	N－2G	中世	S1－06覆土内に検出。土葬墓。
82	130 × 128 × 48	楕円形	N－3G	不明	性格不明。
83	104 × 71 × 26	楕円形	O－4G	中世	性格不明。
84	76 × 51 × 22	楕円形	O－5G	中世	性格不明。
85	141 × 92 × 31	楕円形	P－6G	中世	覆土が人為的堆積を示す。墓の可能性あり。
86	70 × 57 × 23	楕円形	P－6G	中世	性格不明。
87	107 × 82 × 28	楕円形	P－5G	不明	覆土が人為的堆積を示す。墓の可能性あり。
88	114 × 73 × 35	楕円形	P－5G	不明	性格不明。
89	64 × 48 × 28	楕円形	P－5G	中世	性格不明。
90	67 × 58 × 40	歪な円形	P－5G	不明	性格不明。
91	直径 98 × 47	歪な円形	Q－5G	不明	性格不明。
92	88 × 58 × 47	楕円形	Q－4G	中世	性格不明。
93	157 × 68 × 26	長方形	N－6G	中世	火葬墓である。
94	103 × 52 × 20	楕円形	N－6G	中世	火葬墓と思われる。
95	直径 60 × 12	円形	N－7G	不明	性格不明。
96	225 × 78（確）× 42	楕円形	N－7G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
97	142 × 96 × 28	長楕円形	O－7G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
98A	72 × 62 × 34	楕円形	O－3G	不明	性格不明。
98B	66 × 48 × 28	楕円形	O－3G	中世	火葬墓と思われる。
99A	170 × 70 × 60	楕円形	O－3G	中世	古銭出土。土葬墓である。
99B	100 × 65 × 56	楕円形	O－3G	中世	古銭出土。土葬墓である。
100	84 × 58 × 26	長方形	N－4G	不明	性格不明。
101	直径 74 × 30	歪な円形	N－4G	近・現代	性格不明。
102	80 × 68 × 42	歪な円形	N－4G	近・現代	古銭出土。性格不明。

表11　土坑一覧表 (3)

No.	長径×短径×深さ (cm)	形　状	位　置	時　期	備　　考
103	120 × 86 × 52	歪な台形	N－4 G	中世	古銭出土。土葬墓である。
104	80 × 64 × 24	隅丸方形	N－4 G	中世	火葬墓である。
105	170 × 80 × 24	楕円形	O－5 G	中世	骨片出土。火葬墓である。
106	90 × 70 × 25	楕円形	O－4 G	中世	古銭出土。性格不明。
107A	125 × 120 × 23	歪な円形	L－3 G	中世	骨片出土。火葬墓である。
107B	120 × 70 × 22	楕円形	L－3 G	中世	古銭出土。土葬墓と思われる。
108A	126 × 82 × 32	楕円形	O－4 G	中世	歯を検出、板碑破片出土。土葬墓と思われる。
108B	60 × 50 × 26	楕円形	O－4 G	中世	性格不明。
109	136 × 72 × 26	楕円形	O－4 G	中世	多量の礫を含む。集石墓。
110	122 × 103 × 20	楕円形	O－4 G	中世	集石墓である。
111	100 × 81 × 54	方形	O－5 G	中世	覆土が人為的堆積を示す。土葬墓である。
112	154 × 132 × 28	楕円形	O－5 G	中世	骨片検出、火葬墓。
113	108 × 80 × 16	楕円形	O－6 G	中世	骨片検出、火葬墓。
114	104 × 91 × 30	楕円形	O－5 G	中世	骨片検出、土葬墓。
115	110 × 76 × 21	楕円形	L－2 G	中世	宝篋印塔の相輪部出土。墓であるかは不明。
116	90 × 70 × 34	楕円形	P－3 G	中世	板碑、骨片出土。土葬墓である。
117	100 × 80 × 22	楕円形	G－3 G	中世	性格不明。
118	直径 120 × 36	円形	P－3 G	中世	板碑出土。性格不明。
119	128 × 103 × 30	楕円形	P－4 G	中世	かわらけ片出土。墓の可能性あり。
120	134 × 86 × 42	楕円形	P－4 G	近世	覆土が人為的堆積を示す。墓と思われる。
121	124 × 64 × 32	長楕円形	P－4 G	中世	古銭出土。土葬墓である。
122	140 × 110 × 36	楕円形	P－4 G	中世	骨片出土。火葬墓である。
123	欠				
124	138 × 86 × 42	楕円形	N－5 G	中世	古銭、骨片出土。土葬墓。
125	135 × 100 × 21	楕円形	P－5 G	中世	五輪塔水輪、骨片出土。火葬墓。
126	384 × 176 × 40		N－4 G	中世	古銭出土　A～D 4 基の楕円形土壙の集合体。各々単独の土坑で墓と思われる。
127	100 × 80 × 21	楕円形	M－6 G	中世	古銭、骨片出土。火葬墓。
128A	130 × 80 × 50	楕円形	N－5 G	中世	上面の礫は焼けているが、土葬墓と思われる。
128B	136 × 50 × 29	楕円形	N－5 G	中世	性格不明。
129	113 × 87 × 33	方形	Q－3 G	中世	古銭出土。性格不明。
130	118 × 51 × 40	長方形	Q－3 G	中世	覆土が人為的堆積を示す。墓と思われる。
131	104 × 80 × 42	台形	Q－4 G	中世	墓の可能性あり。
132	116 × 76 × 26	方形	Q－4 G	中世	古銭出土。土葬墓。
133	100 × 83 × 16	楕円形	Q－4 G	中世	骨片出土。土葬墓。
134	150 × 90 × 26	楕円形	M－1 G	中世	骨片出土。土葬墓。
135	60 × 48 × 34	楕円形	M－2 G	中世	性格不明。
136	96 × 58 × 22	楕円形	M－2 G	中世	宝篋印塔塔身出土。
137	92 × 64 × 25	楕円形	Q－4 G	中世	古銭、骨片出土。土葬墓。
138	111 × 78 × 20	楕円形	R－4 G	中世	古銭、鬼状の鐵錐出土。土葬墓である。
139	115 × 71 × 41	楕円形	R－4 G	不明	性格不明。
140	111 × 80 × 24	楕円形	R－4 G	近世	火葬墓の可能性あり。
141	178 × 81 × 29	楕円形	R－5 G	中世	性格不明。
142	130 × 120（確）× 28	楕円形	Q－5 G	近・現代	調査区壁にかかる。性格不明。
143	132 × 110（確）× 52	不整形	R－5 G	現代	調査区壁にかかる。性格不明。
144A	78 × 70 × 35	円形	Q－4 G	中世	骨片出土。土葬墓。
144B	130 × 90 × 40	楕円形	Q－4 G	中世	板碑破片、古銭、骨片出土。火葬墓である。
145	103 × 56 × 29	楕円形	R－4 G	近世	性格不明。
146	76 × 57 × 26	隅丸方形	S－4 G	近世	性格不明。
147	80（確）× 76 × 26	楕円形	S－4 G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
148	160（確）× 132 × 50	不整形	S－4 G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
149A	84 × 80（確）× 27	楕円形	T－4 G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
149B	75 × 56 × 33	楕円形	T－4 G	不明	性格不明。
150	67 × 50 × 16	楕円形	R－3 G	中世	骨片出土。火葬墓。
151	132 × 94 × 26	楕円形	T－3 G	不明	性格不明。
152	160 × 120 × 31	楕円形	T－2 G	現代	性格不明。
153	90 × 70 × 28	隅丸方形	T－2 G	現代	性格不明。
154	140 × 125 × 41	楕円形	R－3 G	中世	内耳鍋、古銭、骨片出土。土葬墓である。
155	94（確）× 66 × 25	楕円形	T－2 G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
156	80 × 64（確）× 26	楕円形	U－2 G	現代	調査区壁にかかる。性格不明。
157	100（確）× 90（確）× 34	不整形	U－2 G	現代	調査区壁にかかる。性格不明。
158	63 × 30（確）× 20	円形	U－3 G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
159	76 × 56 × 26	楕円形	P－2 G	中世	火葬墓の可能性あり。
160	90 × 58 × 19	長方形	Q－2 G	中世	五輪塔火輪・水輪、古銭出土。土葬墓の可能性あり。

表12　土坑一覧表 (4)

No.	長径×短径×深さ (cm)	形　状	位　置	時　期	備　　考
161	159 × 106 × 22	長方形	P－1G	中世	性格不明。
162	145 × 90 × 31	楕円形	K－8G	中世	板碑出土。「文応（または文永）元年」と「建武」の紀年銘を持つ板碑あり。
163	126 × 100 × 53	楕円形	K－7G	中世	板碑出土。
164	110 × 108 × 26	隅丸方形	L－6G	不明	性格不明。
165	132 × 112 × 23	歪な円形	L－6G	不明	S1－04にかかる。性格不明。
166	130 × 116 × 27	歪な円形	L－5G	中世	S1－04にかかる。性格不明。
167	156 × 120 × 24	歪な方形	K－5G	現代	性格不明。
168	129 × 126 × 24	歪な円形	K－5G	不明	性格不明。
169	115 × 100 × 24	楕円形	L－6G	中世	古銭出土。土葬墓。
170	124 × 54 × 25	長方形	M－5G	近世	S1－04にかかる。古銭出土。性格不明。
171	128 × 94 × 10	楕円形	L－2G	中世	骨片出土。火葬墓。
172	61 × 50 × 25	楕円形	I－2G	中世	性格不明。
173	122 × 88 × 26	楕円形	J－2G	中世	性格不明。
174	132 × 93 × 27	長方形	J－2G	中世	骨片出土。火葬墓である。
175	102 × 79 × 30	方形	K－2G	不明	覆土が人為的堆積を示す。土葬墓と思われる。
176	90 × 70 × 22	楕円形	J－4G	現代	浅間A軽石を多量に含む。性格不明。
177	95 × 74 × 28	楕円形	L－2G	不明	性格不明。
178	130 × 112 × 32	方形	L－1G	近世	覆土が人為的堆積を示す。土葬墓と思われる。
179	116（確）× 75 × 25	長楕円形	L－1G	不明	調査区壁にかかる。性格不明。
180	98 × 82 × 18	円形	M－2G	中世	かわらけ、板碑出土。土葬墓。
181	90 × 76 × 22	楕円形	M－2G	中世	古銭、骨片出土。炭化物中に竹を含む。火葬墓。
182	93 × 64 × 16	楕円形	N－3G	中世	古銭、骨片出土。火葬墓。
183	112 × 92 × 18	楕円形	N－7G	中世	板碑、古銭出土。土葬墓。
184	82 × 55 × 29	楕円形	K－1G	中世	板碑、古銭出土。火葬墓。
185	162 × 140 × 43	楕円形	N－1G	中世	S1－06、SD－02にかかる。板碑、宝篋印塔、五輪塔、骨片出土。土葬墓。
186	102 × 74 × 23	楕円形	O－2G	中世	板碑出土。土葬墓。
187	120 × 94 × 27	楕円形	P－2G	中世	板碑、骨片出土。「貞治五年」の紀年銘を持つ板碑あり。近隣からかわらけ出土。土葬墓。
188	106 × 74 × 30	楕円形	N－2G	中世	S1－06覆土内に検出。かわらけ、板碑破片出土。土葬墓。
189	112 × 51 × 18	長楕円形	N－2G	中世	S1－06覆土内に検出。骨片出土。火葬墓。
190	133 × 60 × 22	長方形	O－2G	中世	S1－06覆土内に検出。板碑破片、骨片出土。火葬墓。
191	166 × 72（確）× 21	不整形	O－2G	中世	S1－06覆土内に検出。性格不明。
192	190 × 100 × 40	楕円形	O－2G	中世	S1－06覆土内に検出。土葬墓。
193	121 × 86 × 45	円形	M－2G	不明	S1－06覆土内に検出。
194	直径66 × 20	歪な円形	O－2G	中世	骨片出土。土葬墓。
195	欠				
196	欠				
197	147 × 99 × 20	楕円形	N－2G	中世	S1－06覆土内に検出。骨片出土。土葬墓。
198A	123 × 86 × 23	楕円形	N－3G	中世	S1－06覆土内に検出。骨片出土。土葬墓。
198B	78 × 64 × 23	方形	N－3G	中世	S1－06覆土内に検出。土葬墓。
199	139 × 98 × 30	楕円形	O－3G	中世	骨片出土。部分的に集石を検出。火葬墓。
200	102 × 79 × 19	方形	O－1G	中世	性格不明。
201	88 × 80 × 28	楕円形	O－1G	不明	S1－06にかかる。
202	67 × 41 × 22	楕円形	N－1G	近世	S1－06覆土内に検出。骨片出土。火葬墓。
203	96 × 66 × 25	楕円形	N－1G	中世	S1－06覆土内に検出。古銭、骨片出土。火葬墓。
204	95 × 69 × 24	楕円形	N－1G	中世	S1－06覆土内に検出。
205	86 × 45 × 23	楕円形	O－0G	近世	性格不明。
206	99 × 74 × 24	不整方形	P－1G	中世	骨片を多量に検出するが最上層に集中している。
207	116 × 68 × 27	長方形	P－1G	中世	板碑、骨片出土。「建武四年」と「永正三年」の紀年銘を持つ板碑あり。土葬墓。
208	115 × 58 × 26	長楕円形	P－2G	近世？	性格不明。
209	直径68 × 29	円形	P－2G	中世	性格不明。
210	122 × 68 × 26	楕円形	P－2G	近世	古銭出土。性格不明。
211	81 × 68 × 24	楕円形	P－2G	中世	板碑、宝篋印塔の笠部、古銭が出土。土葬墓。
212	145 × 84 × 26	楕円形	P－3G	中世	古銭、骨片出土。火葬墓。
213	85 × 76 × 28	隅丸方形	Q－2G	近世	性格不明。
214	109 × 52 × 24	長楕円形	Q－3G	不明	骨片出土。小円礫を多量に検出。性格不明。
215	76（確）× 78 × 34	楕円形	Q－3G	中世	SD－02に切られる。性格不明。
216	124 × 74 × 49	楕円形	R－2G	中世	底部に礫。土葬墓の可能性あり。
217	96 × 59 × 28	楕円形	Q－1G	中世	S1－07覆土内に検出。骨片出土。土葬墓。
218	65 × 50 × 24	楕円形	Q－1G	中世	S1－07覆土内に検出。骨片出土。土葬墓。
219	70（確）× 62 × 21	隅丸方形	Q－1G	不明	S1－07にかかる。性格不明。
220	55 × 54 × 35	円形	R－1G	不明	性格不明。
221	122 × 92 × 45	楕円形	S－2G	中世	性格不明。

表13　土坑一覧表 (5)

No.	長径×短径×深さ (cm)	形　状	位　置	時　期	備　　考
221	122 × 92 × 45	楕円形	S－2G	中世	性格不明。
222	125 × 105 × 29	方形	S－2G	近世	古銭出土。性格不明。
223	120 × 62 × 30	楕円形	S－3G	中世	古銭出土。性格不明。
224	75 × 52 × 32	楕円形	S－2G	近世	性格不明。
225	140 × 118 × 81	楕円形	S－3G	中世	古銭、板碑破片が出土。土葬墓。
226	79 × 68 × 42	方形	R－3G	近・現代	性格不明。
227	131 × 102 × 32	方形	S－3G	中世	性格不明。
228A	116 × 80 × 27	楕円形	S－3G	中世	火葬墓である。
228B	64 × 46 × 27	楕円形	S－3G	中世	火葬墓である。
229	130 × 60 × 44	楕円形	T－3G	近・現代	性格不明。
230	100 × 92 × 25	方形	T－2G	不明	性格不明。
231A	97 × 80（確）× 35	円形	P－0G	中世	調査区壁にかかる。骨片出土。土葬墓と思われる。
231B	96 × 32（確）× 46	円形	P－0G	中世	調査区壁にかかる。宝篋印塔相輪出土。土葬墓と思われる。
232	114（確）× 79 × 20	楕円形	L－1G	中世	調査区壁にかかる。古銭、骨片出土。火葬墓。
233	121 × 60（確）× 20	円形	M－2G	中世	S1－06にかかる。古銭出土。土葬墓。
234	109 × 70 × 16	楕円形	O－1G	不明	性格不明。

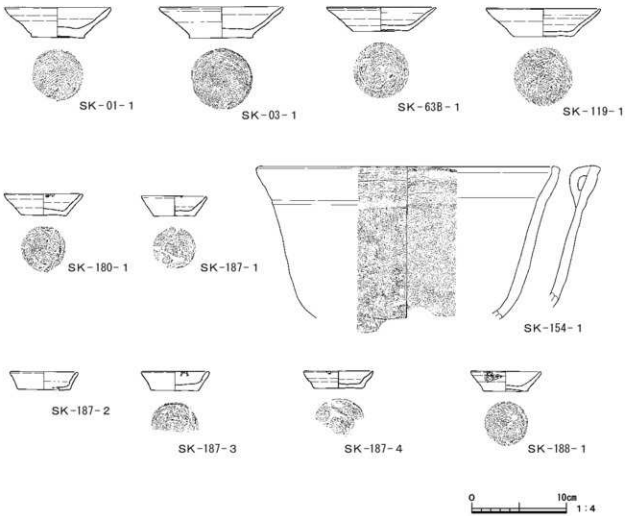


図56　土坑出土遺物 (1)

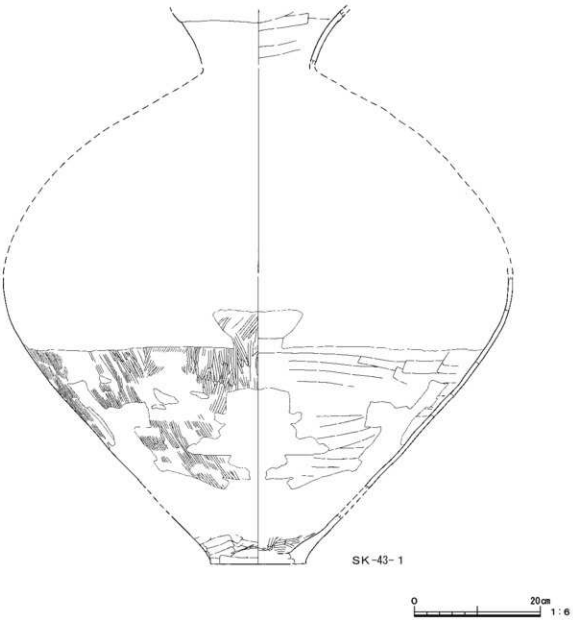


図57　土坑出土遺物(2)

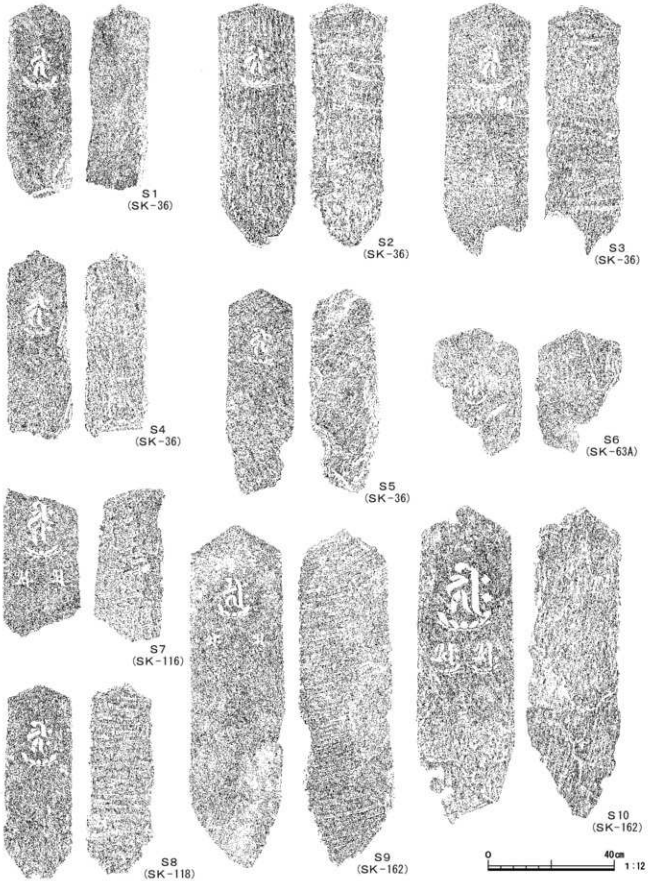

S1
(SK-36)
S2
(SK-36)
S3
(SK-36)
S4
(SK-36)
S5
(SK-36)
S6
(SK-63A)
S7
(SK-116)
S8
(SK-118)
S9
(SK-162)
S10
(SK-162)
0
40cm
1:12

図 58　土坑出土遺物 (3)

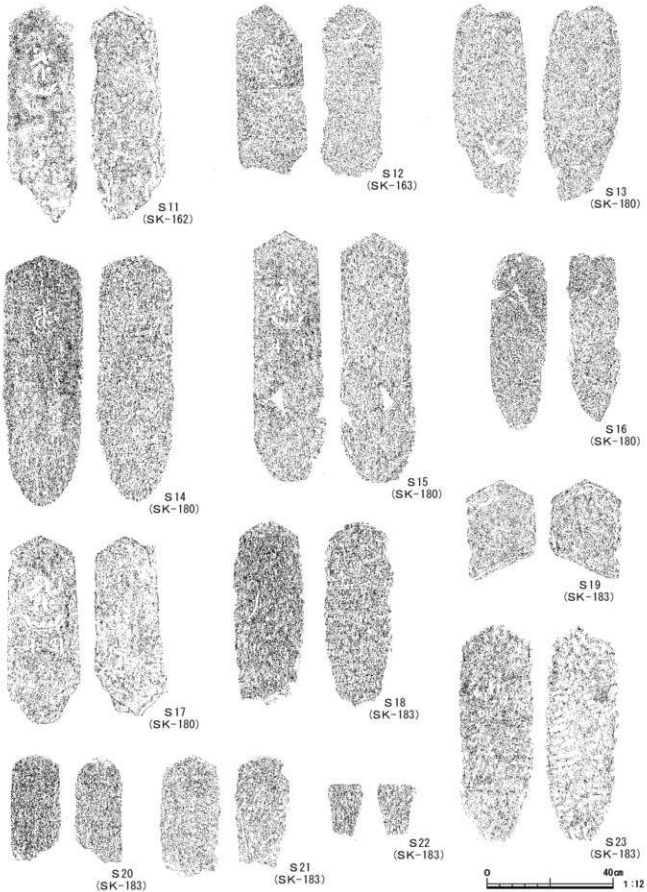

S11
(SK-162)
S12
(SK-163)
S13
(SK-180)
S14
(SK-180)
S15
(SK-180)
S16
(SK-180)
S17
(SK-180)
S18
(SK-183)
S19
(SK-183)
S20
(SK-183)
S21
(SK-183)
S22
(SK-183)
S23
(SK-183)
0
40cm
1:12

図59　土坑出土遺物 (4)

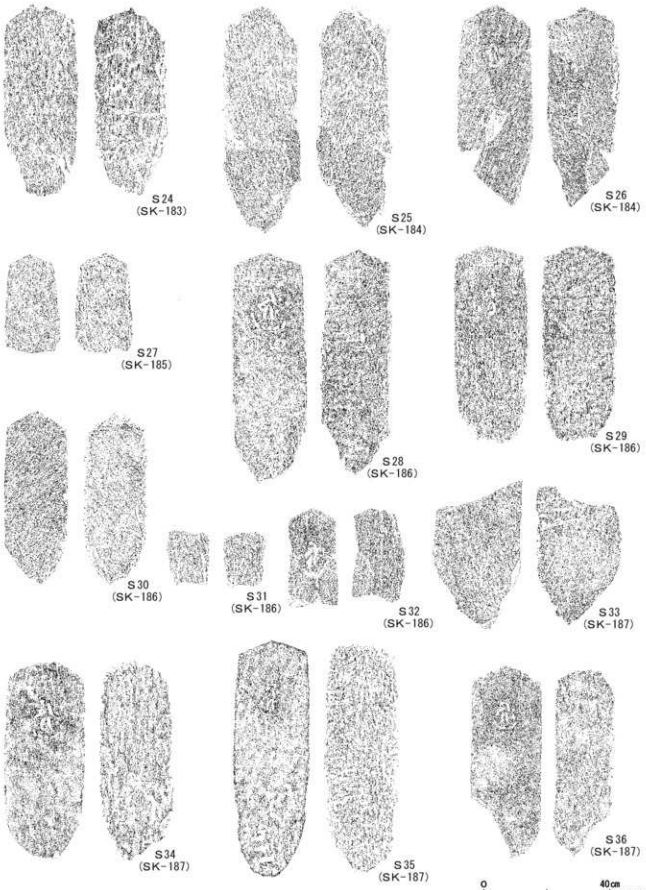

S24
(SK-183)
S25
(SK-184)
S26
(SK-184)
S27
(SK-185)
S28
(SK-186)
S29
(SK-186)
S30
(SK-186)
S31
(SK-186)
S32
(SK-186)
S33
(SK-187)
S34
(SK-187)
S35
(SK-187)
S36
(SK-187)
0
40cm
1:12

図 60　土坑出土遺物 (5)

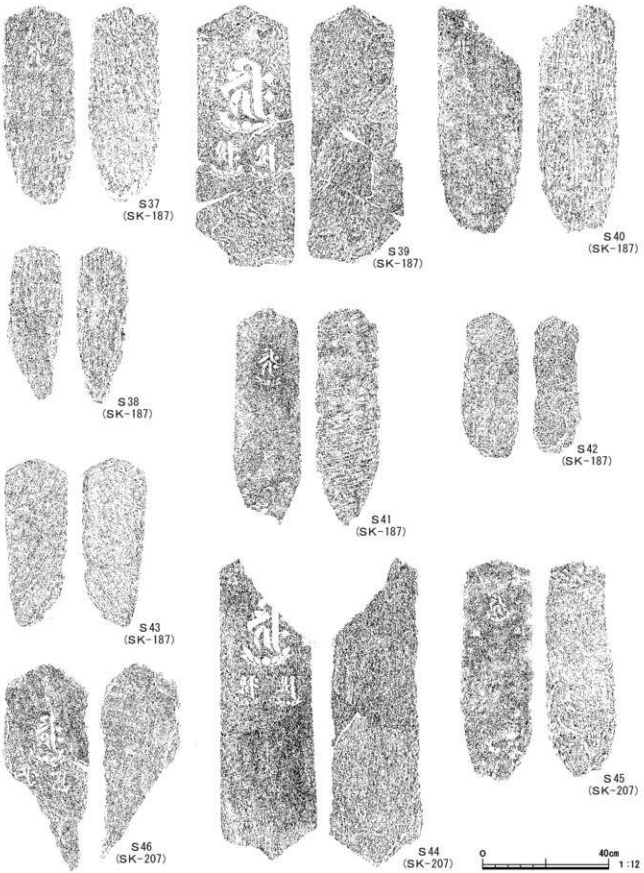

S37
(SK-187)
S39
(SK-187)
S40
(SK-187)
S38
(SK-187)
S41
(SK-187)
S42
(SK-187)
S43
(SK-187)
S46
(SK-207)
S44
(SK-207)
S45
(SK-207)
0
40cm
1:12

図61　土坑出土遺物 (6)

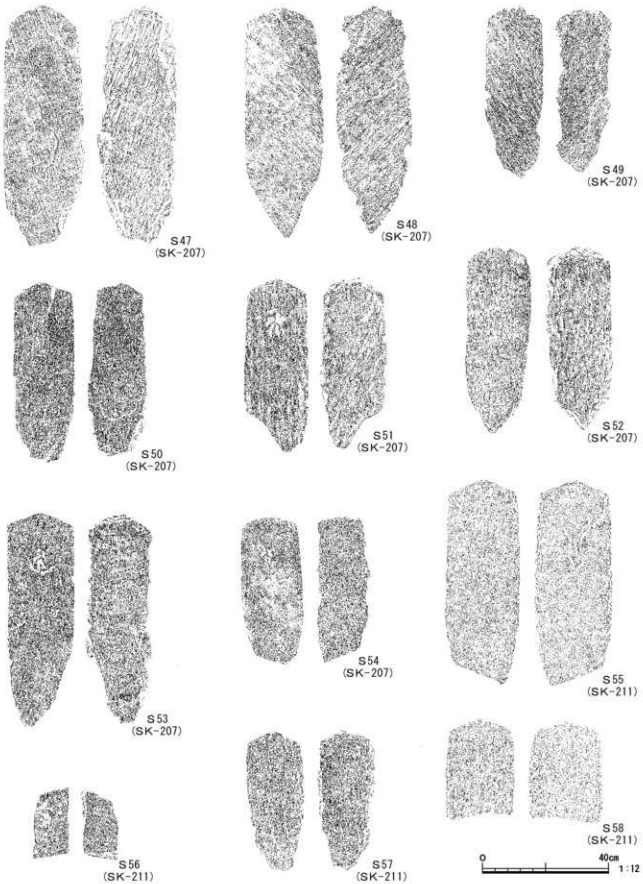

S47
(SK-207)
S48
(SK-207)
S49
(SK-207)
S50
(SK-207)
S51
(SK-207)
S52
(SK-207)
S53
(SK-207)
S54
(SK-207)
S55
(SK-211)
S56
(SK-211)
S57
(SK-211)
S58
(SK-211)
0
40cm
1:12

図 62　土坑出土遺物 (7)

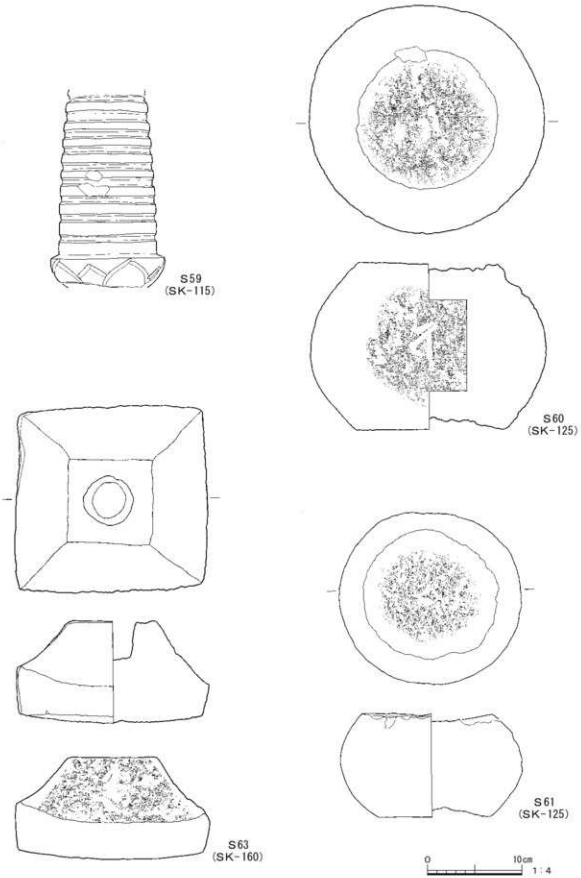


図 63　土坑出土遺物 (8)

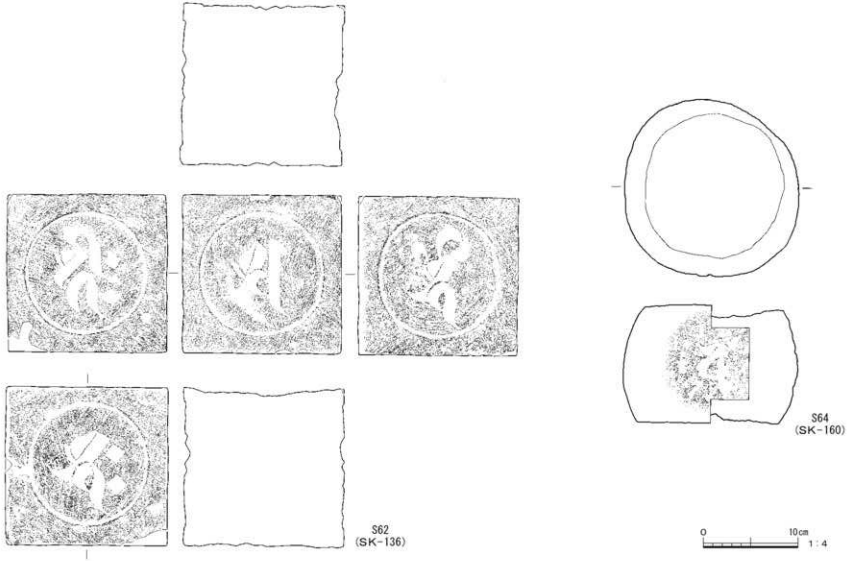


図64　土坑出土遺物 (9)

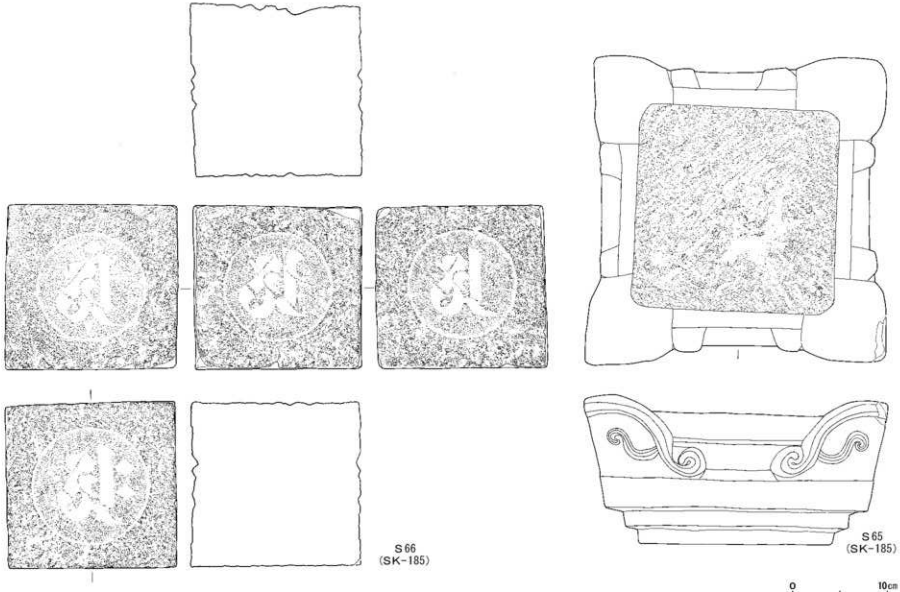


図65　土坑出土遺物（10）

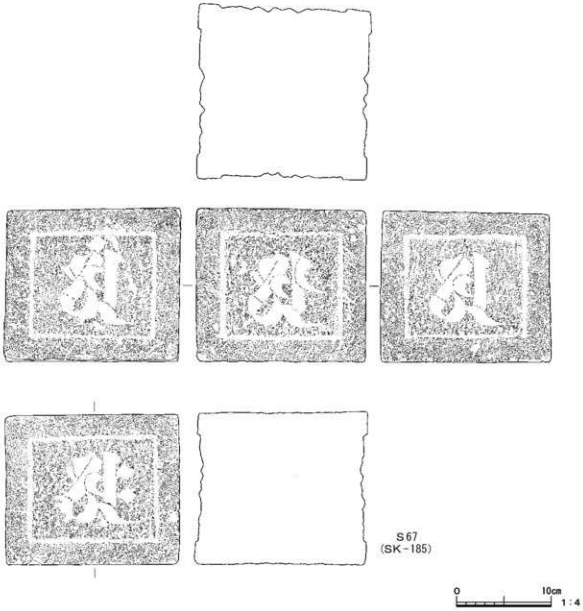


図66　土坑出土遺物 (11)

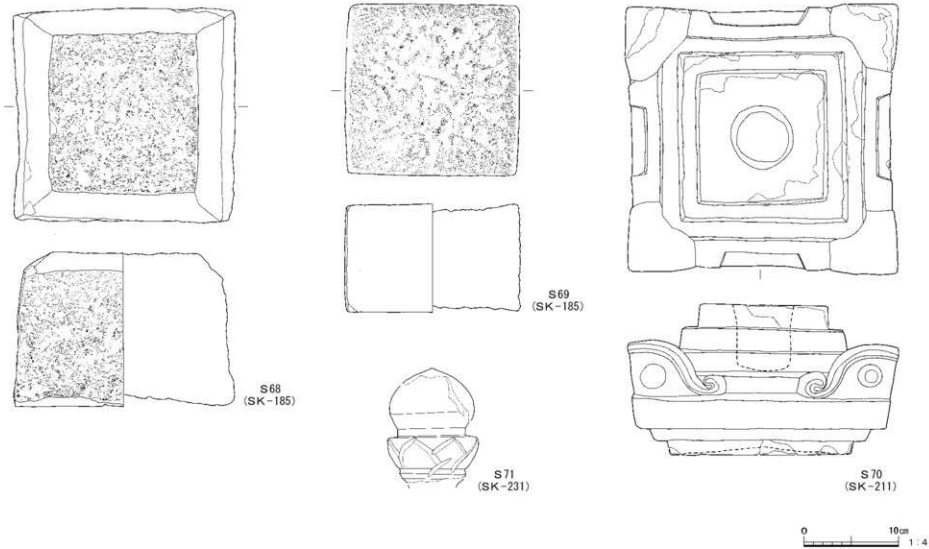


図67　土坑出土遺物 (12)

表 14　SK-01 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	中世土器 かわらけ	口径　11.2 底径　5.6 器高　3.3	口縁部は直縁的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	片岩、赤褐色粒 内外－橙色	完形。

表 15　SK-03 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	中世土器 かわらけ	口径　13.1 底径　6.6 器高　3.2	口縁部は直縁的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	赤褐色粒、黒色粒 内外－橙色	ほぼ完形。

表 16　SK-36 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S1	板　碑	長さ〔62.5〕 幅　20.7 厚さ　2.4	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座上に阿弥陀一尊種子を配する。線刻二条縁およびケガキ縁あり。やや粗雑な調整。	緑泥片岩	ほぼ完形。 6.3kg。
S2	板　碑	長さ〔79.2〕 幅　24.3 厚さ　2.8	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座上に阿弥陀一尊種子を配する。線刻二条縁あり。裏面に横位の鑿痕残る。	緑泥片岩	ほぼ完形。 10.2kg。
S3	板　碑	長さ〔82.0〕 幅　26.3 厚さ　2.4	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。縁刻二条縁あり。裏面に横位の鑿痕あり。	緑泥片岩	ほぼ完形。 11.7kg。
S4	板　碑	長さ〔60.8〕 幅　20.2 厚さ　2.2	両側縁部は下方に向けてやや開き、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座上に阿弥陀一尊種子を配する。裏面に横位の鑿痕あり。	緑泥片岩	4/5。 5.4kg。
S5	板　碑	長さ〔66.5〕 幅　21.4 厚さ　2.9	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。表裏面に横位の鑿痕あり。	緑泥片岩	一部欠損。 6.5kg。

表 17　SK-39 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M2	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.5。開元通宝。初鋳 621 年。	銅製	完形。
M18	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.6。天聖通宝。初鋳 1023 年。	銅製	4/5。
M49	古　銭	直径：2.3 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.5。紹聖元宝。初鋳 1094 年。	銅製	完形。

表 18　SK-43 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 壺	口径　－ 底径（15.5） 器高　－	口縁部は外反する。胴部下半は直線的に開いて立ち上がる。平底。	外面－口縁部輪積み痕を残し、ナデ調整、胴部中位ミガキ、下位～底部ナデ。内面－口縁部・胴部～底部ナデ。	赤褐色粒、白色粒 内外－明赤色	口縁部・胴部下半～底部1/4。

表 19　SK-62 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M9	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.0。咸平元宝。初鋳 998 年。	銅製	完形。
M20	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.8 重さ：2.3。景祐元宝。初鋳 1034 年。	銅製	完形。
M28	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.9。皇宋通宝。初鋳 1039 年。	銅製	完形。

表 20　SK-63A 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S6	板　　碑	長さ〔42.0〕 幅　28.2 厚さ〔2.6〕	両側縁部はやや惣れて並行し、頭部は山形を呈し、丸彫りと思われる彫り込みで蓮座上に阿弥陀一尊種る。裏面やや剥落。	緑泥片岩	1/3。 3.8kg。

表 21　SK-63B 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	中世土器 かわらけ	口径　11.6 底径　5.8 器高　2.5	口縁部は緩やかに外反しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	片岩、白色粒 内外－橙色	ほぼ完形。

表 22　SK-64 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）/ 形態等の特徴	材　質	備　考
M15	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.1。天禧通宝。初鋳 1017 年。	銅製	完形。
M45	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：3.0。元豊通宝。初鋳 1078 年。	銅製	完形。

表 23　SK-99A 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）/ 形態等の特徴	材　質	備　考
M6	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.3。宋元通宝。初鋳 960 年。	銅製	完形。
M55	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.4。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。

表 24　SK-99B 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）/ 形態等の特徴	材　質	備　考
M7	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.5。淳化元宝。初鋳 990 年。	銅製	完形。

表 25　SK-102 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）/ 形態等の特徴	材　質	備　考
M33	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.3。熙寧元宝。初鋳 1068 年。	銅製	ほぼ完形。

表 26　SK-103 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）/ 形態等の特徴	材　質	備　考
M52	古　銭	直径：2.2 厚さ：0.1 孔径：0.5 重さ：2.3。洪武通宝。初鋳 1368 年。	銅製	完形。

表 27　SK-106 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）/ 形態等の特徴	材　質	備　考
M4	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.9。開元通宝。初鋳 621 年。	銅製	完形。
M36	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：3.0。熙寧元宝。初鋳 1068 年。	銅製	完形。

表 28　SK-115 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S59	宝篋印塔 相輪	長さ〔20.4〕 幅　〔11.9〕	上端を欠失した九輪部と下部を欠失した請花部。請花部の直径は（12.0）cm。	安山岩	3/5。 2.4kg。

表 29　SK－116 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S7	板　　碑	長さ〔48.7〕 幅　　25.2 厚さ　　2.7	両側線部は並行する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。線刻二条線あり。表裏面とも丁寧に磨く。	緑泥片岩	1/2。 6.1kg。

表 30　SK－118 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S8	板　　碑	長さ〔63.1〕 幅　　22.0 厚さ　　3.1	両側線部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座上に阿弥陀一尊種子を配す。裏面に横位の鑿痕あり。	緑泥片岩	ほぼ完形。 8.0kg。

表 31　SK－119 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	中世土器 かわらけ	口径　12.1 底径　　6.1 器高　　3.0	口縁部は外反気味に開いて立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	赤褐色粒・白色粒 内外－橙色	ほぼ完形。

表 32　SK－121 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M24	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：3.0。皇宋通宝。初鋳 1039 年。	銅製	完形。
M29	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.7。皇宋通宝。初鋳 1039 年。	銅製	完形。

表 33　SK－124 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M23	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.8 重さ：2.2。皇宋通宝。初鋳 1039 年。	銅製	完形。
M53	古　銭	直径：2.3 厚さ：0.2 孔径：0.5 重さ：2.9。洪武通宝。初鋳 1368 年。	銅製	完形。
M60	古　銭	直径：2.6 厚さ：0.1 孔径：0.5 重さ：2.4。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。

表 34　SK－125 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S60	五輪塔 水輪	長さ　24.1 幅　　24.6 高さ　17.7	薬研彫りで、水（バ）の梵字を刻む。表面を磨き、上下面は浅く窪む。	安山岩	ほぼ完形。 10.6kg。
S61	五輪塔 水輪	長さ　18.3 幅　　19.3 高さ　11.0	小型の水輪。円形を呈するが、ややいびつ。表面を磨くが、荒れる。上下面は浅く窪む。	角閃石安山岩	ほぼ完形。 3.4kg。

表 35　SK－126 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M1	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.3。開元通宝。初鋳 621 年。	銅製	完形。

表 36　SK－129 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M19	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.3。景祐元宝。初鋳 1034 年。	銅製	完形。
M26	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.9。皇宋通宝。初鋳 1039 年。	銅製	完形。
M39	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：4.1。熙章元宝。初鋳 1068 年。	銅製	完形。
M40	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：3.4。泰寧元宝。初鋳 1068 年。	銅製	完形。

表 37　SK－132 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M8	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.1。至道元宝。初鋳 995 年。	銅製	ほぼ完形。
M25	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.4。皇宋通宝。初鋳 1039 年。	銅製	完形。
M38	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：3.4。熙寧元宝。初鋳 1068 年。	銅製	完形。
M50	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.3。政和通宝。初鋳 1111 年。	銅製	完形。

表 38　SK－136 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S62	宝篋印塔 塔身	長さ　16.9 幅　16.8 高さ　16.9	月輪内に薬研彫りで胎蔵界四方仏の種子を刻む。上・下面鑿痕残る。	安山岩	ほぼ完形。 8.7kg。

表 39　SK－138 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M14	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.0。天禧通宝。初鋳 1017 年。	銅製	完形。
M67	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.2 孔径：0.5 重さ：4.0。宣徳通宝。初鋳 1426 ～ 33 年。	銅製	完形。

表 40　SK－144B 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M3	古　銭	直径：2.3 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.6。開元通宝。初鋳 621 年。	銅製	完形。
M42	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.4。元豊通宝。初鋳 1078 年。	銅製	ほぼ完形。

表 41　SK－154 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	軟質陶器 内耳鍋	口径　32.2 底径　－ 器高　－	体部は膨らみ、口縁部は彎曲して開く。	外面－ロクロ整形、口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面－ロクロ整形、口縁部～胴部横位ヘラナデ。	角閃石・白色粒 内外－にぶい橙色	3/5。外面煤付着。
No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴			材　質	備　考
M21	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.4。皇宋通宝。初鋳 1039 年。			銅製	ほぼ完形。
M22	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.8。皇宋通宝。初鋳 1039 年。			銅製	完形。

表 42　SK－160 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S63	五輪塔 火輪	長さ　10.7 幅　20.3 厚さ　19.7	小型の火輪。薬研彫りで、火（ラ）の梵字を刻む。形状は均整がとれ、四隅はやや反り、底面も反る。軒口は斜めに切られる。整形は良好で、表面を磨く。	角閃石安山岩	ほぼ完形。 3.7kg。
S64	五輪塔 水輪	長さ　18.3 幅　18.4 高さ　12.5	小型の水輪。薬研彫りで、水（バ）の梵字を刻む。円形を呈するが、ややいびつで、表面を磨く。上下面は浅く窪む。	角閃石安山岩	ほぼ完形。 2.5kg。
No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴		材　質	備　考
M31	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.8。治平元宝。初鋳 1064 年。		銅製	完形。

表 43　SK-162 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石材	備考
S9	板碑	長さ 111.8 幅 30.2 厚さ 2.6	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀三尊種子を配す。紀年銘『文応（または文永）元年□月□日』とあり。その他の銘文は判読できず。線刻二条線およびケガキ線あり。裏面に横位の盤痕あり。	緑泥片岩	ほぼ完形。 20.3kg。
S10	板碑	長さ〔103.7〕 幅 31.4 厚さ 〔2.7〕	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りの蓮座を伴う阿弥陀三尊種子を配す。紀年銘『建武』と残る。	紅簾片岩ヵ	ほぼ完形。 14.4kg。
S11	板碑	長さ〔71.9〕 幅 22.4 厚さ 2.3	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りの蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。ケガキ線あり。 やや粗雑な調整。	緑泥片岩	5/6。 8.2kg。

表 44　SK-163 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石材	備考
S12	板碑	長さ〔58.5〕 幅 22.2 厚さ 2.4	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座上に阿弥陀一尊種子を配す。	緑泥片岩	4/5。 6.0kg。

表 45　SK-180 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 8.2 底径 4.5 器高 2.3	口縁部は緩やかに外反しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	片岩、赤褐色粒 内外－橙色	口縁部 1/4 損。内面一部煤付着。灯明皿に転用。

No.	器種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石材	備考
S13	板碑	長さ〔62.7〕 幅 23.6 厚さ 2.3	両側縁部はやや丸みを帯びて並行する。薬研彫りでやや小規模な蓮座上に阿弥陀一尊種子を配す。側面は垂直で、やや粗雑な調整。	結晶片岩	2/3。 5.0kg。
S14	板碑	長さ 81.4 幅 24.8 厚さ 2.3	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。基部はやや丸みを帯びる。薬研彫りで蓮座上に阿弥陀一尊種子を配す。裏面に横位のノミ痕あり。側面は丁寧な調整。	緑泥片岩	ほぼ完形。 11.0kg。
S15	板碑	長さ〔79.7〕 幅 22.8 厚さ 1.5	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。線刻二条線とケガキ線あり。	緑泥片岩	4/5。 5.8kg。
S16	板碑	長さ 57.9 幅 18.0 厚さ 〔2.3〕	両側縁部は並行し、頭部は丸みを帯びる山形。主尊は蓮座の一部が見られるが、不明瞭。	結晶片岩	ほぼ完形。 4.1kg。
S17	板碑	長さ〔60.6〕 幅 22.8 厚さ 1.7	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。線刻二条線とケガキ線あり。	緑泥片岩	5/6。 5.7kg。

表 46　SK-181 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材質	備考
M32	古銭	直径：2.3 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.8。熙寧元宝。初鋳 1068 年。	銅製	完形。

表 47　SK-182 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材質	備考
M17	古銭	直径：2.3　厚さ：0.1　孔径：0.7　重さ：2.6。天聖元宝。初鋳 1023 年。	銅製	完形。

表 48　SK－183 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石材	備考
S18	板　碑	長さ〔60.6〕 幅　〔22.2〕 厚さ　2.4	両側縁部はやや惚れて並行し、頭部は山形を呈する。主尊や紀年銘は不明瞭。裏面に横位の鑿痕あり。側面などの調整は粗雑である。	結晶片岩	5/6。 6.4kg。
S19	板　碑	長さ〔30.5〕 幅　21.5 厚さ　1.8	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。	緑泥片岩	1/3。 2.4kg。
S20	板　碑	長さ〔37.2〕 幅　16.6 厚さ　2.2	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。主尊はほとんど確認できない。	緑泥片岩	2/3。 2.6kg。
S21	板　碑	長さ〔39.0〕 幅　19.0 厚さ　2.1	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。主尊や紀年銘は見られなかった。	結晶片岩	3/5。 3.0kg。
S22	(板　碑)	長さ〔16.6〕 幅　〔13.3〕 厚さ　3.0	破片あるいは未製品か。上端部は割痕、左側縁は斜位に調整される。	結晶片岩	破片。 1.1kg。
S23	板　碑	長さ〔72.3〕 幅　23.2 厚さ　2.8	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。主尊はやや不明瞭だが、蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。裏面に横位の鑿痕あり。側面は丁寧な調整。	緑泥片岩	ほぼ完形。 11.4kg。
S24	板　碑	長さ〔63.1〕 幅　〔23.4〕 厚さ　3.0	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。主尊の一部が見られるが、表面が剥落し、不明瞭。	緑泥片岩	5/6。 7.9kg。

表 49　SK－184 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石材	備考
S25	板　碑	長さ〔75.8〕 幅　23.6 厚さ　3.2	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りで種拙な蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。全体的に粗雑な作り。	絹雲母片岩	ほぼ完形。 9.8kg。
S26	板　碑	長さ　66.5 幅　23.7 厚さ　2.4	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りで種拙な蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。裏面に鑿痕あり。全体的に粗雑な作り。	結晶片岩	ほぼ完形。 6.7kg。

表 50　SK－185 出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石材	備考
S27	板　碑	長さ〔31.3〕 幅　17.2 厚さ〔2.0〕	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。主尊はほとんど確認できない。	絹雲母片岩	1/2。 1.9kg
S65	宝篋印塔 笠	長さ　32.9 幅　31.8 高さ　15.8	上３段下２段の段状で、四隅に馬耳状突起を付し、二弧輪郭形は蕨手形を呈する。笠部の上面と底面には鑿痕が残る。	安山岩	ほぼ完形。 16.8kg。
S66	宝篋印塔 塔身	長さ　17.8 幅　18.2 高さ　17.5	月輪内に薬研彫りで胎蔵界四方仏の種子を刻む。上・下面鑿痕残る。	安山岩	ほぼ完形。 11.2kg。
S67	宝篋印塔 塔身	長さ　18.0 幅　18.7 高さ　16.2	四面に胎蔵界四方仏の種子を刻む。上・下面鑿痕残る。	安山岩	ほぼ完形。 8.6kg。
S68	(宝篋印塔) 基礎	長さ　22.5 幅　23.5 高さ　16.3	上端は内側へ斜位に削られる。側面はややいびつで、下面は窪む。	安山岩	ほぼ完形。 14.6kg。
S69	五輪塔 地輪	長さ　18.2 幅　18.3 高さ　11.5	正面長方形、上面正方形を呈する。全体的に均整がとれ、表面を磨く。上下面は浅く窪む。	安山岩	ほぼ完形。 5.2kg。

表 51　SK－186 出土遺物観察表

No.	器　種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S28	板　　碑	長さ〔75.0〕 幅　23.2 厚さ　3.0	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで阿弥陀三尊種子を配す,阿弥陀には蓮座を伴うが,脇侍は不明瞭。線刻による二条線とケガキ線あり。裏面に横位の鑿痕あり。	結晶片岩	ほぼ完形。 9.8kg。
S29	板　　碑	長さ〔63.0〕 幅　23.2 厚さ　2.9	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配するが、やや磨滅し、不明瞭。	緑泥片岩	ほぼ完形。 9.6kg。
S30	板　　碑	長さ〔54.0〕 幅　19.7 厚さ　1.7	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りで種拙な蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。全体的に粗雑な作り。	緑泥片岩	ほぼ完形。 4.5kg。
S31	（板　碑）	長さ〔18.0〕 幅　13.4 厚さ　2.0	破片あるいは未製品か。	結晶片岩	破片。 1.0kg。
S32	板　　碑	長さ〔31.0〕 幅　15.9 厚さ　1.2	両縁縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。線刻の二条線あり。比較的丁寧な調整。	緑泥片岩	1/3。 1.3kg。

表 52　SK－187 出土遺物観察表（1）

No.	器　種	法量（cm）	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	中世土器 かわらけ	口径　6.8 底径　4.3 器高　2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	黒色粒 内外－橙色	ほぼ完形。内面一部煤付着。灯明皿に転用。
2	中世土器 かわらけ	口径　(7.2) 底径　(5.4) 器高　(1.8)	口縁部は緩やかに外反しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部摩耗し、不明瞭。	赤褐色粒 内－橙色 外－橙色	1/4。
3	中世土器 かわらけ	口径　7.2 底径　4.9 器高　2.0	口縁部は緩やかに外反しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	赤褐色粒・黒色粒 内外－橙色	1/2。内面口縁部一部煤付着。灯明皿に転用。
4	中世土器 かわらけ	口径　(7.3) 底径　(5.1) 器高　1.7	口縁部は外反して立ち上がり、中位でやや内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	白色粒・黒色粒 内－橙色 外－橙色	2/5。

No.	器　種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S33	板　　碑	長さ〔46.5〕 幅　27.5 厚さ　2.1	両縁縁部は並行し、基部は不整な三角状を呈する。紀年銘『丙午□年三月十三日』とあり。裏面に鑿痕あり。基部の調整はやや粗雑。	緑泥片岩	1/3。 5.1kg。
S34	板　　碑	長さ〔65.5〕 幅　25.4 厚さ　2.4	両縁縁部は並行し、頭部は山形を呈する。蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。側面はやや粗雑な調整。	緑泥片岩	ほぼ完形。 8.5kg。
S35	板　　碑	長さ　76.3 幅　23.3 厚さ　2.8	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。	緑泥片岩	ほぼ完形。 10.8kg。
S36	板　　碑	長さ〔62.2〕 幅　21.8 厚さ　3.4	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りで蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。側縁はやや丁寧な調整。	緑泥作岩	4/5。 7.9kg。
S37	板　　碑	長さ〔64.0〕 幅　22.3 厚さ　2.8	両縁縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。線刻の二条線あり。比較的丁寧な調整。	緑泥作岩	ほぼ完形。 7.6kg。
S38	板　　碑	長さ〔51.4〕 幅　17.1 厚さ　2.1	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りで稚拙な阿弥陀一尊種子を配す。全体的に粗雑な作り。	緑泥片岩	ほぼ完形。 3.1kg。
S39	板　　碑	長さ〔84.2〕 幅　31.1 厚さ　2.2	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀三尊種子を配す。紀年銘『貞治五年□月』とあるが、その他の銘文は判読できず。	緑泥片岩	4/5。 13.0kg

表 53　SK-187 出土遺物観察表 (2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成整形の特徴	石材	備考
S40	板　碑	長さ〔74.5〕 幅　27.1 厚さ　2.8	両側縁部はやや丸みを帯びて並行し、基部の先端はやや不均等である。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。裏面に鑿痕あり。	緑泥片岩	3/5。 10.5kg。
S41	板　碑	長さ〔72.1〕 幅　21.7 厚さ　2.8	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。裏面に横位の鑿痕あり。	緑泥片岩	ほぼ完形。 8.4kg。
S42	板　碑	長さ〔46.8〕 幅〔18.0〕 厚さ　1.6	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。主尊は表面がやや剥落し、不明瞭。全体的に粗雑な作りである。	結晶片岩	4/5。 2.7kg。
S43	板　碑	長さ〔53.5〕 幅　19.4 厚さ　15.0	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りで阿弥陀一尊種子を配す。比較的丁寧な調整。	緑泥片岩	ほぼ完形。 3.3kg。

表 54　SK-188 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径　8.2 底径　4.5 器高　2.3	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は内彎する。	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	白色粒・黒色粒 内外－にぶい橙色	1/2。一部煤付着。灯明皿に転用。

表 55　SK-203 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm・g) / 形態等の特徴	材質	備考
M68	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.5 重さ：3.9。寛永通宝。初鋳 1636 年。	銅製	完形。
M69	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.5 重さ：3.3。寛永通宝。初鋳 1636 年。	銅製	完形。
M70	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.5 重さ：3.4。寛永通宝。初鋳 1636 年。	銅製	完形。

表 56　SK-207 出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成整形の特徴	石材	備考
S44	板　碑	長さ〔100.0〕 幅　30.4 厚さ　2.6	両側縁部は下方に向けてやや開く。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀三尊種子を配す。紀年銘『建武四年丁丑□月』とあり。	緑泥片岩	3/4。 14.8kg。
S45	板　碑	長さ〔72.2〕 幅　22.8 厚さ　2.9	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。紀年銘に『三』が見られるが、やや粗雑な調整。	絹雲母片岩	ほぼ完形。 8.9kg。
S46	板　碑	長さ〔66.7〕 幅　27.2 厚さ　3.1	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀三尊種子を配す。線刻二条線あり。裏面に横位の鑿痕あり。	緑泥片岩	1/2。 8.5kg。
S47	板　碑	長さ〔77.3〕 幅　24.9 厚さ　2.6	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈す。丸彫りで種描な阿弥陀一尊種子を配す。表裏面に敲打痕あり。	絹雲母片岩	ほぼ完形。 10.0kg。
S48	板　碑	長さ〔74.1〕 幅　24.7 厚さ　2.5	両側縁部はやや丸みを帯びて並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りで種描な蓮座を伴う阿弥陀一尊種子を配す。全体的に粗雑な作り。	紅廉片岩ヵ	ほぼ完形。 7.8kg。
S49	板　碑	長さ〔55.3〕 幅　18.3 厚さ　2.6	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。わずかに阿弥陀一尊種子の痕跡が残る。全体的に粗雑な作り。	絹雲母片岩	4/5。 4.4kg。
S50	板　碑	長さ〔57.9〕 幅　19.0 厚さ　2.0	両側縁部は並行し、頭部はやや不均等な山形を呈する。主尊は見られない。全体的に粗雑な作り。	結晶片岩	ほぼ完形。 4.5kg。
S51	板　碑	長さ〔55.6〕 幅　20.3 厚さ　2.3	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りで阿弥陀一尊種子を配す。比較的丁寧な調整。	緑泥片岩	4/5。 5.1kg。

表 57　SK-207 出土遺物観察表 (2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成整形の特徴	石材	備考
S52	板　碑	長さ　60.1 幅　20.4 厚さ　2.7	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。蓮座を伴う阿弥陀一尊種子の痕跡がわずかに残る。全体的に粗雑な作り。	結晶片岩	ほぼ完形。 5.7kg。
S53	板　碑	長さ　68.3 幅　21.2 厚さ　3.3	頭部は山形を呈する。薬研彫りで蓮座を伴う阿弥陀と脇侍の三尊種子を配す。紀年銘『永正三年』、銘文『妙(あるいは如ヵ)真』と見られる。裏面に鑿痕あり。側縁はやや粗雑な調整。	結晶片岩	ほぼ完形。 7.9kg。
S54	板　碑	長さ　48.0 幅　19.3 厚さ　2.1	両側縁部はやや丸みを帯びて並行し、頭部は低い山形を呈する。丸彫りで梵字の阿弥陀一尊種子を配す。全体的に粗雑な作り。	結晶片岩	ほぼ完形。 4.1kg。

表 58　SK-210 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm・g) / 形態等の特徴	材質	備考
M10	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.7。 咸平元宝。初鋳 998 年。	銅製	完形。
M44	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.4。元豊通宝。初鋳 1078 年。	銅製	ほぼ完形。

表 59　SK-211 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成整形の特徴	石材	備考
S55	板　碑	長さ　64.0 幅　23.2 厚さ　1.8	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りの阿弥陀一尊種子の痕跡がわずかに残る。側縁はやや粗雑な調整。	結晶片岩	4/5。 5.2kg。
S56	板　碑	長さ　〔24.0〕 幅　〔12.4〕 厚さ　1.5	丸彫に上るで蓮座を伴う阿弥陀の一部と脇侍の観音菩薩が見られる。	結晶片岩	破片。 0.9kg。
S57	板　碑	長さ　45.9 幅　17.9 残厚　2.8	両側縁部は並行し、頭部はやや不均等な山形を呈する。主尊は見られない。全体的に粗雑な作り。	結晶片岩	ほぼ完形。 3.4kg。
S58	板　碑	長さ〔32.5〕 幅　21.7 厚さ　18.0	両側縁部は並行し、頭部は山形を呈する。丸彫りで阿弥陀一尊種子を配す。	緑泥片岩	1/2。 2.6kg。
S70	宝篋印塔 笠	長さ　28.6 幅　28.8 高さ　16.0	上4段下2段の段状で、四隅に馬耳状突起を付し、二弧輪郭形は蕨手形を呈する。笠部の上面には直径6.7cm、深さ6.9cmの相輪受けの柄孔が穿たれ、底面には棒形状の鑿先端痕が穿たれる。	安山岩	5/6。 13.7kg。
No.	器種	法量 (cm・g) / 形態等の特徴	材質	備考
M30	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：3.6。嘉祐通宝。初鋳 1056 年。	銅製	完形。
M51	古　銭	直径:2.5 厚さ:0.1 孔径:0.6 重さ:2.3。正隆通宝。初鋳 1161 ～ 1178 年。	銅製	完形。

表 60　SK-223 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm・g) / 形態等の特徴	材質	備考
M11	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.0。景徴通宝。初鋳 1004 年。	銅製	ほぼ完形。
M43	古　銭	直径：4.2 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.2。元豊通宝。初鋳 1078 年。	銅製	完形。

表 61　SK-225 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm・g) / 形態等の特徴	材質	備考
M62	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.2 孔径：0.6 重さ：2.4。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。

表 62　SK-231 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm）	形態・成整形の特徴	石　材	備　考
S71	宝篋印塔 相輪	高さ〔11.3〕	宝珠部と請花部の残片。請花部の直径は9.5cm。	安山岩	1/4。 0.6kg。

表 63　SK-232 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M37	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.6。熙寧元宝。初鋳 1068 年。	銅製	完形。
M63	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.2 孔径：0.6 重さ：3.5。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。
M64	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.5。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。

表 64　SK-233 出土遺物観察表

No.	器 種	法量（cm・g）／形態等の特徴	材　質	備　考
M56	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.5。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。
M57	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.7。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。
M58	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.2。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。
M59	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.2 孔径：0.6 重さ：3.3。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。
M61	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.2 孔径：0.6 重さ：3.3。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。
M66	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：3.7。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	完形。

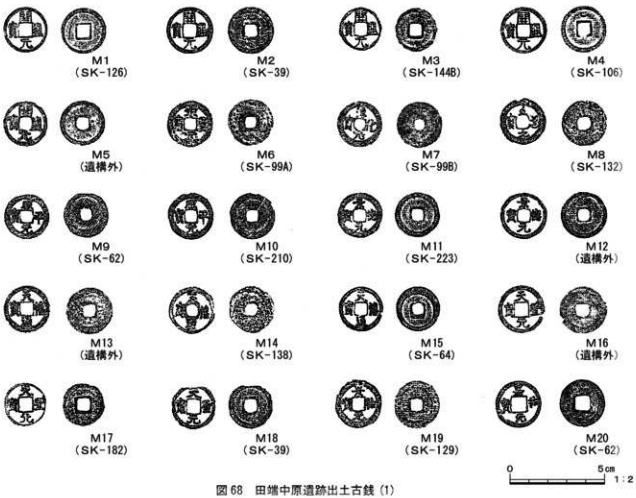


図 68　田端中原遺跡出土古銭（1）

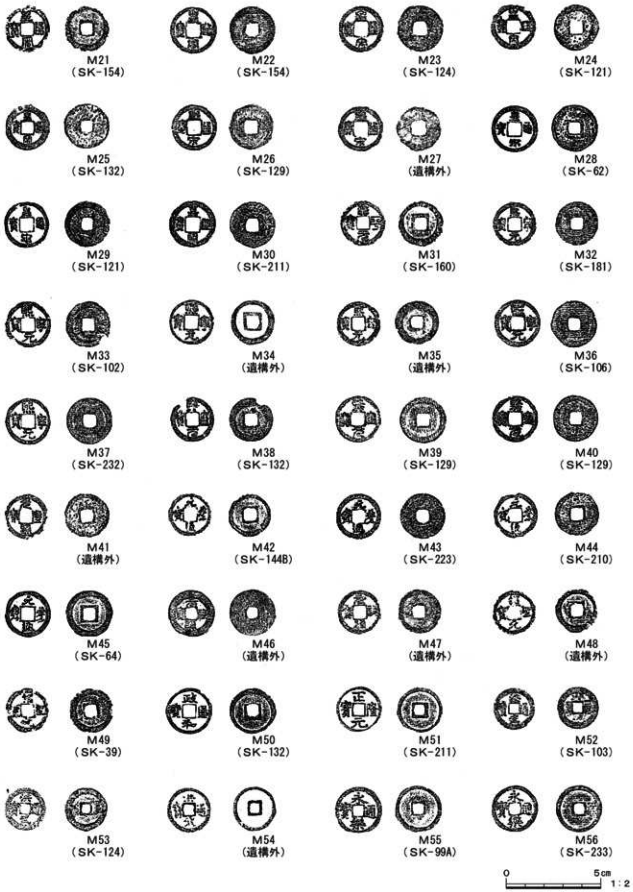


図 69　田端中原遺跡出土古銭 (2)

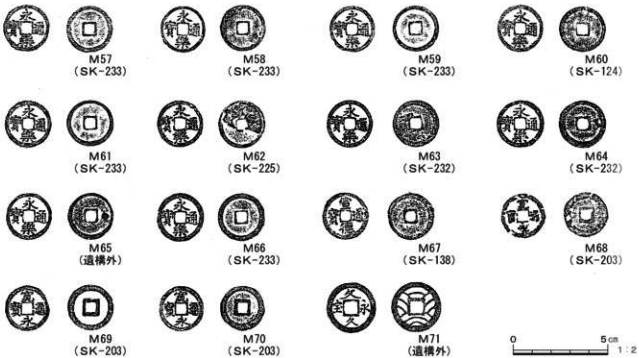


図 70　田端中原遺跡出土古銭 (3)

(4) 遺構外出土遺物（図 71･72、表 65 / 写真図版 32）

ここでは表採および本遺跡内 (グリッド) から出土したものを取り扱った。掲載資料は 7 点である。1 は高坏、2 は甑、3 は甕で、これらは古墳時代中期に帰属すると考えられる。4 ～ 7 はかわらけ、M5・12・13・16・27・34・35・41・46 ～ 48・54・65・71 は古銭である。いずれも、本調査区内あるいは周辺に構築された墓坑に伴うものと思われる。

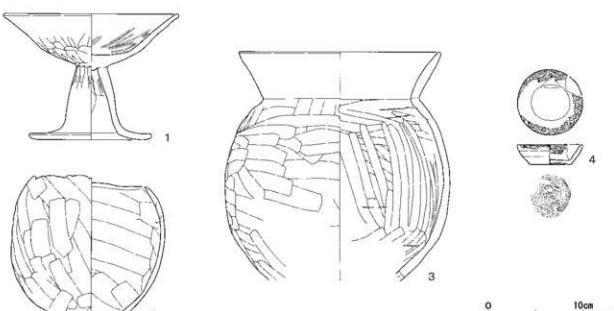


図 71　遺構外出土遺物 (1)

図 72　遺構外出土遺物 (2)

表 65　遺構外出土遺物観察表

No.	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備　考
1	土師器 高坏	口径 (18.6) 底径 (12.9) 器高 13.3	坏部は稜を持って直線的に開く。脚部は直線的に開き、裾部は外反気味に広がる。	外面 ― 坏部上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ、脚部～裾部ナデ。内面 ― 坏部ヨコナデ後下半～底部荒いミガキ。脚部～裾部ナデ。	石英・チャート 内 ― 明赤褐色 外 ― にぶい赤褐色	1/2。
2	土師器 甑	口径 12.1 底径 7.3 器高 15.4	胴部は膨らみを持って立ち上がり、口縁部に至る。	外面 ― 口縁部～底部ヘラナデ、内面 ― 口縁部～底部ヘラナデ。	チャート・白色 内 ― 赤褐色 外 ― 橙色	ほぼ完形。
3	土師器 甕	口径 21.3 底径 ― 器高 ―	粘土紐積み上げ成形。胴部は膨らみ、口縁部は直線的に開く。	外面 ― 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。内面 ― 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	白色粒・黒色粒 内 ― 赤褐色 外 ― にぶい橙色	2/5。
4	中世土器 かわらけ	口径 6.9 底径 4.5 器高 2.0	口縁部はやや内彎して立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	黒色粒 内外 ― にぶい橙色	4/5。煤付着。灯明皿に転用。
5	中世土器 かわらけ	口径 6.9 底径 4.6 器高 1.5	口縁部はやや内彎して立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部静止糸切り。	白色針状物質、褐色粒 内外 ― 橙色	ほぼ完形。
6	中世土器 かわらけ	口径 7.9 底径 4.7 器高 1.8	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	白色粒・黒色粒 内外 ― 橙色	完形。一部煤付着。灯明皿に転用。
7	中世土器 かわらけ	口径 (7.9) 底径 5.0 器高 2.4	口縁部は内彎して立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部右回転糸切り。	砂粒 内外 ― にぶい黄色	3/5。

No.	器 種	法量 (cm・g) / 形態等の特徴	材　質	備　考
M5	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：3.1。開元通宝。初鋳 621 年。	銅製	SI-06。ほぼ完形。
M12	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.5。景徳通宝。初鋳 1004 年。	銅製	P-1。完形。
M13	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.9。天禧通宝。初鋳 1017 年。	銅製	SI-06。完形。
M16	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.7。天聖元宝。初鋳 1023 年。	銅製	SK-03。ほぼ完形。
M27	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.8 重さ：3.3。皇宋通宝。初鋳 1039 年。	銅製	M-1。完形。
M34	古　銭	直径：2.4 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.3。熙寧元宝。初鋳 1068 年。	銅製	SI-06。ほぼ完形。
M35	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.6。熙寧元宝。初鋳 1068 年。	銅製	調査区内。完形。
M41	古　銭	直径：4.2 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.2。元豊通宝。初鋳 1078 年。	銅製	調査区内。完形。
M46	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.7。元祐通宝。初鋳 1086 年。	銅製	Q-3。完形。
M47	古　銭	直径：2.3 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：2.9。元祐通宝。初鋳 1086 年。	銅製	M-1。完形。
M48	古　銭	直径：2.3 厚さ：0.1 孔径：0.6 重さ：2.3。紹聖元宝。初鋳 1094 年。	銅製	SI-07 付近。完形。
M54	古　銭	直径：2.3 厚さ：0.2 孔径：0.5 重さ：2.6。洪武通宝。初鋳 1368 年。	銅製	P-2。完形。
M65	古　銭	直径：2.5 厚さ：0.2 孔径：0.6 重さ：3.0。永楽通宝。初鋳 1408 年。	銅製	調査区内。完形。
M71	古　銭	直径：2.7 厚さ：0.1 孔径：0.7 重さ：3.3。文久永宝。初鋳 1863 年。	銅製	S-3。完形。

Ⅳ　田端中原遺跡出土の板碑群をめぐって

― 児玉郡における板碑の製作工程と流通（覚書）―

はじめに

田端中原遺跡は、1928 年（昭和 3 年）に田中喜久衛氏によって山林の開墾中に掘り出された板碑群を開墾地の一角に樹立し供養されていたところから、千々和實氏によって「田中供養地」と呼称された板碑群の出土した遺跡に相当している（註 1）。この「田中供養地」の近傍にある遺跡は、古くから板碑が大量に出土したところとして知られており、千々和實氏が『上武大学論集』（千々和 1971）や、『武蔵国板碑集成』において板碑の集積地であるという推定とともに紹介された遺跡であった。千々和氏は、その後も『日本考古学の現状と課題』（千々和 1974）で更にこの板碑の集積についての推定を発展されている。千々和實氏の考案は、板碑の外形を製作し種子および蓮座のみを彫り、紀年銘や願文等は消費地で後刻するというものである。この考案が鳥居龍蔵博士の創見（鳥居 1927）にかかる部分があることはかつて触れたことがある。

この「田中供養地」には、板碑の種類の多様性や石造物の存在から、これが出土した遺跡については、発掘調査以前より板碑の生産地あるいは集積地ではなく墓址群であるという推定がなされており、試掘調査等によって更にその様相が推定されていたところであった（鈴木 1991）。その後、ここに報告する田端中原遺跡の発掘調査によって多数の墓址とともに板碑群が検出されたことによって、千々和氏の推定されたような板碑の流通にかかる集積地ではなく、墓壙内を中心に墓址に伴うような形で板碑が埋置されていたことが判明した。したがって、これらの板碑については千々和氏の推定とは別の考案が必要となるとともに、その流通についても異なった考案が要求されることになった。

北武蔵地域における板碑の研究は、先の千々和實氏の基礎的な研究があり、また埼玉県の詳細分布調査があるなど、「武蔵型板碑」の研究の基礎は作られているといってよいであろう（註 2）。しかし、分析の視点は、紀年銘や願文等の銘文の分析を中心としており、千々和氏によってその端緒が拓かれた流通の問題についても、いまだその研究が充分であるとはいえない状況である。本章では、千々和氏の研究に導かれながらも、田端中原遺跡から出土した多量の板碑を基礎にこれを批判的に検討し、今日的な板碑生産と流通の問題に接近する前提としての基礎的な分析を行なうことを目的とするものである（註 3）。

1　板碑製作工程と変化

田端中原遺跡から発掘調査以前に発見されていた「田中供養地」の板碑は、千々和氏の調査（千々和 1972）によると 37 基？、また埼玉県による板石塔婆の詳細分布調査（埼玉県立歴史資料館 1981）によると 48 基とされている。また、田中家では、昭和 21 年「田中供養地」の板碑が出土した同じ畑の耕作時に出土した 3 基の板碑が保管されている。これ以外に、田端中原遺跡に隣接する共同墓地にも 4 基の板碑があり、おそらく付近から出土したものである可能性が高いものと考えてよいであろう。このように田端中原遺跡からは、少なくとも開墾などに伴って 50 基以上の板碑が検出されていたことは確実である。またこのほか、板碑とともに五輪塔や宝篋印塔等も出土していたようで

あり、これらもまたこの「田中供養地」の板碑の背後に集積されていたのである。

田端中原遺跡から今回の発掘調査によって検出された板碑は,59 基である。このように本遺跡には、小範囲に少なくとも 100 基以上の板碑が存在したこととなり、埼玉県内でも稀な多数の板碑の出土遺跡となった。これらの板碑は、千々和實氏が注目されたように種子のみが彫り込まれたような資料も検出されているが、詳細に観察すると種子が彫られていないものは一点も確認し得ず、種子や蓮座が無いように見えるものにおいても、微かに浅い彫り込みを認めることが可能である。このような痕跡的に認められる種子や蓮座表現をもつ板碑においては、種子の底面が薬研彫り状をなさず浅く丸い底面形態を呈しており、普通の薬研彫り形態の彫り込みとともに種子の彫り方にも多様性を認めることができる。また、板碑の形態や表面の調整等の製作手法も変異があり、あるいは石材においても多様なあり方を示している。特に石材では、板碑の素材として一般的な緑泥片岩ばかりでなく、絹雲母片岩や紅簾片岩等の異なった石材や、製作工程に多様性が認められることは興味深い現象であると思われる。つまり、田端中原遺跡の板碑群は、単純な組成をなすのではなく、幾つかの類型によって構成されており、単一の様相を示していないことは、本遺跡の形成過程を考える上で注意すべき点である。

板碑の製作工程

板碑の横断面の形状は、種子の刻まれる面を正面とするとき、側縁は背面側に緩く突彎する偏平な蒲鉾状を呈することが普通である。また、背面は母材からの第一次的な割裂痕や鑿痕をはじめとする調整痕を残すことが多く、正面は平滑でこのような第一次的な剥出面や調整痕を二次的に調整したものであることが推定される。側縁の形態は、背面に向かって彎曲をもち正面と側縁のなす角度が小さく稜を持っている。頭部は三角形の山形を呈し、基部は逆三角形の舌状に成形され調整前の状態を残している。

このような観察に基づいて板碑の標準的な製作工程を推定すると下記のような工程に分解することができる。

①母材からの剥離→②表裏面の剥離→③外形の荒割り→④表面の荒い敲打→⑤側縁の調整→⑥表面の調整研磨→⑦表面の仕上げとしての平滑な研磨→⑧二条線・種子・蓮座等の彫刻→⑨紀年銘等の彫刻

板碑製作の標準的な工程には、おおむね以上の 9 つの工程を想定し得るであろう。このうち、②～⑤が成形の工程、⑥～⑦が調整の工程、⑧～⑨が彫刻の工程である。

板碑の成形工程には、概ね以下の①から⑤の 5 つの工程を想定することができる。

①母岩から割り取られた材料は、一部に残された主要剥離面の観察や短軸方向の鑿痕が認められるところから、おおむね横剥ぎによるものと考えることができる。このような工程は、石材としての結晶片岩の片理の性質に規定されていると考えてよい。板碑の製作が、このような結晶片岩の性質を利用することによる技術体系をもっていることは、古くから想定されていることである。この母材の剥出に際しての、規格的な剥片を得るための割裂方式については、板碑のその後の調整によって観察が困難であり不明な点が多いが、楔や鑿を用いた間接打撃に近い割裂方式が採用されたものと推定することができる。また、矢穴の認められるものもある。

②板碑の粗形の成形には、厚い部分を剥ぎ取る工程があり、また背面を中心に鑿状の工具の痕跡

を見出しえる個体がしばしば存在するところから、鑿状の工具による間接打撃による剥出と鑿等による粗いハツリによる厚さの調整の工程を想定することが可能であり、これによって板碑素材としての板状の形態を作出したものと考えられる。

③外形の荒割の工程は、板碑の概形を作る工程であり、表面と定めた側から素材の縁に沿って鈍角に連続的に打撃を加えて外形を作り出すものである。この工程には板碑の寸法や規格の決定にかかる部分があり、長さや幅の規格性の前提となる定規や型紙、あるいは粗いケガキ線等の存在など想定すべき問題は多いが、板碑の幅や長さ等め規格（寸尺）の問題については更に検討すべき点であろう。なお、この段階における板碑素材の表裏面の状況は、板碑の基部周辺に未調整部分が残存しているところから、基部周辺のような状態であったことを窺い知ることができる。

④表面の鑿による入念なハツリおよび粗い敲打も、③の外形の荒割りに前後して行われているようであるが、断面形の表面側が平坦であるところから荒割の後に行われる場合が多かったものと見られる。また背面にしばしば鑿による成形痕が観察しえるが、表面に明瞭な鑿痕が認められることは比較的稀であることは、鑿等による直角に近い方向からの細かい間接的な敲打をはじめとする表面の粗い敲打による成形の工程の存在を示すものであろう。あるいは、この工程は⑥の工程に関わるものと考えることもできる。

⑤側縁の成形は、板碑としての概形を作った後に行なわれる工程であり、表面の荒い敲打調整の後に行なわれるものであろう。側縁の成形は、荒割が表面方向からの打撃によるのに対し、素材の側縁に沿って垂直方向から緩い敲打を行い、側縁の擦過との工程を反復的に繰り返す工程であると考えられる。また、この工程の後に鑿による背面の成形が認められる例があるようである。この工程は、完全に板碑の輪郭を成形するものであり、基本的にこの工程の後には成形工程はなく、この工程以降に行なわれる工作は、板碑の外観を重視した調整の工程である。

板碑の調整工程は、成形による表面の凹凸を取り去り平滑に仕上る工程として、以下の⑥・⑦の２工程を想定することができる。この工程は基本的に表面のみであり背面に施されることはないようである。

⑥表面の調整研磨の工程は、板碑素材表面の凹凸あるいは鑿痕等を取り去る＜狭い面の調整＞であり、表面の入念な敲打と併用されるのであろう。この工程は表面が平滑に整えられるとはいえ表面全体が一律な平坦面として調整されるのではなく、比較的狭い面の平滑化の工程の反復であり、表面には緩いうねりが確認される。

⑦表面を平滑に仕上げる工程は、表面全体の平坦な平滑面を作る工程であり、仕上げの工程としての＜広い面の調整＞であり、幅の広い工具による表面全体を平坦に整える工程である。この⑥・⑦の二つの工程に用いる工具には、おのずと広狭の別があると思われるが詳細については明らかではない。

板碑の彫刻の工程は、多くの工程に区分することが可能であるが、ここでは⑧・⑨の２工程として捉えておきたい。これらの工程は、これ以前の工程が板碑の素材を製作する工程であるのに対して、直接信仰にかかわる工程として捉えておく必要もあろう。

⑧表面の彫刻は、複数の小工程によって構成されている。割付線に相当すると思われる定規を用いた「ケガキ線」の認められるものが屢々認められ、おそらく二条線や枠線等のケガキ線とともに

表面の「割り付け」が行なわれたものであろう。種子の断面の形態は、薬研の形態に彫られるものにおいては中心線から左右に彫り込むことによって梵字内に面を持つ種子が表現されるものであろう。また、種子の底面が丸いものも屢々認めることができるが、これについては梵字部分が丸彫りされたものと考えられ、中には敲打によって表現されたと思われるものを含んでいる。ともあれこの工程には、字画の線描きの後に左右に面をもつように彫り込む小工程が位置すると考えてよいであろう。これらの板碑の種子には、阿弥陀（キリーク）種子のものが圧倒的に多く、阿弥陀三尊種子が一般的である。これらの種子の彫刻においても、型紙等の存在を考えておく必要があろう(註４)。また、真言もこの工程の後半に彫刻されたものと考えてよいであろう。

⑨紀年銘等の彫刻については、細い線刻の個体や省略されるもの等が認められるところから、⑧の種子・蓮座・二条線の彫刻と一連の工程で行われたのではなく、⑧の工程の後に行われた工程であると考えることができる。この工程には、紀年銘のほか干支あるいは供養者・法名・願文等の造立趣旨をはじめとする板碑下半部の彫刻が含まれるものと考えてよいであろう。なお､偈については、⑧の工程に含まれるものがあると考えておく必要があろう。

以上のような工程を板碑製作の標準的な工程と捉えるならば、本遺跡出土の板碑においては、もちろんこのような標準的な工程をもつ個体が確認できるとともに、多くの工程の一部が省略された個体を認めることができる。このように板碑は形態のみならず製作工程においても多様性をもっており、主として工程の欠落や省略による幾つかのまとまりを確認することが可能である。また、板碑製作の工程を考える上では、他の地域で認められる鑿を積極的に用いた工程をもつ板碑群の存在も考慮すべきであろう。

田端中原遺跡出土の板碑の観察によると、標準的な板碑は存在している一方、標準的な製作工程を採用していない数多くの板碑の存在を認めることができる。このうちでも、工程⑥の狭い面の調整は行われるが、工程⑦の仕上げの表面を平坦にする平滑研磨の工程を省略した個体がしばしば認められることに注意しておきたい。ケガキ線の認められるものにおいては、製作時から表面が大きく剥落していないと見做すことができるところから、これらの個体における⑦の表面の調整工程の様子を窺うことができる。また、千々和氏が観察されたように、工程⑧の種子・蓮座のみが彫り込まれ、工程⑨の紀年銘の彫られていないような個体は大半を占めている。しかし、これらを詳細に観察するとほとんどの板碑には紀年銘が彫られる位置の表面が縦位に荒れており、この位置に細い線刻の紀年銘が存在していたと考えることができるものである。したがって、紀年銘が彫られていないと認識されてきた多くの板碑についても細い線刻の紀年銘の存在を想定しておくべきであろう。また、麁粗な石材や緑泥片岩以外の石材も認められる。また、田端中原遺跡出土の板碑には大形のものは認められず、中形のものとともに小形の個体が主体を占めており、小形の板碑群においては、上記の特徴とともに種子や蓮座が薬研彫ではなく丸彫のものが認められ、二条線の表現が稚拙で不明瞭あるいは省略されているものがある特徴を認めることができる。＜分析の後に補訂すること＞

田端中原遺跡１群：中形緑泥片岩製で工程省略の認められないもの。２群ａ類は、小形の緑泥片岩製、２群ｂ類は、小形の絹雲母片岩製であり工程省略が認められるものである。紀年銘の見られるものをこれに加えると、おおむね１群→２群ａ類･ｂ類という変遷で捉えることができるであろう。２群のａ類とｂ類は、幾分ｂ類が新しい傾向が想定しえるとはいえ、明瞭な前後関係で捉えること

は難しい。なお、田端中原遺跡の１群の以前に、より大形で厚手の端正な彫りをもった板碑の一群が存在しているようである。

板碑に見られる二条線が、板碑の祖形に関わる形態であるとするならば、二条線が明瞭に彫られ二条線の側縁に羽刻み状の刳り込みのある個体は型式論的に古相を示すものであり、二条線の縦位上方からの彫込みの連続による幅広の二条線の表現はこの変化した表現である。また、線刻による二条線が表現されたもの、さらに二条線が省略されたものはより新相を示すと考えてよいであろう。また、種子や蓮座も薬研彫りより丸彫りのよる表現が新相を示すものと考えることができる。しかしながら、このような指標は同時代の板碑にも多くの変異や精粗の差があり、また同時期にも並行して存在する表現であるところから、単純な線条的な変化として捉えられるものとはいえないが、一定の時間的推移の傾向として捉えることは可能であろう。

年代的検討と流通

「田中供養地」の板碑の紀年銘には、14 世紀前半の「建武」の紀年をもつものの存在が記録されており、この板碑が最も古いようである。また、応永 12 年（1405 年）銘のものが存在しており、近接する共同墓地においても応永 12 年（1405 年）銘の板碑１枚が確認される。また、田端中原遺跡の発掘調査で検出された板碑のうち紀年銘が判読しえるものは、文保元年？（1317 年）、建武、建武４年（1337 年）、貞治５年（1366 年）、永正３年（1506 年）が確認されている。このことから、田端中原遺跡の墓址群は、板碑の紀年銘から考えるならば、おおむね 14 ～ 16 世紀初頭に営まれたと推定することができる（註 5）。

これら紀年銘をもつ板碑のうち最新の永正３年（1506 年）銘の板碑以外は、基本的に表面の平滑化の工程を持ち、種子も薬研彫りであり、本遺跡で主体を占める小形の板碑群とは異なる部分がある。おそらく、小形の板碑群は、板碑生産の後半期である 15 世紀後半から 16 世紀を中心とする時期に製作されたものである可能性があろう。14 世紀中葉ごろに最盛期を迎えたとされる板碑生産は、基本的に紀年銘によって確認されたものである。このように小形の板碑群が 15 世紀後半から 16 世紀代を中心とする時期に製作されたものであるならば、本遺跡の多様な板碑群は、この間に生産と流通の過程に変化があったことを示唆するものであろう。

２ 板碑の製作と流通の変化

板碑の類型と分布

田端中原遺跡に見られるような板碑の多様性は、板碑の変遷と流通形態の変化の累積によって構成されたものと見做してよいであろう。このような板碑の多様性とともに、その分布に一定の偏りがあることは注意されなければならない。この田端中原遺跡や小山川流域等で数多く認められる板碑の中には、小形で、紀年銘が極めて不鮮明であるところから細い線刻によるもの、あるいはこれらが省略されたと見做される資料がしばしば認められる。また、これらの板碑は、表面の研磨工程が雑であり、種子及び蓮座が丸彫で表現され、二条線の表現が稚拙で不明瞭である。

このような板碑においては、しばしば絹雲母片岩をはじめとする緑泥片岩（緑泥石片岩）以外の石材を用いる場合があることにも注目しておくべきである。これらの板碑は、基本的には一般的に「武蔵型板碑」と見做しえるものであるが、このような特徴をもつもののうちでも、絹雲母片岩を用い

た板碑の一群は、板碑が一般に緑泥片岩によって製作されているところから「青石塔婆」と呼ばれた「武蔵型板碑」の標準的なものと見做しえない特徴であり、これらについては「武蔵型板碑」のひとつの類型として捉えることができるであろう。

いまここで、このような工程を省略した小形の板碑のうち絹雲母片岩を素材とするものを、仮に「武蔵型板碑」のひとつの類型として捉え、“田端中原類型”と呼称することもできるであろう。このような類型の板碑の分布する区域は、小山川流域および本遺跡で顕著であり、児玉郡地域を中心としている点は注意しておくべきであろう。これらの板碑は、千々和氏によって未完成の板碑とされたものを構成しており、既製品板碑の想定とともに流通という「商業」的側面においても重要な示唆を与えるものである。

これらの板碑の製作地については明らかではないが、おそらく搬出の労力や第一次的な欠損等の問題を考えるとき、この剥出工程と荒割工程は、石材の産出地ないしはその付近で行なわれた可能性がある。その後の工程である側縁の調整や概形の作出については不明な点が多いが、研磨や種子の彫り込み等、定規やケガキ等の存在を考えるならば工房で工作された可能性を考える必要があろう。しかし、工房も石材の産出地から遠隔の地では搬入の労力がかかり、材料の産出が途絶すると工房も移動する必要が生じる。あるいは新しい産出地の発見や大量の受注をはじめとする需要の増大は、材料となる石材の産出地の発見を促し、石工自身が工房を移動する可能性も検討されなければならないであろう。

石製品である板碑の運搬コストを前提に考えるならば、板碑の形態に必要な部位以外の部分を除去する成形工程については、重量の軽減に直結しており、石材の産出地で行われたものと推定することができる。外形成形後の工程である調整・彫刻の工程は、鳥居龍造氏、千々和實氏らの想定されたように、ある程度運搬され石工の工房等で行われた可能性があろう。では、このような板碑は、どのように生産され、どのような過程を経て本遺跡にもたらされたのであろうか。このような板碑の解釈については、千々和氏とは異なった推定の必要があろう。

本庄市児玉町においては、埼玉県によって実施された「板石塔婆」の詳細分布調査（埼玉県立歴史資料館 1981）以降、小山川流域の児玉町本泉地区を中心にこのような板碑が多く記録されている。このことから、小山川流域が交通経路のひとつであると推定してよいであろう。また、板碑の石材の種類に緑泥片岩以外の石材が認められることは、板碑の生産地が分散し多極化していたことを想起させるものである。板碑の石材としての「緑泥片岩」の産地は、秩父郡長瀞町野上下郷や比企郡小川町下里付近であることが推定されている。また、群馬県多野郡の御荷鉾山系の三波川結晶片岩帯での採石が推定されているが、これらは剥離しにくく加工に困難があるとされ、その数量は少ないようである。しかし、白い点紋の入った緑泥片岩は、より上質の石材であったと捉えるならば、多野山地で産出する緑泥片岩にも認められるようであり、その実態にはなお不明な部分が大きい。

柴田徹氏は、東京国立博物館所蔵の 173 点の武蔵型板碑の観察と分析に基づいて、旧利根川水系と入間川水系に分布する板碑素材である緑泥片岩の特徴か、このふたつの流域ごとにそれぞれ一定のまとまりを示すことを確認され、この点をもとに多元的な生産地の存在を想定されている（柴田 2004）。このことは、従来注目されてきた荒川水系での石材の採取と流通という図式を離れ、旧利根川水系や入間川水系の属する中小河川の板碑石材の傾向を確認する必要があることを示すものであ

ろう。

田端中原遺跡で認められるような小形の板碑は、紀年銘が極めて不鮮明で、表面の研磨工程が雑であり、種子及び蓮座あるいは二条線の表現が稚拙で不明瞭である。また、小山川流域等で数多く認められており、しばしば絹雲母片岩をはじめとする緑泥片岩（緑泥石片岩）以外の石材を用いる場合があることにも注目しておくべきである。児玉郡地域を中心に緑泥片岩以外の板碑が数多く存在することは、ある時期に板碑の生産地の拡大が図られ、緑泥片岩の産出の少ない地域での生産が行なわれたことを想起させるものである。ちなみに、小山川流域には基本的に緑泥片岩の産出はきわめて稀であり、河床礫も絹雲母片岩が主体的であり一部に石墨片岩を含むような組成であることは生産地を推定する上では注目しておくべき点であると言ってよい。絹雲母片岩を素材とする板碑が、小山川流域や田端中原遺跡をはじめとする児玉郡域に比較的濃密に分布していることは、その生産地と流通を考える上で注目しておくべき点である。また、赤味を帯びた硬質な結晶片岩である紅簾片岩と思われる素材の板碑には、側縁に自然の礫面を残しており通常の板碑とは異なった製作過程を認めることができることは注意すべき点である。

絹雲母片岩を材料とする板碑生産地については明らかではないが、石材の種類や分布から推定するならば、小山川上流域の周辺で生産が行われた可能性を考える必要があろう。問題は、具体的な板碑生産地の特定にあるが、現在のところ小山川流域の特定の生産地を特定することは難しい。ともあれ、板碑の生産は、在地的な石工主導による製作の可能性もないわけではないが、種子の彫刻とともに仏教集団の関与の問題について考えておく必要があろう。もちろん、板碑の製作者である石工もまた宗教的呪性を帯びる部分があろうが、板碑が供養に関わる塔婆であれば基本的に仏教集団が関与したと考えるべきであり、本来的には寺院等が介在する受注生産にかかるものであったことを予想すべきである。このように小形の板碑群が 15 世紀後半から 16 世紀代を中心とする時期に製作されたものであるならば、本遺跡の多様な板碑群は、この間に生産と流通の過程に変化があったことを示唆しており、板碑生産と商品的展開の過程として、これらの板碑群を捉えておく必要がある。言い換えるならば、発注に基づく生産から、流通している商品として推移していると考えることも可能であり、寺院が直接関与する形態から市などで購入する形態へと推移している可能性があろう。ともあれ、この過程は、板碑生産の機構が分解し、拡散し、崩壊していく過程の一端がここに現れているのであろう。

このような小形板碑の類型の分布域は、独自の信仰と経済的関係網に沿って流通したものと考えられ、単に玉突状に展開したものではなく、生産地からの放射状の流通形態を基礎とし、流通の結節を持つ可能性は高いとはいえ、基本的に放射状の交通形態を持っていたものと予想される。このような板碑の分布は均質でなく、児玉郡周辺に分布の中心があることは、千々和氏の推定とは別に、児玉郡周辺に交通と流通の結節点を想定することができるものである。おそらく、このような板碑にかかる仏教集団とともに「児玉の市」がこれに相当するものと考えてよいであろう。ここから幹線道路を経由してそれぞれの出土地点にもたらされたものであると考えることもできる。板碑の分布は、流通の途中に集中的な結節点をもつような拡散分布の形態を想起すべきであろう。

千々和實氏の明らかにされた 1360 年前後とされる板碑生産のピークは、この 14 世紀中葉から後半が在地社会の経済的な発展の過程を端的に示すものであると推定することも可能であるが、一方

では紀年銘の確認し得ない膨大な量の板碑の存在にも注意しておくべきであろう。本遺跡の板碑に見られるような石材の多様性は、端的に生産地の拡散を意味するものであり、消費の増加に伴う工人の増加とともに、より消費地に近い場所での生産が流通に好適であったという点についても積極的に検討しておくべきである。このような板碑については、紀年銘等が細い線刻によるものが多く、造立主体からの受注生産にかかるものと考えることは難しい。これらの板碑は、紀年銘が読み取り難いところから製作年代を個別的に特定することが難しいとはいえ、おおむね15世紀後半から16世紀代にかかるものと推定され、千々和氏の推定のとおり既製品として生産されていた可能性が高いであろう。このような既製品の板碑の想定は、受注生産にかかる板碑とは別の、流通という「商業」的側面においても重要な示唆を与えるものである。

おそらく、15世紀末以降、板碑の生産地の拡大が生じ、緑泥片岩の産出の少ない地域においても板碑の生産が行なわれたものと考えてよいであろう。このような生産地の拡散は、消費の増加に伴う工人の増加とともに、より消費地に近い場所での生産がその流通に好適であったという点も積極的に検討すべきである。このような板碑の生産と流通は、板碑製作技術の低下に伴う稚拙で粗雑な製品として、板碑の供養塔としての権威と価値の低下を招き、生産と流通組織の分散化が促進され、板碑のもつ宗教的性格が変容することによって、板碑生産の変容と崩壊の過程を辿るものとして捉えられるであろう。板碑は、15世紀中葉頃から追善や逆修以外の供養にかかる板碑が出現し、農民層による造立も確認しえるようになるところから造立主体の階層の拡大が指摘されている（有元1997・1988）。このような現象も、板碑の変容過程の一端を端的に示すものであろう。

16世紀後半期では板碑の生産が急速に減衰し、板碑についての性格や使用法についての伝承が近世においてすでに失われていることは、これを支えた信仰集団が解体し、これらが維持されなくなったことを端的に示すものであろう。現在、410基以上確認されている本庄市域における板碑の中でも15世紀後半以降の紀年銘を有する板碑は、秋山本覚院の寛正5年（1464年）と田端中原遺跡出土の永正3年（1506年）の2基に過ぎないことは注意しておくべき点である。

このような麁粗な板碑の分布は武蔵国内に均質・等質に分布しているのではなく、児玉郡周辺に分布の中心があることは、千々和氏の推定とは別に、児玉周辺に交通と流通の結節点の存在を想定することができる。あるいは、鎌倉街道「上道」沿いの小山川（身馴川）付近に位置していたと推定される「児玉の市」が、これに関与した可能性は否定できないであろう。また、田端中原遺跡以外では小山川流域の児玉地域の本泉地区や秋平地区においても高い分布を示すところから、この経路もこれらの板碑の主要な流通経路のひとつに相当しているものと見做すことが可能であろう。また、児玉丘陵及び台地部の周辺に分布密度が高く、平野部には低い傾向が認められることにも注意すべきかもしれない。

ともあれ、田端中原遺跡は、このように「鎌倉街道上杉道」に隣接する区域であり、この地域の幹道に沿って位置しているところから、中世においては際立った占地である。この街道によって様々な物資とともに、板碑や石造物も本遺跡に搬入されたものであろう。おそらく、本遺跡の板碑群も「鎌倉街道上杉道」を経由して本遺跡にもたらされたと考えることができる（註6）。

ともあれ、この地域の武蔵型板碑は、13～14世紀の仏教集団が関与による精製品や大形品を主とする受注生産から、15世紀以降での板碑の造立層の拡大に伴って荒川流域や都幾川流域等の初期生

産地以外へと生産地が拡散し、この過程で半既製品の生産と流通が生じたことが推定される。この過程は、板碑生産と流通にかかる板碑の製作者集団（石工）と仏教集団の関係の変化を伴うものであったことが想起され、板碑造立層の拡大に伴って民間信仰との習合が進行する状況にしたがって、逆に板碑の供養塔としての信仰上の権威が低下していったことが予想される。

板碑の流通は、在地社会の特定の展開過程を端的に示すものであるといってよい。このような類型の板碑の分布域は、独自の信仰と経済的な関係網に沿って流通したものと考えることも検討しておくべきである。このような板碑の分布は、集落間を連鎖的に展開したものと考えることは難しく、生産地からの放射状の交通形態を基礎とし、流通の結節をもつような形態で拡散分布した可能性が高いことが予想される。板碑の生産や流通に関する史料はまったく残されていないとはいえ、板碑は単なる日常的な消費材ではなく、仏教思想に基づく供養具であるところから、通常の生産ではなく特定の宗派（密教系真言宗・浄土宗・浄土真宗等）や寺院等にかかる仏教集団を背景に生産され流通した可能性が高いであろう（註7）。石工もまた仏教集団に属している可能性を考えておく必要がある。15世紀後半以降の板碑については、その分布の偏りを積極的に評価するならば生産地の分散化の過程において、特定の寺院の固定した僧侶ばかりではなく、一定の移動性をもった民間信仰に基づくような僧形の商業集団の出現も想起すべきかも知れない。このことも板碑の造立が、それまでの仏教的な信仰に基づく塔婆からの乖離を示す阿弥陀仏の来迎を希求する民間信仰への傾斜の傾向にも現れているものと思われる。

3 板碑の造立と埋置 ― 田端中原遺跡の地位 ―

田端中原遺跡から検出された墓址群は、その殆どが火葬墓によって構成されるものである。この墓址群の性格は明らかではないが、調査区東側の墓壙群では上部に敷き詰められたと考えられる小円礫が数多く分布し、あるいは低い塚状の墳丘が存在した可能性が認められるなど、他の地点と様相を異にする区域が認められた。また、この区域に近い地点では板碑を複数基伴う墓壙が多く、あるいは宝篋印塔等が存在し、また鉦と考えられる半球状の銅製品が検出されるなど、西側の墓壙群とはやや様相を異にしている。しかし、現在までの分析では墓壙群の明確な区分はできていないが、墓壙群の内部でも幾分の変化があり、この墓域内には火葬墓にも幾つかの類型があることを示している。

田端中原遺跡は、遺跡の南側に接して「鎌倉街道上杉道」とされる古道が通っている。この「上杉道」は、児玉で「鎌倉街道」の幹線である「上道」から分岐し、金屋条里を抜け本遺跡付近から丘陵部を経て、関東管領上杉氏の居城であった群馬県藤岡市の平井城方面へと延びる中世の幹道のひとつである。言い換えれば、田端中原遺跡は中世においては、「鎌倉街道上道」から分岐した「上杉道」が、金屋の水田地帯を過ぎた最初の台地先端に位置しているところから、当時はこの地域の中でもひと際目立った存在であったと考えてよいであろう。ちなみに、田端地内に調査区域が狭小であったために詳細には不明な点が多いとはいえ、柱穴群や茶毘跡等が検出された十二天遺跡（鈴木他 1891）があることにも注意しておきたい。

なお、児玉町金屋地区の内部にも本遺跡のような板碑や宝篋印塔を伴う火葬墓群が確認される墓所がある一方で、この地域の墓所の多くが土葬にかかるものであり、金屋西遺跡（恋河内 2003）や

倉林東遺跡等の土壙墓が数多く検出されているところから、火葬墓によって構成される本遺跡の墓所は、土壙墓主体の墓所とはその性格を異にしていることが推定される。なお、児玉町金屋地区の墓址群については、「金屋村」の形成との関連で触れたことがある（鈴木 2005）。

土壙内配石墓は、一部に火葬蔵骨器を埋納するものや別所観音山遺跡例のような火葬墓も認められるとはいえ、これらが基本的に遺体を囲み、あるいは棺を囲むように埋葬施設内に配石されるものであり、一般的には土葬墓の例が圧倒的であることから、系譜を異にするものと考えておくべきであろう。また、このような火葬墓や土葬墓はそれぞれに継続的な墓域を構成する傾向をもっており、相互の差異を考えておく必要もあろう。このように近世初頭以前の墓址には、多様な形式を認めることができることは、本遺跡の墓壙群を考える上で注意しておくべき点である。

火葬墓の形成は、ふつう、火葬（火葬遺構）→＜集骨→改葬＞→埋葬（火葬墓）という過程をとるものと推定される。この火葬遺構（茶毘跡）と火葬墓は、遺構を異にするものと同一の遺構の場合が考えられるが、火葬骨改葬墓としての蔵骨器を伴う墓址以外その判別には困難な部分がある。また、火葬の場と埋葬の場を異にする“火葬骨改葬墓”としての「火葬墓」と、同一の場としての“火葬遺構埋葬墓”としての「火葬墓」の存在が想定されるが、この地域においては現在までのところ「茶毘跡」と呼ばれる場合のある火葬遺構を伴う遺跡以外の火葬骨のみを埋葬した“火葬骨改葬墓”による遺構群は検出されていない。ともあれ、この茶毘から埋葬および板碑の埋置の過程での仏教的な葬送儀礼にある種の仏教者が関与したことは想像に難くない。

田端中原遺跡から検出された板碑は、一部に基部が土中に直立して検出されるなど樹立されていたと考えられるものも認められるが、このような例も墓壙上で検出されたものではない。検出された板碑の多くは、墓壙上に樹立されているのではなく、墓壙内に水平に埋置された状態で検出されるものが大半を占めており、中には複数枚の板碑を組み合わせた「棺」のような状態で検出されている例も認められる。このような板碑は、板碑の表面である種子をもつ面を下方ないしは内側に向けて配置されており、板碑の種子（阿弥陀）が埋葬遺体に向き合うように埋置されたことを示すものと推定されるものであり、板碑の取り扱いを考える上で注目すべき点であると思われる。

このような板碑埋置の状態は、入間郡毛呂山町神明台遺跡（佐藤 1996）においても確認されており、本遺跡の板碑埋置の方法にとどまらないある種の一般性をもっていたことが推定される。また、春日部市坊荒句遺跡においても、7 基の板碑が墓壙に蓋石状に埋納され成人男性の頭骨が北を向いて埋葬されていた状態が確認されている。

しかしながら、板碑は本来樹立されることを前提に製作されたものであることは、板碑の形状やその性格から推して間違いのないものと推定され、樹立を契機に板碑もつ供養塔としての機能を発揮するものであると考えてよい。板碑は、朽ちてゆく木造の供養塔とは違い、石造物に刻まれた不朽の供養塔であり、供養行為についての永遠の記憶装置として造立されたものであろう。少なくとも石造物として製作されたからには、長期にわたる造立を前提に樹立されたものであり、長期にわたって供養の記憶が喚起される媒介物である。したがって、本来は短期間で埋置すべきものであったとは考えにくい。板碑は、樹立されることによって社会的な表示機能が生じ、板碑本来の供養が社会的に表示され機能するものであろう。墓址に板碑を埋置する行為は、埋葬に関与した者達によってその存在は認知されているとはいえ、板碑のもつ社会的な表示性は失われ、板碑のもっていたで

あろう宗教的呪性は埋葬された者に帰属する状態へと変化している。おそらく、墓壙に板碑を埋置する行為は、一定期間樹立された板碑が埋葬に伴って埋置されたと考えるならば、「追善供養塔」として樹立されたものではなく、生前供養である「逆修」にかかる「逆修作善塔」としての板石塔婆であり、これを遺骨とともに埋納する行為として捉えられる可能性があろう。善行を行い功徳を積むことによって自らの菩提を弔う「逆修」として造立された塔婆は、逆修供養をした主体者亡き後、すでに塔婆としての意味を失うとともに、むしろ死後の菩提を弔う行為として死者とともに埋納されたことも容易に想起されるところである。埼玉県内の板碑を概観された有元修一氏によれば、14世紀末以前では追善供養と逆修供養が並行しているようであるが、これ以降では、追善供養の板碑は減少し逆修供養が一般的になってくることが指摘されている（有元 1988）。

ともあれ、先の神明台遺跡の土壙から検出された複数の板碑の紀年銘の開きは46年間であり、個人の逆修供養としては幾分年代的な開きがある。また、埋納されたと考えられる出土板碑相互の年代には、かなりの開きがある場合のあることも知られており、墓壙以外の施設であると推定される土壙等からの検出例も認められるようである。しかし、たとえば入間市坂東山遺跡第4号土壙から検出された板碑群は、紀年銘に100年以上の年代的な開きが認められるが、焼土・炭化物や礫群の下位から検出された板碑は4基ともに火熱により変色しており、またその下部から古銭5枚が検出されるなど墓壙と考えてよいものもある（鈴木 1996）。しかし、第10号土壙から検出された板碑は、8基のうち7基が延徳4年（1492年）11月の紀年銘をもつ逆修板碑であり、「一結集の者たちが同時に造立した板碑」（村木 1997）と考えることのできるような、有縁の者達によって造立されたものと考えてよいであろう。また、第13号土壙から検出された板碑は、延徳と文明の紀年銘があるが、比較的近い年代であることにも注意しておく必要がある。おそらく、第4号土壙出土の年代の離れた板碑群は、一番新しい延徳2年（1490年）の逆修板碑を埋置する際に、縁のある板碑を共に埋納したものと考えてよいであろう（註8）。

ともあれ、このような板碑が埋置されている墓址は、墓址群の多くに認められるわけではなく、むしろ墓址群一般からするならば極めて稀な事例であることからするならば、生前に板碑を調達し樹立した主体者は、一定の経済力を背景にしているものと考えてよいであろう。阿弥陀信仰を中心とする宗教的な背景とともに埋葬者の社会的な階層における位置と関わっていると考えることができる。本遺跡の墓址群は、板碑を伴う火葬墓群であり、14世紀前半代より連綿と形成されてきたものである。これらの時期の周辺遺跡から検出されている墓址群が、供養具や副葬品をもたない土葬墓が主体であることを考えるとき、本遺跡の墓址群は在地領主層ないしはこれに連なる者たちによって形成されたものであることが想起されるであろう。

ちなみに、現状において「五十子陣」周辺においては、銅製品の溶解に用いたと考えられる坩堝が検出されるなど一部の手工業生産者の居住も推定されるとはいえ、児玉地域に比して板碑の分布が比較的稀薄であることは、この陣の性格や板碑の用途・性格を考える上で注目しておくべき点である。ちなみに、既出の資料では本庄市西五十子地内では、康元二年（1257年）、元徳元年（1329年）、延文二年（1357年）の紀年銘をもつ板碑の存在が知られているが、いずれも15世紀後半の「五十子陣」の設営に遡るものである。また、東五十子遺跡（太田 2002）においては、板碑が18基検出されているが発掘資料であるにもかかわらず破片や欠損品が多く、また紀年銘の推定しえる2基の紀年を元

享2年（1322年）および応永16年（1409年）と判読するならば、いずれも陣の設営に先行するものである。言い換えれば、享徳の乱にかかわる軍事的な緊張の中にあっても、板碑を用いた生前供養等が五十子陣においては消極的であると見做しえることは、このような供養行為が陣のような臨時設営的な場ではなく、本貫地の周辺や墓所等の安定した土地において行われるものであったことを示唆するものであろう。発掘調査による本来的な板碑の使用にかかる出土地点は、居住地や墓所と思われる土地あるいはその周辺において顕著であることは、このことを端的に示す現象であると考えてよい。このように考えるならば、これらの板碑群は児玉党系「本庄氏」の本貫地のひとつと考えることのできる正和3年（1314年）の関東下知状にみられる「生子屋敷」等にかかる供養塔であることも積極的に検討しておくべきであろう。五十子地域の板碑についてこのように捉えられるならば、田端中原遺跡の板碑群についても児玉党系の在地領主層によって造立されたことも想起されるところである。

田端中原遺跡の位置する区域は、鎌倉時代において児玉党系「塩谷氏」の占拠する土地の縁辺部である「塩谷」の一部に相当していたと考えることができる。「塩谷氏」は14世紀～15世紀前半期においてもこの地に一定の勢力をもっていたと推定されるところから、本遺跡が塩谷氏の墓所である可能性も認めることができる。しかし、この「塩谷氏」は次々と所領を失っているようであり、15世紀後半以降史料に登場しなくなっていることに注意すべきである（鈴木2005）。もとより、当該地域での「塩谷氏」の地位を積極的に評価するならば、直接「塩谷氏」の一族にかかわる墓所と考えることも不可能ではない。しかし、15世紀後半以降、16世紀代においても継続的に墓所を営んでいることを評価するならば、むしろ新興の勢力にかかる墓所である可能性を検討しておくべきであろう。墓所としての継続性は、共通の祖先祭祀に基づく墓所という場の共同性に裏付けられた血縁的な系譜性の連続と地縁的な相対的に安定した定性的状況を示すものである。

このように考えるならば、「枝松名内塩谷」にかかる小領主層等の一族にかかる墓所である可能性も積極的に検討しておくべきであろう。「枝松名」は、建武3年（1336年）「足利直義下文」に見え、正安三年（1301年）以降、「安保郷内屋敷在家」とともに塩谷の田在家等が安保光泰に安堵されており、田端中原遺跡で検出された板碑の上限の年代とも齟齬がない。このことを積極的に評価するならば田端中原遺跡は、安保氏に連なる在地領主層によって形成されたものであると考えることも可能である。

ちなみに、「日光輪王寺大般若経奥書」に見える「安保左衛（門）三郎」は、応永3年（1396年）、田端中原遺跡から金屋条里の水田を挟んだ北東約1㎞に位置する現在の児玉町八幡山字円良岡と考えることのできる「円岡」で、「丹治光泰」として写経のための大般若経を受け取ったことが知られている。「円岡」を号した「丹治光泰」は、この年23歳とされており、先の安保（光阿）光泰とは別人と考えることができるが、丹党系の安保氏に連なる者が田端中原遺跡からも容易に望見できる範囲にも居住していたと考えることができる点にも注意しておきたい。ともあれ、「塩谷」の地に安保氏の所領が存在していたことは注目すべき点であり、その広大な墓域や墓壙数から考えるならば、田端中原遺跡は一般の村落にかかる墓所や単なる「屋敷墓」と考えることも難しいであろう。おそらくは、特定の阿弥陀信仰に基づく在地領主層に連なる一族を中心とする者達の墓所であろう。なお、永禄12年（1569年）、御嶽城が武田勢の猛攻を受けて陥落した結果、この地の安保氏の所領は没収

され、安保氏が断絶したと推定されることにも注意しておくべきである。

本遺跡のある「田端」は、『新編武蔵風土記稿』によると元和年中の開墾と伝えられるが、この記載を事実とすると基本的には本遺跡の墓壙中から出土する古銭に寛永通宝を含むものが比較的少ないことは、17 世紀初頭の「田端村」形成以前の居住者による埋葬にかかるものと考えることができる。このように考えることが可能であるならば、この区域においては 16 世紀代に一旦村落が廃絶し、その後に新しく開発されたものが「田端村」であると考えることができる。しかし、表土中や土壙内からは数点の寛永通宝（初鋳寛永 13 年・1636 年）も出土しているところから、「田端村」形成以降の供養や造墓も皆無であったと断言することも難しい。ちなみに、今日においても隣接地に共同墓地が位置しており、何らかの係累が村の開発者の中に含まれていたことも想起すべきかもしれない。ともあれ、「田端村」には、延命地蔵を本尊とする真言宗の「宝珠山延命寺」という山号をもつ「錫杖寺」の存在が知られているが、すでに廃寺となっておりその詳細は不明である。なお、この田端字南屋敷には、明治 5 年創建という村持ちの「地蔵堂」の存在も知られているが、これは先の「錫杖寺」の堂を再興した可能性もあろう。

ともあれ、本遺跡で検出された墓所は、少なくとも昭和 3 年に開墾されるまで、墓所としての存在は忘れ去られており、この地は山林となっていたのである。墓所の放棄は、墓所を維持し供養すべき主体者が何らかの形で断絶したことを示唆するものであり、継続的に居住した者達の社会的な組織の崩壊を意味するものとして、この居住者の断絶の契機に注目しておくべきであろう。すでに見たように田端中原遺跡で検出された板碑群は、その年代から単純に児玉党系「塩谷氏」をその造立主体と考えることには困難がある。ここでは安保氏の進出の過程で、獲得された「枝松名内塩谷郷」の区域にかかる在地領主層に連なる者達によって造立されたものであることを推定したが、このように捉えるならば、永禄 12 年（1569 年）の御嶽城の落城に伴う安保氏の没落とともに本遺跡も終焉に向かったと考えることができるであろう。

本遺跡から検出された墓所における板碑群の推移は、板碑生産の拡大や流通形態の変化、あるいは造立主体の階層の拡大等の歴史的な変化の過程を反映し、これらの過程が記録されていると見做すこともできる。本遺跡を含む金屋地域では、15 世紀後半を前後する時期に遺跡の形成に大きな不連続が認められ、村落をはじめとする地域社会のあり方に変動があったことが予想される（鈴木 2005）。この「享徳の乱」を前後する時期を挟む地域社会の変化は、板碑生産の変容過程と直接的な相関は認めにくいとはいえ、この間に板碑の生産体制と流通、あるいは板碑に関わる阿弥陀信仰を中心とする観念や習俗に急速な変化が生じていたことを意味するものであろう。このような既製品の板碑の出現と生産地の拡大は、商品生産としての傾斜を認めることが可能であるところから、在地領主層に連なる階層による造立から、土豪や農民層の経済的自立と独自の信仰の獲得による造立という造立主体の拡大の過程に伴う変化である可能性があろう。ともあれ、田端中原遺跡はこのような変化の時期を挟みながら連綿と板碑の造立による供養が続けられていたことは、彼らの信仰と葬送習俗の強靭さを示すものである。

板碑とその供養行為の個人あるいは有縁の者達への帰属性は、この時期の共同体的なイデオロギーとは異なった論理の存在を示すものである。とりわけ「逆修」という観念は、この時期に個人の極楽往生を希求する思想が広く浸透していたことを意味するものであろう。15 世紀後半以降に盛行す

ると推定される既製品の板碑の出現と生産地の拡大は、商品生産としての側面を認めることが可能であり、「享徳の乱」以降の不安定な世情に対応する極楽往生個人主義が土豪層や上層農民層へと浸透したと捉えるならば、彼らの経済的自立と独自の信仰の獲得の過程を示すものであり、中世的な「村落共同体」の共同性の弛緩の過程を伴っていたと考えることができる。このように考えるならば、板碑の生産と流通の変化の過程は在地社会の変化の過程を端的に示すものと考えることができるであろう。

ま と め

田端中原遺跡は、14 世紀前半から 16 世紀代にかけて連綿と形成された火葬墓主体の墓址群であり、50 基におよぶ板碑および宝篋印塔等を伴った墓所である。本遺跡は、発掘調査以前に検出された 50 余基の板碑を加えると 100 基以上におよぶ膨大な板碑が集中して出土した埼玉県内でも稀な墓址群であるといってよいであろう。本遺跡から出土した板碑を観察すると、幾つかの形態と製作方式によるまとまりを確認することが可能であり、このような多様性は製作の年代や製作地の推移を反映したものと捉えることができる。

この地域の板碑は、13 ～ 14 世紀においては相対的に精製を主とするものであり仏教集団が関与による受注生産が想定される。この地域では 15 世紀以降、絹雲母片岩製の板碑が出現するとともに小形の麁粗な板碑が増加する傾向を読み取ることができる。このような現象は、板碑の造立層の拡大に伴って、荒川流域等の少数の生産地での生産から小山川流域等へと生産地が拡散し、この過程で半既製品の生産と流通が生じたことを推定させるものである。このような変化の過程は、板碑生産と流通にかかる板碑の製作者集団と仏教集団の関係の変化想起させるものであり、板碑造立層の拡大に伴って民間信仰との習合が進行するとともに、板碑本来のもつ供養塔としての権威の低下を招来したことを予想させるものである。

田端中原遺跡から検出された板碑は、墓壙内に板碑の種子である阿弥陀が埋葬遺体に向き合うように埋置された状態で検出されるものが大半を占めている。このことは、これらの板碑が一定期間樹立された後、埋葬に伴って埋置されたと推定させるものであり、生前供養である「逆修」にかかる塔婆として捉えられる可能性がある。本遺跡で検出された板碑群は、その年代から直接児玉党系「塩谷氏」をその造立主体と考えることには困難があるところから、本章ではこの地域への安保氏の進出の過程で獲得された「枝松名内塩谷郷」の区域にかかる在地領主層に連なる者達によって造立されたものであること推定した。本遺跡の形成過程は、板碑の生産体制と流通あるいは板碑に関わる阿弥陀信仰を中心とする観念や習俗に急速な変化の時期を挟みながらも、連綿と板碑の造立を伴う信仰と葬送習俗が続けられていたことを示すものであろう。

武蔵における中世の普遍的な遺物として「板碑」を捉える千々和實氏の多くの論巧は、数多くの重要な指摘を含むものである。しかし、板碑の流通形態を考える上で板碑自身の分類と差別化が図られなければ、流通の結果としての移動の問題を論じることは困難であろう。板碑のような石造物は、不朽の記憶装置であり、造立者は永く記憶を喚起する記号として願いを込めて造立したと考えることができるであろう。今後は、このような板碑のもつ属性を前提に分析する必要性があろう。本稿では、板碑の製作工程の分析や石材という板碑のもつ基本的属性に着目することによって、板碑の

もつ歴史的な意義に接近するための基礎的な分析を行った。また、田端中原遺跡の板碑群のもつ歴史的な意義を分析するための前提準備の基礎作業を行い、一定の見通しについての試論を提示した。

板碑研究は、板碑自身に紀年銘をもつ場合が多いことから、その編年研究は立ち遅れていることは否めない。今日、紀年銘や願文や造立趣旨等の金石文中心の研究から、製作工程の詳細な観察に基づく研究に移行しつつあるが、これらの分析を踏まえた編年的な把握を行うとともに類型化を図り、分布論的に再構成することによって普遍的に存在する板碑の研究が中世考古学のひとつの基軸になると信じるところである。本章は、板碑に対する文献の渉猟や基礎的な分析が充分とはいえないが、板碑の生産と流通、またその使用から埋置に至る過程についての地域社会の内部における具体的な姿を描くための、ひとつの視点として提示したものである。（鈴木徳雄）

註

(1) ここでは、板碑が多数出土した地点を中心とする遺跡を「田端中原遺跡」、昭和３年に掘り出され供養のために集積した地点を「田中供養地」とし、「田中供養地」はあくまでこの供養のために集積された地点をさし、遺跡名とは区別しておきたい。

(2) 板碑は、「板石塔婆」とされる場合も多く、もとより「塔婆」としての目的で製作されたものが多いと考えることができるが、ここでは研究史を踏まえ今日においても一般的な呼称となっている「板碑」と呼称する。なお、ここで“板碑”とするものは、すべて「武蔵型板碑」をさすものである。なお、児玉地区の板碑については、四半世紀も以前、埼玉県の板碑の詳細分布調査で児玉地区の地区調査員の先生方に付き随いながら記録のお手伝いをさせていただいた。その時の経験が本章の基礎となっている。地区調査員の多くの先生方が故人となられたいま、ようやくその頃の思いの一端を形にすることができた。当時お世話になった皆様にあらためて感謝申し上げたい。

(3)『東京国立博物館所蔵板碑集成』（友枝他 2004）は、写真、拓影図、実測図に加え、具体的な製作過程の観察が行われるとともに石材の分析も実施されるなど、今後の板碑研究のひとつの方向性を示すものであろう。もとより本書の記載は比ぶべきもないが、本章の分析の参考にさせていただいた。製作過程の推定等には異なる部分があるとはいえ、今後の板碑分析の基礎資料として活用されるべきものであろう。

(4) 阿弥陀種子の表現には、標準的なキリーク（A型）とキリークのイー点がクー点の間に入る異体字（A型）が区分されている。これらは、時期による増減はあるものの基本的に同時並存するものであり、おそらく工人の系統差を示す可能性があろう。

(5) 田中供養地の板碑等については、すでに旧稿（鈴木 1991）で触れたところである。なお、前稿（鈴木 2005）において、田端中原遺跡について「15 世紀から 17 世紀に及ぶ火葬墓群」と記述したがこれは遺跡の形成期の一端を示したものであり、火葬墓群の時期を示したものではないので、本書で訂正しておきたい。なお、本稿と関連するのは（鈴木 2005・2007）である。なお、本章を記すにあたり平田重之氏には貴重なご意見を頂戴した。

(6) この地域の板碑については、上武山地内の交通に関連して旧稿（鈴木 2007）で触れたところがある。しかし、児玉郡に接する山沿いの小山川流域にあたる秋山地区を除く旧那珂郡には板碑自身の分布が稀薄であり、均質に分布するような単純な状況ではないことにも注意しておきたい。信仰に関わる部分があるのであろう。下総地域等（野田市域等）においても検出されており、これらの類型も一時的な製作ではなく一定の流通形態をもっていたことが推定される。このように下総地域等の遠隔地に板碑が分布していることは、舟運の存在を考えておく必要があろう。

(7) この地域の仏教集団について考える上では、神流川の対岸に位置する「緑野寺」とされる浄法寺があり、弘仁八年に円澄・広智が最澄に灌頂を受けたとされる。また、円仁が訪れたのち 天台宗となったとされる「金鑽寺」とも呼ばれた金鑽大師「大光普照寺」があり中世の写経等の中心となった。このように狭い地域が長期にわたり天台宗の拠点となっていたことは注意しておくべきであろう。なお、この大光普照寺の旧寺地と推定されている「元大師跡」からは鎌倉永福寺系の瓦が出土している。しかし、これらの寺院が直接板碑の造立に関与したと考えることは難しいであろう。

追記

本報告書は、児玉町遺跡調査会で編集を開始していたものであったが、この整理途上で記述してきた草稿に若干の加除筆を行ったものが本章Ⅳ等である。なお、最終的な資料の再観察や検討などを行うことができず内容に齟齬が生じている部分があることは遺憾である。当面、再検討を行うことが困難な状況であるところから、後日を期すことで大方のご海容を希うものである。

引用・参考文献

有元修一・村井武文（1987）「板碑の分布と荒川の役割」『荒川』人文Ⅰ　埼玉県

有元修一　（1988）「板碑」『新編埼玉県史』通史編２　中世

大熊季広　（1998）「児玉町山崎上ノ南遺跡の調査」『第 31 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか

大熊季広　（1998）「児玉町山崎上ノ南遺跡」『木簡研究』第 20 号

大屋道則他（1988）『真鏡寺後遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第８集

恋河内昭彦（1990）『下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第 11 集

恋河内昭彦（1991）『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第 14 集

恋河内昭彦（2000）『天田遺跡－Ｂ地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第 11 集

恋河内昭彦（2003）『金屋西遺跡－Ａ・Ｂ地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第 13 集

柴田　徹　（2004）「板碑の石材」『東京国立博物館所蔵板碑集成』雄山閣

菅谷浩之他（1980）『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第１集

鈴木徳雄　（1991）「塩谷氏館跡と児玉党の形成」『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第 14 集

鈴木徳雄　（1995）「古代児玉郡の土地利用と方形館の成立」『堀向・篠塚・柿島・内手・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第 18 集

鈴木徳雄　（1997）「古代北武蔵の土地利用と集落」『日本歴史』9 月号第 592 号

鈴木徳雄　（2005）「児玉丘陵における地域社会の形成」『高柳原遺跡－Ｂ・Ｃ地点の調査－』児玉町文化財調査報告書第 39 集

鈴木徳雄　（2007）「児玉郡における山地域の遺跡と交通路」『塔ノ入遺跡』本庄市遺跡調査会報告書第 13 集

鈴木徳雄他（1981）『金屋遺跡群Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第２集

鈴木徳雄他（1987）『真鏡寺後遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第７集

千々和實　（1971）「板碑工作と中世商品的供給源の一考察」『上武大学論集』第３号

千々和實　（1974）「板碑」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館

徳山寿樹　（1992）「児玉町田端中原遺跡の調査」『第 25 回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか

徳山寿樹他（1996）『東鹿沼・藤塚Ｂ１・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第 21 集

徳山寿樹他（2000）『塩谷下大塚遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第 10 集

友枝　努　（2004）「考古学から見た板碑」『東京国立博物館所蔵板碑集成』雄山閣

鳥居龍蔵　（1927）「児玉郡の先史・歴史時代概論」『上代の東京と其周囲』磯部甲陽堂

楢崎修一郎（2007）「群馬県出土中世火葬遺構」『研究紀要 25』群馬県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県立歴史資料館編（1981）『埼玉県板石塔婆調査報告書』埼玉県教育委員会

佐藤巻生他（1995）『第６回特別展　発掘される板碑』毛呂山町歴史民俗資料館（展示図録）

写 真 图 版

田端中原遺跡 全景

田中供養地

発掘風景

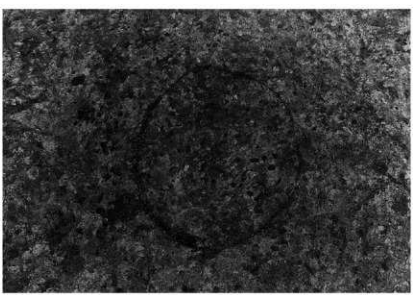
写真図版２

SI-01 東から

SI-01 遺物出土状態

SI-02 南から

SI-03 東から



SI-03 炉跡

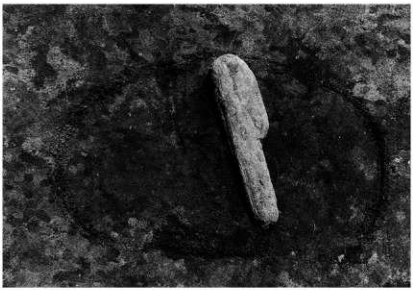
SI-03 遺物出土状態

写真図版４

SI－04 北から

SI－04 遺物出土状態

SI－05 北から



SI-05 炉跡

SI-06 東から

SI-06 炉跡

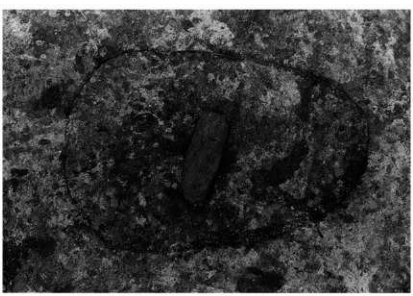
写真図版６

SI-06 遺物出土状態（1）

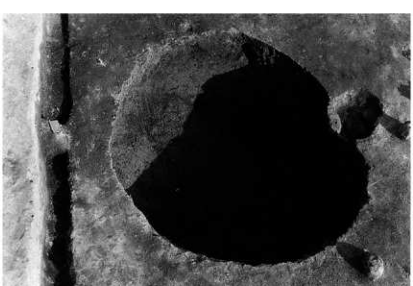
SI-06 遺物出土状態（2）

発掘風景

SI-07 北東から



SI-07 炉跡



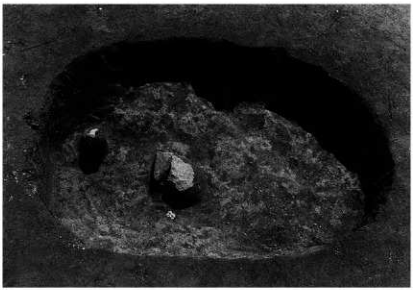
SI-02 内SK-03

写真図版８

SK-36 板碑出土状態 東から

SK-52 北東から

SK-63 北から



SK-67 遺物出土状態 東から

SK-73 遺物出土状態 東から

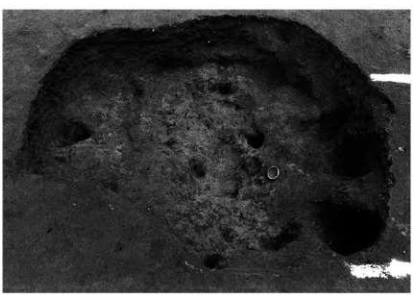
SK-82 西から

SK-93 東から

SK-94 北西から

SK-104 西から

SK-109 西から



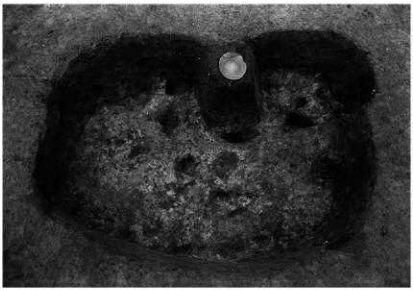
SK-112 西から

SK-112 遺物出土状態

SK-114 東から

SK-116 板碑出土状態 西から

SK-118 遺物出土状態 北から



SK-119 南東から

SK-119 遺物出土状態

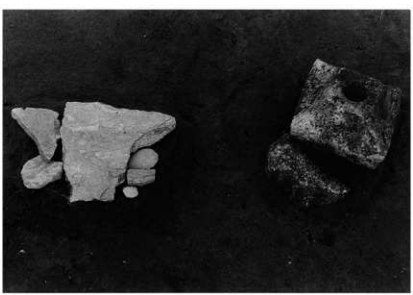
SK-122 東から

SK-125 南西から

SK-128A 西から

SK-136 宝篋印塔出土状態 西から

SK-156・157 北から



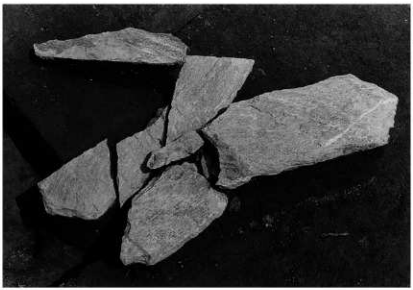
SK-160 遺物出土状態

SK-160 土層断面 北西から

SK-162 板碑出土状態 西から

SK-175

SK-180 板碑出土状態 西から



SK-184 板碑出土状態 西から

SK-185 遺物出土状態 西から

SK-185 周辺遺物出土状態 北から

SK-186 板碑出土状態 西から

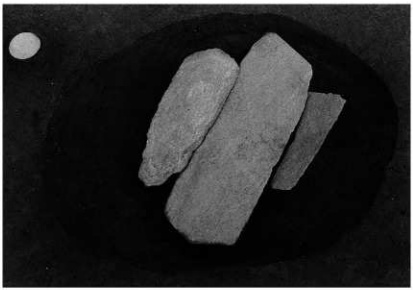
SK-187 遺物出土状態 西から

SK-187 板碑出土状態

SK-203・204 北から

SK-207 板碑出土状態 東から

SK-207 板碑出土状態



SK-211 板碑出土状態 北西から

SK-211 遺物出土状態 北西から

SK-216 西から

SK-217・218 西から

SK-225 遺物出土状態 西から

発掘風景

SI-01 出土遺物

SI-02 出土遺物

SI-03 出土遺物

1

2

3

4

5

SI-04　出土遺物

1

2

3

4

SI-05　出土遺物

1

2

3

SI-06　出土遺物

SI-07　出土遺物

SD-02　出土遺物

土坑出土遺物（1）

SK-154-1

SK-187-1

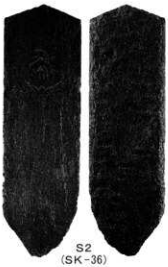
SK-187-2

SK-187-3

SK-187-4

SK-188-1

S1
(SK-36)



S2
(SK-36)

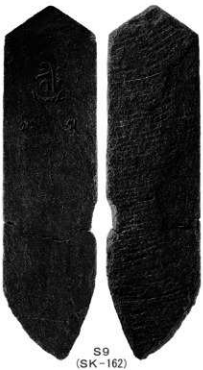
S3
(SK-36)

S4
(SK-36)

S5
(SK-36)

S6
(SK-63A)

S8
(SK-118)



S9
(SK-162)

S7
(SK-116)

土坑出土遺物 (2)

S10
(SK-162)

S11
(SK-162)

S12
(SK-163)

S13
(SK-180)

S14
(SK-180)

S15
(SK-180)

S16
(SK-180)

S17
(SK-180)

S18
(SK-183)

S19
(SK-183)

S20
(SK-183)

S21
(SK-183)

S22
(SK-183)

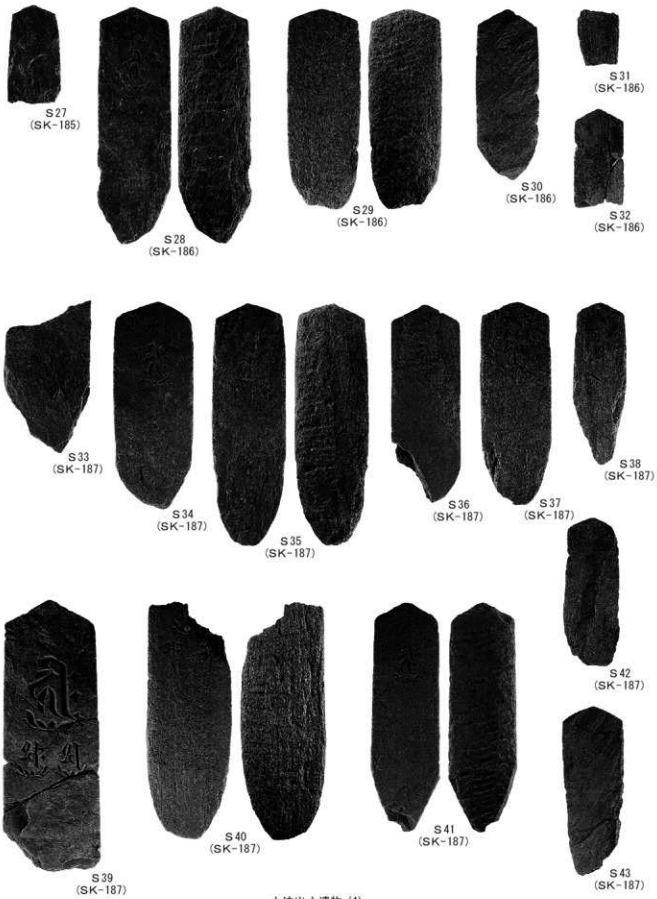
S23
(SK-183)

S24
(SK-183)

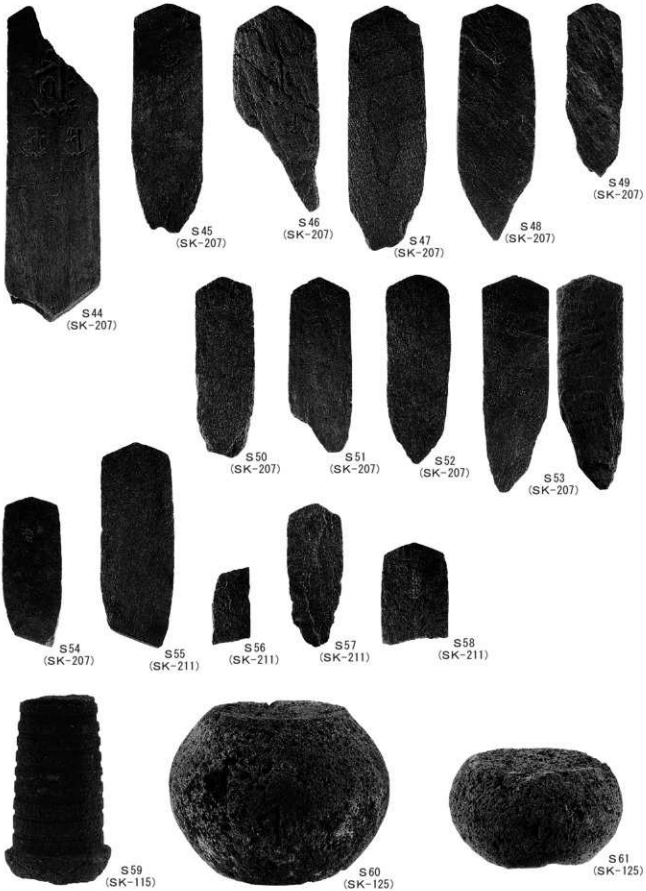
S25
(SK-184)

S26
(SK-184)

土坑出土遺物 (3)


S27
(SK-185)
S28
(SK-186)
S29
(SK-186)
S30
(SK-186)
S31
(SK-186)
S32
(SK-186)
S33
(SK-187)
S34
(SK-187)
S35
(SK-187)
S36
(SK-187)
S37
(SK-187)
S38
(SK-187)
S39
(SK-187)
S40
(SK-187)
S41
(SK-187)
S42
(SK-187)
S43
(SK-187)

土坑出土遺物 (4)


S44
(SK-207)
S45
(SK-207)
S46
(SK-207)
S47
(SK-207)
S48
(SK-207)
S49
(SK-207)
S50
(SK-207)
S51
(SK-207)
S52
(SK-207)
S53
(SK-207)
S54
(SK-207)
S55
(SK-211)
S56
(SK-211)
S57
(SK-211)
S58
(SK-211)
S59
(SK-115)
S60
(SK-125)
S61
(SK-125)

土坑出土遺物 (5)

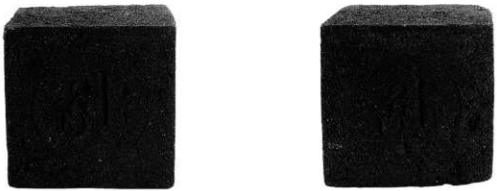
S62
(SK-136)

S63
(SK-160)

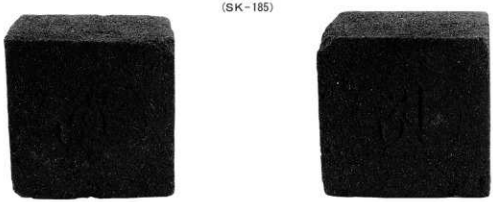
S64
(SK-160)

S65
(SK-185)

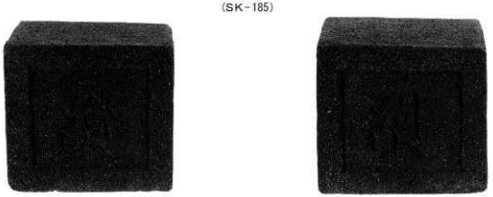
土坑出土遺物 (6)



S66
(SK-185)



S67
(SK-185)



土坑出土遺物 (7)

S68
(SK-185)

S69
(SK-185)

S70
(SK-211)

S71
(SK-231)

土坑出土遺物 (8)

M1
(SK-126)

M2
(SK-39)

M3
(SK-144B)

M4
(SK-106)

M5
(遺構外)

M6
(SK-99A)

M7
(SK-99B)

M8
(SK-132)

M9
(SK-62)

M10
(SK-210)

M11
(SK-223)

M12
(遺構外)

M13
(遺構外)

M14
(SK-138)

M15
(SK-64)

M16
(遺構外)

M17
(SK-182)

M18
(SK-39)

M19
(SK-129)

M20
(SK-62)

M21
(SK-154)

M22
(SK-154)

M23
(SK-124)

M24
(SK-121)

M25
(SK-132)

M26
(SK-129)

M27
(遺構外)

M28
(SK-62)

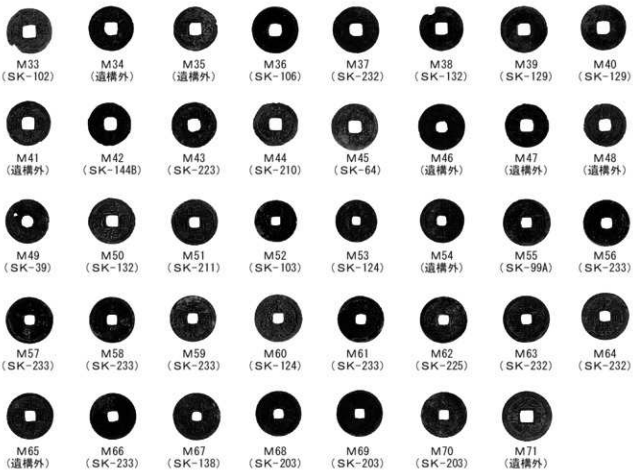
M29
(SK-121)

M30
(SK-211)

M31
(SK-160)

M32
(SK-181)

田端中原遺跡出土古銭 (1)



田端中原遺跡出土古銭 (2)

遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たばたなかはらいせき
書　　名	田端中原遺跡
副 書 名	板碑を伴う中世火葬墓群の調査
巻　　次	―
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告書
シリーズ番号	第29集
編著者名	鈴木徳雄 尾内俊彦 山本千泰
編集機関	本庄市遺跡調査会
所 在 地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 電話0495-25-1185
発行年月日	西暦2010（平成22）年9月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たばたなかはらいせき 田端中原遺跡	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市 こだままちおおあざたばた 児玉町大字田端 あざなかはら 字中原308-1	112119	54-111	36°11′45″	139°6′47″	1991.04.02 ～ 1991.08.18	2500㎡	建売住宅建設

所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田端中原遺跡	集 落 墓 跡	古墳時代 中　世 中　世	竪穴住居跡 溝状遺構 火葬墓	土師器 板　碑 板　碑 宝篋印塔 五輪塔 かわらけ 内耳鍋	板碑を伴う中世火葬墓群が検出された

本庄市遺跡調査会報告書　第29集

田端中原遺跡

― 板碑を伴う中世火葬墓群の調査 ―

平成22年９月21日　印刷
平成22年９月30日　発行

発行／本庄市遺跡調査会

〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号
本庄市教育委員会内
電話　0495-25-1185

印刷／山進社印刷株式会社